EPISODE II

Jenseits von Gut-und Bose

善悪の彼岸 上

愛沢 匡

ファミ通文庫

SPECIAL STORY

愛沢 匡
Tadashi Aizawa

一九七六年生まれ。東京在住。二〇〇二年に「バイオハザード小説大賞」にて金賞を受賞し、作家デビュー。大学ではラテンアメリカ文学を専攻。趣味は打楽器を叩くこと、集めること。最近は、ちびちびと小説を書きながら、編集兼デザイナーとして活躍(?-)中。原稿はInDesignで執筆。

射尾卓弥
Takuya Io

イラストレーター。一九七五年生まれ。ガンダムから美少女ゲームの原画イラストまで幅広いジャンルで活躍中。本書は初の装画作品。モデラーとしての活動も極たまに……。ワンダーフェスティバル第二回ワンダーショーケース選抜者。愛車はデザインラインのちぐはぐさがお気に入りの珍車、『WILLサイファ』。

カバーイラスト　射尾卓弥

©2001 2004 NAMCO LTD.,ALL RIGHTS RESERVED.

ゼノサーガ エピソードⅡ

善悪の彼岸　上

愛沢 匡

ファミ通文庫

ゼノサーガ エピソードII

Xenosaga EPISODE II

Jenseits von Gut-und Bose

善悪の彼岸 上

Pellegri
ペレグリー

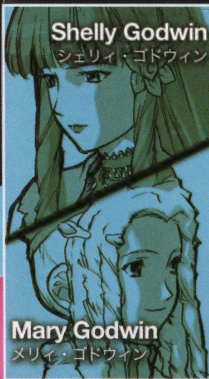
マーグリスの副官としてU-TIC機関の実働部隊をサポートする女性。物腰は柔らかいが、目的遂行のためには非情な手段をもいとわない一面を持つ。

Albedo Piazzola
アルベド・ピアソラ

不死ともいえる再生能力を持つ白髪のU.R.T.V.。モモに封じられた「Y資料」に異常なまでの執着を見せる。

Dimitri Yuriev
ディミトリ・ユーリエフ

遺伝子操作で生まれたU.R.T.V.の生みの親。U.R.T.V.を開発した組織ユーリエフ・インスティテュートの責任者。

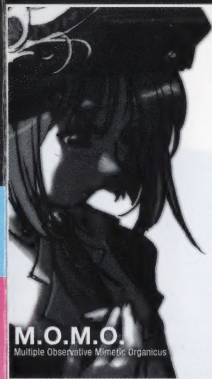
Shelly Godwin
シェリィ・ゴドウィン

Mary Godwin
メリィ・ゴドウィン

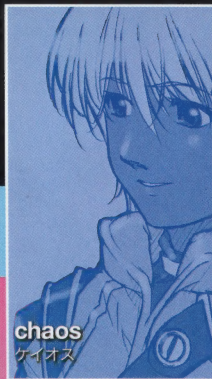
クーカイファウンデーションに身を置く姉妹。ガイナンとJr.のサポートを務める。

Gaignun Kukai
ガイナン・クーカイ

ミルチア政府により設立された特殊財団クーカイ・ファウンデーションの代表理事。Jr.やアルベドと同様にU.R.T.V.のひとり。

Jin Uzuki
ジン・ウヅキ

シオンの兄。元星団連邦軍大尉。14年前のミルチア紛争後、退役し、現在は第二ミルチアで古書店を営む。

M.O.M.O.
Multiple Observative Mimetic Organicus

グノーシスの観測が目的でU-TIC機関の創始者である故ヨアキム・ミズラヒ博士によって開発された百式汎観測レアリエンのプロトタイプ。

chaos
ケイオス

グノーシスを消滅させる謎の能力を持つ少年。見た目は若いが憂いをたたえた表情と達観した発言から、どこか老成した印象を受ける。

Shion Uzuki
シオン・ウヅキ

巨大コングロマリット、ヴェクター・インダストリー第一開発局に所属。KOS-MOS開発計画統合オペレーションシステムの開発主任。

Pope of the Ormus
教皇

移民船団（オルムス）の教皇と崇められる老人。U-TIC機関と精通しているようだが、その正体は謎に包まれている。

Margulis
マーグリス

絶対的なカリスマとして君臨しているU-TIC機関総司令官。14年前のミルチア紛争で暗躍していた人物。

Helmer
ヘルマー

第二ミルチア自治州政府代表討議員。元星団連邦軍の中将という肩書きを持つ。軍人時代からJr.たちとは縁が深い。

Juli Mizrahi
ユリ・ミズラヒ

故ヨアキム・ミズラヒ博士の妻。ミルチア紛争の元凶となった夫を恨み、博士とともに開発した娘にそっくりのモモに対して不寛容な態度を取る。

Allen Ridgely
アレン・リッジリー

ヴェクター第一開発局副主任。シオンの部下として、KOS-MOS開発計画統合オペレーションシステムの開発に就く。

Canaan
カナン

A.M.W.S.の操縦技術に特化したレアリエン。ミルチア自治州政府代表のヘルマーにより非公式の任務を命ぜられる。

ZIGGY
ジギー

連邦警察に所属していたが、殉職後、ライフリサイクル法によって蘇生された。サイボーグとしての名称は「ジグラット8」。モモの護衛任務に就く。

Jr.

ウ・ドゥに対抗するべく作られたU.R.T.V.のひとり。現在はガイナンとともにクーカイ・ファウンデーションの代表理事を務める。

KOS-MOS
Kosmos Obey Strategical Multiple Operation System

ヴェクター・インダストリーにより最新技術を結集して設計・開発された女性型の戦闘用アンドロイド。開発の背景には謎の部分が多い。

CHARACTER'S PROFILE（登場人物紹介）

Xenosaga EPISODE II Jenseits von Gut und Bose

ゼノサーガ エピソードII

善悪の彼岸　上

愛沢 匡

ファミ通文庫

口絵・挿絵イラスト／射尾卓弥

序

……かくて人の世は聖処女の腹より古（いにしえ）の救世主の生まれたその年を一の年とし、それより年のめぐるごとに暦（こよみ）を積み重ねた。

およそ二千と数十の歳月が流れた後、人類はある湖畔にて、これまでの歴史観をまったく覆す未知の構造体を発見した。

人は畏怖（いふ）を込め、これをゾハルと名づけた。

＊

この構造体の発見に、人類文明はおののき、また興奮、熱狂した。そして、その発見がもたらす真の危険には気づかなかった。

あるゾハルの研究者がかつて語った。

かの時期において——人類がゾハルを研究していたのか。あるいは、ゾハルこそが人類を研究していたのか。

当時の記録は、人類発祥の惑星と伝えられるロスト・エルサレムとともにすでに失われ、かの破滅にむけて、具体的にどのような事象が連続したのか詳細は不明である。

結果として、人類は故郷を失い、大量の人間が虚数空間に呑み込まれた。
ゾハル発掘も指揮したヴェクター・インダストリー社の主導で、人類は、その存亡を賭（か）けて、空間跳躍を可能にするU.M.N.（ウーヌス・ムンドゥス・ネットワーク）の初期開発に成功、故郷の星を捨て、外宇宙の異邦者となった。

＊

四千年の時が流れた。
人類は、五十万におよぶ星々に散って、新たな文明を謳歌（おうか）していた。
各々の惑星に敷かれた政府を、星団連邦議会が束ね、星間の流通は連邦の統治するU.M.N.が担（にな）った。
U.M.N.は、ゾハルをエネルギー源として外宇宙に情報と交通の網の目を張り巡らす。これが惑星間に横たわる時間と空間の超克をもたらし、超広域における人類の共存を可能にしたのである。
人類は、ライフリサイクル、肉体のサイボーグ化などの技術を高め、宇宙時代における肉体の完成を模索していった。
また、レアリエンという合成人間の開発に成功し、異邦者の孤独を癒（いや）した。
しかし、人類は、故郷喪失の記憶を決して忘れることはなかった。
オリジナルゾハルは、U.M.N.の実利的な技術研究のみならず、故郷喪失の原因究明に結びつく、この宇宙すべての謎を究明するための研究対象だった。
この構造体は諸々（もろもろ）の経緯を経て、ある惑星に安置されることになった。

惑星の名はミルチアと呼ばれていた。
ゾハル研究の第一人者ヨアキム・ミズラヒ博士は、この地にゾハル研究組織ミズラヒ脳物理学研究所を設立、後に連邦政府によって設立されたU-TIC機関の総責任者となる。

＊

星団連邦政府の管理のもと、U-TIC機関は、ヨアキム・ミズラヒ博士の指導により、オリジナルゾハルの研究を進め、その特性をかなりの程度で保持するエミュレーターの開発に成功するなど、ゾハル研究はこの時期に飛躍的な発展を遂げた。
しかし、突如、連邦各地で相次いだレアリエンたちの大暴動に引き続き、U-TIC機関の武装蜂起、謎の存在グノーシスの大量出現など危機的な事象が相次ぐ。
その後、ゾハルの制御装置ウ・ドゥが暴走し、惑星ミルチアはオリジナルゾハルとともに二重ブラックホールに囲まれ、宇宙に孤立してしまう。
この一連の事象は、ミルチア紛争と称された。
ヨアキム・ミズラヒ博士はこの紛争の中で命を失った。
しかし、博士の到達したゾハル研究の鍵となるY資料というデータは、彼の故き娘を模倣したレアリエンの内部に保存された。
故ミズラヒ博士は紛争の首謀者と目され、恐怖と侮蔑の対象として星団にそ

の名を轟かせることになった。

U-TIC機関は星団連邦によって解体されたが、その一部はより過激な信条を掲げるテロリスト組織としてひそかに存続していた。

ミルチアの人びとは新たな惑星に植民し、これを第二ミルチアと名づけた。

ミルチア自治州政府が組織され、ミルチア紛争沈静化に功績のあったヘルマー元中将が、その政府の代表に選出された。

ヘルマー政権は惑星軌道上のスペースコロニーにミルチア紛争の原因究明を主目的とするクーカイ・ファウンデーションを設立し、星団連邦内で独自の路線を歩きはじめる。

*

……記録によれば、かのミルチア紛争末期、連邦軍参謀本部の司令官たちは、U-TIC機関鎮圧のため、生体兵器U.R.T.V.（U-レトロヴァイラス）をミルチアに投入することを決定した。

しかし、U.R.T.V.の暴走を懸念したヘルマー中将は秘密裡に紛争の戦火の燃え盛る惑星ミルチアへ、ふたりの男を送り込んだ……。

■

【第一章】ミルチア残像空域

I

エンセフェロンダイブ記録《ミルチア紛争》ファイル整理No.１２７
被験者・code／Canaan／レアリエン特殊タイプ・詳細不詳

雲海がほどけ、霞（かすみ）になって左右に流れた。
E.S.アシェル（Asher）は、ミルチア首都上空に滞空した。
カナンは目を細めて周囲をうかがった。
機内のモニターはすべての方位をほぼ網羅している。
頭上の空は赤黒い雲海で覆われていた。
盆地を取り囲む遠い山脈から、残陽が射（さ）し込み、刻々と渋みを増している。
黒い盆地の底いちめんにばら撒（ま）かれた都市（まち）の灯（ひ）は、宇宙の漆黒に染みた星雲のように無機質に息をひそめ、コクピットは静寂で満たされていた。

いる。
わっていた人間たちのことはすでに見捨て、最期のときにむかって静かに身を横たえて
消え失せていく文明の、滅びの軋みさえ聞こえない。瀕死の街は、その表面を這いま

カナンは目をつむってシートに背を沈めた。

小刻みな振動——信号に変換された外界。気流の渦がE.S.アシェルの可動部に絡まっている。カナンは頭の中で地表と機体との距離関係を計算、推定する。

大気圏内だが、上下の感覚が少し混乱している。軌道上からの急速降下で、Gを過剰に受けすぎたゆえの神経錯乱だろう。ボディ適性閾値を超えた代償だ。頭は冷えていても、体が驚いている。人の形にデザインされている以上避けようのない神経の混線だった。

カナンはそのままの姿勢で少しずつ肉体とE.S.アシェルの機動をなじませ、空に浮かぶ一体感に無言で没頭する。

「機体表面温度、正常値に。通常運航モードにシフト。座標再計測」

斜め後方上部に設置された後部座席ナビシートから本降下を補佐するナビゲーター、ケイオスの声が聞こえる。カナンの視線に気がついて、緑琥珀色の瞳がカナンを見下ろした。

銀髪と褐色の肌は夕陽の色に染まっていた。

「——ポイントMN四四一まで距離、一二三、六六、二二、侵入角度の誤差は〇・三。

この分だとほぼ問題なく目的地まで直行できる」
カナンは軽くうなずき返した。
さっきまで頭の中に描いていた空の地図とそれほど大差はない。機体も自分もその性能を順調に発揮している。しかし、ブリーフィングのときに受けた重く嫌な印象は思考から完全にはぬぐえなかった。
手元のＨＵＤ（ヘッド・アップ・ディスプレイ）にリストアップされた子どもたちの映像を眺める。
Ｕ.Ｒ.Ｔ.Ｖ.――数百人の子どもたちの顔。亜麻色の髪、大きな瞳、小ぶりな鼻と唇、人間の年齢でいえば十二歳くらいだろう。男女差を除けば、後はどれも同じ個体に見えた。
カナンの脳内に増設されたデータベースの網の目を、識別コードの群れが映像と同期してスクロールしていく。
しかし、データ検索を繰り返しても、保護対象であるこの子どもたちについての正確な情報にたどりつくことはできない。
カナンは眉をひそめる。
データベースは狂おしくループし、頭の中を引っ掻き続ける。
ケイオスの声がカナンの検索作業をさえぎった。
「接近警報。Ｕ-ＴＩＣ（ユーティィック）機関所属と思われる迎撃機複数確認。インターセ

プトコースで高速接近中。このまま直進すると約三十秒後に接触予定。数は——」
接近中の敵A.M.W.S.（エイムス）は円盤状の台に乗っていた。編隊を組んで飛行してくる。目視確認できるだけで三機。夕焼けに機動兵器のシルエットが浮かぶ。
カナンは目を細めて、シートに身を委（ゆだ）ねた。
「——全機撃墜する。数を数えている余裕があるならシールドのコントロールをしろ。ショックウェーブを利用して優位な位置につく——火器制御はまかせる」
「了解——機体種識別完了、U-TIC機関所属『ストォール・マリーネ』。無人機みたいだね。対G限界がほとんどないから、機動性能はこっちより高い。かなり無茶な機動をしてくるかもしれないから気をつけて」
ケイオスが落ち着いた音声で告げた。
シートから小刻みな振動が体内に伝達される。
大気圏の空はシンプルに見えて複雑に入り組んだ気流に満ちている。空中戦闘においては、目に見えないその空の回廊をより正確に把握できたものが勝利を手にする。
カナンはグローブに包まれた指先をほぐし、続く戦闘に備えた。
E.S.アシェルは、飛行ユニットから青白い光の翼を広げ、敵群に向けて弧を描いて突進した。
敵A.M.W.S.群は銃撃を返しつつ、三方に散開する。
E.S.アシェルは、敵機の集中砲火を躱（かわ）しつつ、宙をよじのぼった。

慣性の渦に巻き込まれ、腹の中で内臓がよじれた。Gからの解放を求めて、カナンは機体との一体感を脳内に維持する。

敵機の機動性能は眼球筋の反射速度を超える。目で追っていては追いつかない。全身で感じ、予測する。敵A.M.W.S.は無人機だけに軌道は読みやすい。

E.S.アシェルは反転——右腕に固定された高出力のA.B.R.を発砲した。

全長三キロメートルにも及ぶ光の刃が高速移動する敵A.M.W.S.を捕える。

光は敵機を貫き、跳ねあげ、両断する。

爆炎が風に流れる。

宙を蹴り、アシェルは空に蒼い軌跡を残して飛んだ。

敵A.M.W.S.二機が、優雅な弧を描いて、背後から追撃を開始する。

ケイオスがいった。

「侵入角度の誤差、三・二に拡大。このままだと地表到達時に予定ポイントから四十キロ以上は離れることになる」

「辻褄はあわせる。それより機体からのフィードバックはどうだ。常人なら気絶していてもおかしくない状況だ。無理をされると作戦進行に響く」

「大丈夫。かなりピーキーなチューンみたいだけど、かえって刺激的なぐらいだよ」

「そうか。だが、わずかでも異常が感じられたら、即座にナビシートへのバイパスをカットする。こいつはおれひとりでも動かせるからな」

カナンは平然といった。
「了解――」
波打つ気流の塊をかいくぐって、E.S.アシェルは飛ぶ。
追撃する敵機が気流に呑まれて、一瞬動きを鈍らせる。
刹那――E.S.アシェルは蒼い磁気シールドの光を全身から放った。
急ブレーキ、小刻みにロールしつつ宙返り、同時に、A.B.R.の光の束が宙を薙ぎ、敵を二機もろともに呑み込んだ。
宇宙空間なら戦艦の胴体部さえ裂くことのできる高出力の兵器だ。
直撃を受けた敵A.M.W.S.は、瞬時にふたつの炎の塊と化し、遥かな地表へ落下していく。
天地が反転している。ミルチアの大地が頭上に黒く広がる。
カナンは五機の敵影が上昇してくるのを視認した。
「きりがないね。A.B.R.はエネルギー消費が激しい。どうする？」
カナンは頭上の都市に目をやった。
「やむをえない。予定侵入経路からは大幅に外れることにはなるが、市街に侵入する。ビル群を伝って敵の索敵を躱しながらセンターにむかう。この座標からパワーダイブだ。目標地点を計測しなおしてくれ」
カナンは、E.S.アシェルの態勢を立てなおした。機体のバランスを地表に対して水

平に保ち、ほぼ垂直に高速下降を開始する。
体が上にむかって引っぱられる。力を入れていないと肩が引きちぎれそうだ。
光の消えたオフィスビル群、高速路の網目模様。都市の光景がしだいに拡大する。
急速接近してくる敵機は蚊柱のように激しく機動していた。
E.S.アシェルを取り巻こうと陣形を整える。
敵機が交錯し、直線上に重なる一瞬を狙ってA.B.R.の光が地上へ伸びた。
レーザー光は、敵A.M.W.S.を四機同時に貫いた。
爆炎の中をアシェルは突っ切る。
さらに一機が直線経路に侵入。
カナンはトリガーを引く。が、銃口の付近でレーザー光は鈍く消滅した。
「A.B.R.のエネルギーが——」ケイオスの声。
敵のライフル弾がE.S.アシェル表面のシールド上で弾かれて、モニターで続けざまに赤く爆(は)ぜた。
敵機が迫る。
——接触まで〇・八秒。
敵機の駆動部のきしみまでが身近に感じられる距離だった。
回避はまにあわない。A.B.R.の銃口を槍(やり)に見立て、出力を上昇させた。E.S.アシェルは、敵機の腹部めがけて、まっさかさまに突っ込んだ。

激しい衝撃がコクピット内部を揺さぶった。
モニターが、三百六十度黒い闇に閉ざされた。
カナンは目を閉じて、外部にむかって神経を研ぎ澄ました。
敵機は胴体をくの字に折り曲げ、飛行台から脱落している。
二機はそのまま、ひと塊りになって地上にむかって落下している。
カナンはまぶたを開いた。黒いモニターに横殴りの白い光が一直線に走る。
モニター機能が復帰すると高層ビルが目前まで迫っていた。
A.B.R.を、右腕から脱着する。
敵を突き飛ばし、E.S.アシェルは水平に滑空し、間近にビルの壁面をかすめた。瓦礫を吹きあげつつ反転し、E.S.アシェルは低空に止まった。
カナンは目を細めて敵影を確認した。
敵A.M.W.S.の腹部にA.B.R.の細い銃身が生えている。敵機は、高層ビルに激突し、その半ばを抉り取りながらの落下途中で大破する。
破片が飛んできて、磁気シールド上で弾かれた。モニターにノイズが走る。
カナンはコンソールを叩き、空になったE.S.アシェルの右腕に予備の武器を転送した。
五〇ミリ・ハンドガトリング――E.S.アシェルの装備としては軽装の部類だが、都市部の戦闘ではこちらの方がふさわしいかもしれない。

「さすが――二十二秒で八機撃墜、噂どおり、すごい腕だね」ケイオスがいった。

カナンはコンソールを指先でノックして、E.S.アシェルの背中から、出力の低下した飛行用ユニットを切り離した。

「――この爆炎がおさまらないうちに作戦を進める。派手な炎だ。無人機はまだしも逆に有人機を引き寄せかねないからな。このビル群、すでに廃墟とはいえ、索敵を躱すのには充分な障壁になる。このままハイウェイを直進、政府関係庁舎の集中する地区へとむかう。目標地点座標の再測定は完了しているな?」

「うん――」

半円状の屋根がハイウェイ入口を覆っている。ほぼ完全に倒壊し、骨組みが剝き出しになっていた。夜空を覆う雲は厚く、星も見えない。

夕暮れの光は盆地を囲む山の彼方に去っていた。

2

コクピットから見下ろすミルチアは完全に生命の絶えたがらんどうの都だった。

道幅十メートルほどの高速路の下方に、暗いビルの谷間が広がり、ときおり上空で炸裂する爆炎で破壊の跡が照らされる。

人工の峡谷を無数の円盤状の飛行物体が、整然とした編隊を組んで、滑らかに進んで

行くのが見えた。先ほどの戦闘で、敵のA.M.W.S.が乗っていた円盤に形状はよく似通っていた。こちらに気づいた挙動はない。
ケイオスが搭載コンピュータの出した検索結果を告げた。
「機体種識別完了、U-TIC機関所属『クゥフガ・リリー』。いわゆる自動感知の移動砲台だね。主装はホーミングレイ。五十年前に暴動鎮圧に使われていたものをU-TIC機関が倉庫から引っぱりだしてきたものらしい」
「追尾レーザーとは、まるで太古のビデオゲームだな」
「見つからないに越したことはないよ。慎重に進もう」
いわれるまでもなかった。
この任務は味方であるはずの連邦軍にさえ知らされていない。まったく孤立無援の状態なのだ。いちいち敵に応戦していては、時間が尽きてしまう。
カナンはE.S.アシェルを慎重に発進させた。移動砲台のセンサーに反応せぬように、高すぎず、低すぎず、ハイウェイすれすれを滑空する。
この高速路を進むのは空戦以上に神経を使った。あちこちがひび割れ、亀裂が走り、下手すれば遥か下方にむかって瓦礫ごと滑落することになる。破片を落としただけでも、ビルの谷間をさまよう無人機を刺激させる。
五分ほど経って機体コントロールに充分に馴染むと、カナンは再びU.R.T.V.の長大なリストをHUDに自動スクロールさせた。

U-TIC機関の兵器の中には自律した燃料槽を持たず、ゾハルとリンクすることでエネルギーを入手し、稼働しているものも一部存在する。
データベースに記載されたU.R.T.V.の性能の項目によれば、この数百人の子どもたちは、ゾハルのコントロールシステムに介入する能力を持っているらしい。その部分は理解できた。
しかし、それはそのままではカナンに課せられた今回の任務の説明にはなっていない。任務——U.R.T.V.を保護すること。
カナンはケイオスのことを意識した。この青年なら、もう少し事情に通じているような気がする。
「U.R.T.V.について、具体的にはどんな危機が生じると予想しているんだ?」
ケイオスはしばらく押し黙り、それから口を開いた。
「彼らが、その能力でリンクするゾハル・コントロールシステム、ウ・ドゥというのはもともとはU.M.N.の転移システムとして設計・運用されていたものなんだ。ただ——これまで何度も生体転送が試みられてきたけれど、そのいずれもが失敗に終わってきた」
カナンの脳に記録されているデータベースにその具体的な数字があった。
「記録には、九九・七六%が即死、とある」
「でも、ごくまれにではあったけれど生還者はいた。ただし、人としてではなくモノと

して。彼らは二度と意識を取り戻さなかったんだ」
「――精神崩壊か」
ケイオスがかすかにうなずいた。
「ウ・ドゥと接触することで通常の人間に精神崩壊が生じた。ならば、それがウ・ドゥの反存在として設計され、生み出されたU.R.T.V.であっても変わらない、とヘルマー中将は判断された。中将はかつてユーリエフ・インスティトゥートを視察したことがあるらしい。そのときの印象もこの判断を手伝っている」
「これまでテストケースはなかったのか。少なくともエンセフェロン上で実戦訓練に近いものは行われていたはずだ」
「ウ・ドゥ・シミュレーターでの訓練データは残っていなかった。U.R.T.V.の生みの親であるディミトリ・ユーリエフ博士は、彼らを軍上層部の思惑通りの生体兵器とは考えていなかったんじゃないかな。彼の残した記録を読むと、根深い執念に突き動かされていたように感じる。だから、その失踪にはさまざまな憶測が飛び交っている。中にはU.R.T.V.に殺害されたというあやしげな説まであるくらいだ」
リストの自動スクロールが終わる。
最後尾には他の子どもたちと若干容姿が異なる個体が数体見受けられた。髪と瞳の色が違う。
彼ら髪の色の違うグループは、U.R.T.V.開発の最後期に生まれた変異体、と記載

されていた。
名はそれぞれ赤(ルベド)、白(アルベド)、黒(ニグレド)。彼らの間に挟まるように少女の顔画像もあったが彼女の固有名は抹消されていた。
「……どうしてそのように不安定なものが、今作戦上の切り札になると上層部は信じ込んだ？」
「具体的な材料になったのはユーリエフ博士と共同研究を行っていたユリ・ミズラヒ博士の報告書だよ。その報告書の中では、U.R.T.V.の統合意識についての解釈は、おおむねポジティブなものだったから」
「ユリ・ミズラヒ。U-TIC機関を創設したヨアキム・ミズラヒの妻にあたる人物だったな」
「ユリ・ミズラヒ博士はU.R.T.V.のコミュニケーション能力について、友好的なレポートを数多く提出した。重度のコミュニケーション障害者だった彼ら夫婦のひとり娘と、U.R.T.V.ルベドとの間に行われた陽性の交歓について――」
カナンは記録ファイルのルベドと名づけられた赤毛の少年を眺めた。赤い髪に青い虚(うつ)ろな瞳。
「そして、それが安心材料として曲解されたということか。参謀本部はこの期(ご)におよんで見たいものだけを見ているわけだ」
「彼らの精神崩壊が、ゾハルの暴走という致命的な事象を引き起こす可能性もある。そ

うなったら、人類をロストエルサレムから追放した領域シフトそのものが再現されかねない」
カナンは手を伸ばして、U.R.T.V.のリストを消した。
E.S.アシェルはハイウェイが四つに分かれるハブユニットにさしかかっていた。官庁区域にさしかかる境界線上だった。
右手に巨大なドライビングショップが見えた。
道の左右に、積雪でも寄せたように無数の車が積み重なっている。その上や下におびただしい数の人の形をしたものが散乱していた。
紛争に先立って暴走したレアリエンたちの死骸だった。すでに残らず息絶えているのかまったく動かない。薄闇に覆われた生白い肉体の山を渋滞情報の掲示が明滅する光で照らしていた。
感情がかすかにうずいた。これが不安と呼ばれるものなのだろうか。カナンはものうげにそのものたちを見下ろした。
ケイオスがあわただしくコンソールを叩きはじめた。
「この先に目標のラビュリントスがあるはずなんだけど。おかしい。予定ポイントの観測が大幅にねじれてる。まるで空間そのものが歪曲(わいきょく)しているみたいだ。地図によれば十キロほど先に重篤者神経病棟の中央管理棟がある。そのあたりを中心にして座標データがめまぐるしく変換されてる」

カナンは死体の山から目をはずし、先に続く闇の奥を睨んだ。
数十メートルほど先に、黒い影が蠢いている。
「ケイオス——今、前方に何かを目視した。そっちのレーダーに何か映っていないか？」
ケイオスがレーダーをのぞき込んでかぶりを振った。
「だめだ、豪雨の密林を歩いているみたいに地形の数値が変化してる。周囲の状況がよく摑めない。でも、地形そのものが大幅に変化したわけじゃない——ウーヌス・ムンドゥスの波動が異常をきたしてる」
突然、闇が晴れて、前方の機影がはっきりと見えた。ドーム形の頭部をしたネイビーブルーの機体が二機。
「U-TIC機関の無人機じゃない。連邦のA.M.W.S.だ」
「こっちも、今、識別信号を確認した。待って。後方にも反応が——」
カナンは身を乗り出して、前方に目を凝らした。闇を裂き、二機のA.M.W.S.を照らし出した光の柱。ビル群を挟んだむこう側に異様な光の柱が生えている。
一瞬、レーザー光かと思ったが、違う。レーザー光特有のまともに正視できないような激しい輝きではない。空にそのまま融けていくような、幽霊のように曖昧な光だった。
光の柱は上空までまっすぐに伸びて、暗い雲を貫通している。
カナンの頭の中に、甲高い悲鳴のような声が聞こえた。神経がきしむ。頭の中に響き

わたる声は穏やかに調子を上下し、雑音がその主旋律をくるんでいる。

――この音、いや、歌か。これは。

歌は光の柱のほうから滔々と聴こえてきた。

「これは、ネピリムの歌声――」

ケイオスの声はかすかに震えていた。

「ありえない。いくらU-TIC機関でも、この歌声の危険性は承知しているはず。いったい彼らに何が――いけない。このままじゃ」

カナンは歯を食いしばって意識を凝らし、シートから伝わる感触をかろうじて捕えた。何者かが背後から近づきつつある。

「ケイオス。つかまってろ。連中、包囲網を形成しているようだ。現状を脱出する」

カナンはE.S.アシェルを急発進させた。

飛び出したE.S.アシェルを背後からの銃撃が襲う。

同時に連邦A.M.W.S.が、三機、E.S.アシェルを背後から追撃を開始する。

E.S.アシェルの脚部が路上に擦りつけられて、高々と火花があがる。衝突したホバーモービルの残骸が弾けて四散する。

カナンは前方の二機の連邦A.M.W.S.を視認し、E.S.アシェルを横方向に跳躍させた。体勢を崩したE.S.アシェルの片腕が路上に擦れ、衝撃とともに左腕部が肩からはずれ、路上を跳ね飛んでいった。銃撃が機体をかすめる。

を受け止めた。E.S.アシェルは転がるように前方の瓦礫の中になだれ込んだ。
砂礫が舞いあがり、モニターにはノイズの亀裂が走る。
カナンは身を起こし、目を細めて肉眼で敵影を窺った。
「どうやら、敵と判断されたらしいな。連中がU.R.T.V.か?」
ケイオスが首を振る。
「たぶん違う。降下作戦に参加していた一般の連邦兵士だ。もちろんU.R.T.V.はA.M.W.S.を用いた戦闘技術については一通り訓練を受けている。でも、逆にこの包囲網は、彼らにしてはずさんすぎる。野生生物みたいだ」
「軍隊にしても異常だな——どうなってる? あの光の柱はなんだ?」
ケイオスは暗い顔でうつむいた。
「——わからない。とにかく非常用の識別信号を開放しよう。目的地にたどり着く前に撃破されるわけにはいかない」
ケイオスがコンソールを叩いて信号を入力する。
次の瞬間、コクピットは衝撃に襲われ、モニターにさらに亀裂が走った。
「信号は受け取ったはずだが——どうやら、戦うしかないようだな」
カナンはうずくまった機体を引き起こした。降り積もった瓦礫が転がり落ちる。
「待って。様子が変だ」

連邦Ａ.Ｍ.Ｗ.Ｓ.からの通信が強制的に割り込んできた。ざらついたノイズ音に混じって、わめき声／悲鳴／絶叫／哄笑／すすり泣き／つぶやき――人が発っしたものとは思えない騒音が濁流になってコクピット内に溢れた。

カナンははっとして手を引き寄せた。いつのまにか、足元から深紅のガス状の何かが這い昇ってきていた。頭を振って、もういちど見ればそこには何もない。首筋が異様に熱を帯びているのがわかる。

「これは――まさか？」ケイオスのつぶやきがかすかに聞こえた。

カナンはこめかみに指を突き立てた。遥かに強力な波動が頭の中に侵入しようとしていた。

無数の人々からなる雑踏が頭の中にびっしりとひしめいていた。何かいおうとして、舌が痙攣して口蓋に貼りついた。甘ったるい芳香が頭をつきあげ、胃がせりあがる。

カナンは喉を掴んで、背中をかすかにエビぞらせた。

奇怪なイメージが不連続に像を結んだ。無数の子どもたちが恐怖に駆られて頭の中を走りまわる。レアリエンたちはお互いを喰らいあう。深紅と黒の渦巻きに包まれて、ミルチアは混沌の無個性に解体し、原色の波と化して宇宙に溶け出していく。

「だめだよ、カナン。その声に耳をかたむけちゃ」ケイオスの声。

口腔に鉄さびの味を感じた。

銃弾が装甲表面に炸裂する衝撃。ＨＵＤ上でめまぐるしく数字が動いている。秒単位

で出力が刈り取られている。
力が抜けて腕が持ちあがらない。
ケイオスがまだ何か叫んでいた。
カナンはうつろな目で銃をかまえる連邦A.M.W.S.を見やった。
突如——横から巨大な影が飛び出した。
鮮やかなエメラルドグリーンの機体がレーザー光をたたえた大剣を連邦A.M.W.S.にむかって振り下ろした。衝撃波（ショックウェーブ）がE.S.アシェルにむかって押し寄せる。
連邦A.M.W.S.は続けざまの横殴りの一撃に上半身と下半身を両断されて爆発した。
カナンは事態をよく把握できずに朦朧（もうろう）となった頭を小さく振った。
彼らの危機を救った新参の機体から通信が入った。
《そこの所属不明機。先刻貴殿の識別信号を受信した。正規のものとは異なるようだが、味方と判断してかまわないか？》
「——なるほど——まともな兵士も残っているようだ」
カナンは斜め後方のケイオスを一瞥（いちべつ）した。自分だけで冷静な判断を下せそうにない。
「どうする？」
「共闘するべきだね。とにかく現状を切り抜けることが最優先だよ」
「了解した。信号を返してくれ」
カナンはE.S.アシェルを新参のA.M.W.S.の脇まで移動させた。敵対行動と誤解

されないようにガトリングの銃口を下げ、できるだけゆっくりと近づいた。
計器類で現状を確認する。出力値は一五％まで回復している。機体は目に見えぬ重圧から少しずつだが自由を取り戻しつつある。
再び通信で男の声が聞こえた。
《貴殿の識別シグナルを受諾した。これより包囲の連邦軍機、排除に移る》
「カナン、動ける？」
「大丈夫だ。シールドのサポートを頼む。装甲のダメージが激しすぎるようだ。これ以上はさすがにきつい」
連邦A.M.W.S.の銃撃をE.S.アシェルは飛びずさって躱した。
頭上のビルの屋上に陣をかまえる二機のA.M.W.S.にむかってガトリング砲を速射する。二機はこれを浴びて激しく機体を震わして、一瞬遅れて炎を噴きあげた。
つづく四方からの一斉射撃を、カナンの操るE.S.アシェルは、絶妙のタイミングでかいくぐった。
E.S.アシェルが合間を縫って放ったガトリング乱射を受けて、包囲の連邦A.M.W.S.が次々と爆散した。
「カナン、後ろだ！」
振り返ったカナンの視野に、アサルトライフルを斉射しながら突撃してくる連邦A.M.W.S.の姿が見えた。

そのとき、脇にいた緑色のA.M.W.S.が飛び出して、横薙ぎに剣を振るった。
連邦A.M.W.S.は胴体部で両断され、空中でふたつの爆炎に変わり、路上に炸裂した。爆風がモニターに押し寄せた。
そのモニター上に、銃弾の赤い光が炸裂する。遠方のビルの屋上に敵機の姿が見えた。
E.S.アシェルは片膝をつき、遠方の連邦A.M.W.S.にガトリングを構えた。レンジぎりぎり。
可動部のバネが緩みきっている。連邦A.M.W.S.を狙う照準レティクルは暴れ馬のように揺れた。照準が敵に重なる一瞬を狙ってトリガーを引き、残弾を撃ち込んだ。
連邦A.M.W.S.がのけぞった。二、三歩あとずさって仰向けに倒れ、豪快な炎を天高く噴きあげる。
ここでついに掌部の関節機構が限界を来した。
銃身が薬莢を吐き出す衝撃にも耐えきれず、E.S.アシェルはハンドガトリングを取り落とす。
モニターに打ち寄せる砂嵐の波が急に激しくなった。
「やった――みたいだね」ケイオスがレーダーサイトを確認しながらいう。
周囲は亀裂とノイズだらけで視認はほとんどできなかった。
カナンは息を吐いて、コクピットのハッチを開けた。
湿った空気が、狭い空間に流れ込む。

例のエメラルドグリーンの機体をのぞいて連邦A.M.W.S.は見あたらない。死に絶えた街の情景に妙にそぐわない肉感的な異臭が漂っていた。
機体の頭部に設置されたコクピットから路上にむかって飛び降りた。
着地の衝撃で全身に激痛が走った。おそらく体じゅうの筋繊維が引きちぎれている。意図的に神経を遮断することも考えたが、今は麻酔的処置で外界の刺激への反応を鈍らせるのは得策ではなかった。痛みは堪えるしかない。
あの幽霊のような光の柱は徐々に薄くなり、しだいに夜の闇に消え失せようとしていた。
カナンとケイオスは並んでその様子を無言で見守った。
アシェルの横に、例のエメラルドグリーンの機体が、崩れ落ちるように膝をついた。
装甲はすでに傷だらけだった。ここに至るまで、かなり激しい戦闘をくぐり抜けてきたようだ。
頭部のコクピットが開き、連邦の戦闘服を着込んだ男があらわれた。腰に長い得物(えもの)を差しているのが見えた。あまり見かけない武器だが、カナンのデータベースに適応する武器がある。刀(カタナ)と呼ぶ刃物らしい。
男はA.M.W.S.の肩部分の装甲に悠然(ゆうぜん)と立ち、フルヘルメットのバイザー越しにふたりを見下ろした。
「あぶない――」ケイオスが叫び、カナンは息を呑んだ。

男の機体の背後から、連邦A.M.W.S.が迫っていた。その鋼鉄の巨人は両脚を広げて、巨大な棍棒(ロッド)を高々と振りあげた。
例のパイロットは動揺せず、わずかに首を傾(かし)げて、腰の刀に手を伸ばした。
その手元から伸びた白い光の軌跡が一瞬空間を縦に薙いだように見えた。
連邦A.M.W.S.は棍棒を振りあげたままで止まった。
ドーム形の頭頂部から股間にかけて、一直線に線が走った。
敵機はゆっくりとふたつに分かれ、地響きをあげて地面に転がった。
爆炎が巻き起こり、熱波が押し寄せる。カナンとケイオスは腕で顔を覆った。髪が焦げる臭いが鼻をついた。

3

空に雲がとぐろを巻き、雷鳴が轟いている。なま暖かい風には湿気が強い。雲の間に赤黒い渦のようなものがかいま見える。仄暗(ほのぐら)い静けさに嵐の予兆がひそんでいる。
あちこちに崩落した巨大な看板が林立していた。ひときわ巨大な看板の映像の中で、A.M.W.S.並みに巨大な下着姿の女が、斜めになって地面に突き刺さっていた。
ときおり星そのものを揺るがすような地響きが轟き、看板が激しく揺れた。
刻々とミルチアに残された時間は失われている。

E.S.アシェルからのU.M.N.へのアクセス状況はいまだに回復のきざしを見せていない。バックアップなしで迷路と化したこの都市の中から、あのU.R.T.V.たちを探し出すというのも気の遠くなるような話だった。
カナンは熱心に話し込むふたりの姿を見つめた。
男はジン・ウヅキと名乗った。連邦軍所属・階級は大尉。降下作戦展開中にU-TIC機関の部隊に襲撃され、指揮していた一隊を失ったという。
ヘルメットを取ると流れるような黒い長髪が肩に溢れた。
現場の指揮官にしては少したおやかすぎる印象だった。その所作も妙に紳士的というか、達観した様子で軍人らしくない。
A.M.W.S.から降り立って、挨拶もそこそこにウヅキ大尉はいった。
「ケイオスさん、それにカナンさんとおっしゃいました、ね。ここは危険です。まだその機体が動くなら、今すぐにここから離れたほうがいい」
大尉は満身創痍のE.S.アシェルを見あげた。
「あなた方にも深い事情があるのはわかります。それでも、すべての事情を差し引いて、ここは一刻も早く。ここは人が人でなくなる場所だ」
「人が人でなくなるとは？」
ケイオスは瞳に不安を滲ませた。大尉はその問いには答えなかった。
「危険は武装蜂起したU-TIC機関だけではありません。あらゆる事象が、この惑星

の上で新たに結びつき、誰にも想像できない状況を引き起こそうとしている。わたしはひとりでも多くの人に、このミルチアで起きたことを、記憶して、生きのびて、未来へつなげて欲しいんです」
大仰なものいいだった。まるでこれから死に行く人物のセリフだ。
「おれたちも任務を負ってきた。完了するまで帰投するわけにはいかない」
大尉はかすかに鼻をしかめ、あきらめたように息を吐いた。
「そうですか。できればお止めしたかったが――しかし、わたしもあまりのんびりはしていられません。もう行かねばならない」
雨の中を歩きはじめたウヅキ大尉をケイオスが呼び止めた。
「大尉！　ちょっと待ってください。ご存知ですよね。U.R.T.V.部隊が現在どこに展開しているか」
「やめろ」カナンはケイオスをさえぎった。
「カナン、ここは彼を信用するべきだよ。E.S.アシェルの状態もひどい。ぼくらだけで任務を果たすのは困難だと思う」
ウヅキ大尉は振り向かず、立ちつくしたままだった。やがてぽつりといった。
「U.R.T.V.――対ウ・ドゥ・レトロウィルスを保持するといわれている、あの部隊のことですか？」
「ぼくらはヘルマー中将から彼らの保護を依頼された者です。ご存知ならば、教えてい

ただけませんか」
「期せずして同じ――というわけですか」
ウヅキ大尉は振り返った。
「いいでしょう。これも何かの縁。その場所までご一緒いたします」
雷鳴が轟く。鼻の頭に雨粒を感じて、カナンは雷光の瞬く空を見あげた。
ざあっと激しい雨が降りはじめる。
ジン・ウヅキ大尉のやつれた頰に濡れた黒髪がべっとり貼りついている。
「ただし、その機体は置いていってもらいますよ」
大尉は顎でE.S.アシェルを示す。
カナンは機体を見あげた。
開け放たれたコクピットに流れ込んだ雨水が胸部装甲を伝って、小さな滝になっている。
防水は完璧で、計器類が壊れる心配はない。E.S.シリーズのイニシャライズは強固でここに置いていっても盗まれることはないだろう。
「――これを」ウヅキ大尉は携帯コンピュータを宙に放った。
放物線の先で、カナンはそれを受け取る。
「現在U.M.N.はあてになりませんから、目で直接地形を記憶してください。後であなた方の機体のシステムに転送すれば、オートパイロットで現場まで飛んでくれるでし

ょう。目的地まではできるだけ目立ちたくないんです。わたしの機体も途中で捨てて行くつもりでした。単独の戦闘なら遅れを取るつもりはありませんが、群れられてはやっかいだ。できれば見つかりたくない人物もいるのでね」
「自力でマッピングしろということか」
地形シーカーを片手にカナンは立ちあがる。
「おれは白兵戦仕様ではないんだが、まあいい。つきあおう」
ケーブルを伸ばし、後頭部のソケットに差し込む。カナンの視覚情報が携帯コンピュータに流れ込みはじめた。シーカーが起動し、小気味のいい音を立てる。機械に数字の街の建造がはじまる。
「疲労がひどいようなら、カナンにはE.S.アシェルとここで待機してもらっていてもかまわないけど」とケイオス。
カナンはかぶりを振った。
「そういうわけにはいかない。あんたとその男をふたりきりにするのは危険だしな」
「どうぞ、お好きに」
ウヅキ大尉は微笑(ほほえ)んでいった。
風船が破裂したような音が聞こえた。見ると、看板映像から女が消え失せ、真っ黒な板になっていた。激しく叩きつける雨水がその黒い表面を滴(したた)り落ちている。

4

雨はしだいに激しさを増した。
豪雨のために、あちこちで都市の崩壊がはじまっていた。建物や道路の倒壊が地形を複雑なものにし、都市は迷路になった。
三人は瓦礫を踏み分けて進んだ。歩いただけで、亀裂が広がり、足元がぐらつき、いつその崩壊に巻き込まれるかもしれないという危機感がつきまとった。進むために数メートルも跳躍しなければならない箇所もいくつもあった。
大尉は道すがら、ぽつぽつと自分のことを語った。
「この仕事には——あなた方と同じ、ヘルマー中将の抜擢(ばってき)でね。参謀本部のトップレベルまで調査範囲に含んで、数年前から探りを入れていたんです。ことがことだけに確実な調査を進める必要があった。だが、すべてはむなしかった。けっきょく、この事態を止めるにはわたしの力は及ばなかった」
雨水を滴らせる大尉の表情には失望と死相が浮かんでいた。
「この事態を防げなかった時点で、わたしの闘いは敗北に終わった。わたしは、この星とともに、ここで滅びてもしかたのない人間です。しかし、それでも、わたしはまだ死ぬわけにはいかないのです。それさえ許されていない。わたしにはまだなすべきことが

いくつか残っている」
　そんなやりとりの間にも次第に崩壊は進み、街並みは、倒壊したビルが青黒く折り重なり、通りは惨憺たる瓦礫の山になっていった。
　ウヅキ大尉は立ち止まると片手をあげて、進行を遮った。
　大尉の視線を追って、空を見あげると、先にも目撃した移動砲台が群れをなして、ビル群の間を移動していた。
「じっとしていてください。あれは動くものに反応する」
「無人機はともかく、U-TIC機関の人間をほとんど見かけないが、どこか重点的に集まっている場所があるのか？」カナンは訊いた。
「連邦軍も遊んでいたわけではありませんよ。降下作戦は局地的には成功したようですし、鎮圧もほとんど終わったのでしょう。それに彼らの生き残りもこの星を脱出する準備を進めているのでしょう」
　ウヅキ大尉は静かにかぶりを振る。
「すべては、ずっと以前から予定されていたとおりにね」
　カナンはビルの陰に去っていく移動砲台を見送った。
「この戦争がすべて仕組まれたものだというんですか？」ケイオスがいった。
「そうです。U-TIC機関を、いや、このミルチア全域をスケープゴートに見立てた、ね。現在連邦各地で起こっているレアリエン暴走事件も、そのための些細なきっかけで

しかない」
「いったい誰が、何のために」
「今回の紛争の背後には、巨大な勢力の影があります。U-TIC機関はその隠れ蓑と思って間違いないでしょう。その勢力は連邦と、ここミルチア宙域との紛争を通してあるデータを完璧なものにしようとしたのです――それが、Y資料」
「Y資料――？」ケイオスは茫然と繰り返した。
大尉は小さくうなずいた。
「わたしがある男から奪取したデータディスク、断片的にではありますが、これを解析した結果、すべての事象から得られる様々なデータがある領域でひとつに集約していることが判明したんです。それが、Y資料として記述されている特異領域――つまり、このすべてが――」大尉は崩れゆく廃墟を見まわした。
「――Y資料のための生け贄なんです」
「そのY資料というのは、いったい何を意味している？」横からカナンが訊いた。
「詳細は不明です。ただ、そのデータの先にあるものを人類は長い間求めてきた。道ですよ。宇宙の神秘へ辿りつくための、道の記述です」
「意味がわからない。やはり、人間の話し方にも考え方にも為すことにも、おれにはどうもなじめないようだ」
カナンは軽く肩をすくめて、濡れたコンピューターのディスプレイを衣服にこすりつ

けた。

　前方に気配を感じて、一行に緊張感が走った。

　七、八メートルほど先の路上、例の移動砲台が一機、相対高度約三メートルに浮かんでいた。直径五メートル程度の花弁を思わせる円錐状の基部の上で、円盤がものうげに回転を繰り返していた。その周縁にはびっしりと円筒が生えている。円筒の尖端に赤い光が明滅しており、これがおそらくセンサーだろう。赤い光は茫洋として周囲を凝視している。

　ウヅキ大尉が腰の刀に片手を添えた。鞘からのぞいた抜き身が二センチほど濡れた光を湛えていた。

　ケイオスが小声で警告した。

「大尉、動かないでください。ここはぼくにまかせて。ここで騒ぎを大きくすると、こいつの仲間を呼び寄せてしまう」

　ケイオスは静かに移動砲台を見つめていた。

「どうするつもりだ？」

　カナンへの返答の代わりに、ケイオスは砲台に向かってまるで無頓着に歩きはじめた。砲台の赤い目がケイオスの動きを捕捉して点滅する。

《あまたなる物質の流れ転びて、あはれや遊ばせる結びの者たちよ。寄りては返し、集まりて、我が力の片鱗を——解放せよ》

歩きながらケイオスは口の中で奇妙な文句を唱えていた。

雨音に混じるモーター音とともに、上部のハッチが花弁をめくるように開いた。ハッチの周辺に青白いレーザー光が集まりはじめる。あの規模のレーザーに撃ちぬかれれば、人間なら簡単に即死するかもしれない。

砲台の真下で立ち止まって、ケイオスは片手を頭上に差しあげて叫んだ。

《塵（ちり）は塵に――》

宙に掲げたケイオスの手が暗い通りに一瞬眩（まぶ）しく発光した。

移動砲台の輪郭が陽炎（かげろう）のように揺らいだ。砲台は抵抗するように一度震えた。それからカナンには理解できないことが起きた。風に吹かれた煙のように移動砲台という存在が空中にほどけていったのである。通りが一瞬真昼のような光で照らされたと思うと、またすぐに暗くなった。今や砲台は舞い降りる小さな光の粒だった。粒子はケイオスの目前で瞬（また）いて、この世から完全に消滅した。

ウヅキ大尉は鞘から手を離して、消えた砲台を追悼（ついとう）するように静かにたたずむケイオスの後ろ姿を見ていた。大尉とカナンは困惑した顔で見つめ合った。

「見たこともない、なんともふしぎな力です。あなたの相棒、いったい何者ですか？」

カナンは、心に沸きあがった畏怖の感情をむりやり頭から追い出した。

「あいつは別に相棒じゃない。ここに降下する前にヘルマーにむりやり押しつけられただけだ。何者なのかはおれも知らない」

「なるほど、ヘルマー中将、あいかわらず変わった人材がお好きなようだ。むろん、あなた自身も含めて」
「心外だ。おれはあんたらのようにでたらめに逸脱してない。オーダーメイドだが正規格のチェックを通過した商品だ」
ケイオスがふたりに振り返る。緑琥珀色の瞳には、特別な感情も神秘の残り香もない。そろそろ見慣れてきた穏やかな微笑みを浮かべているだけだった。
カナンはケイオスの脇を無言で行き過ぎ、高速路の端まで歩いた。
U-TIC機関本拠地ラビュリントスに伸びる中央タワーのシルエット。折り重なるビル群。撒き散らされた都市。残された命が消えていくかのように、灯火はひとつまたひとつと消えていく。
E.S.アシェルを降りてから、結構歩いたつもりだったが風景はおよそ変わらない。あいかわらず乱雑な廃墟が果てしなく続いているだけ。雨に黒ずんだ街。板を引き裂くような雷鳴が空を駆け回っている。都市の壊れていく音。ざわめきの亡霊――。
カナンの手の中で携帯コンピュータが心地良い回転音を発する。カナンの見る光景すべては、リズムに合わせて座標点と座標点で結ばれる涼やかな世界へと変換されていく。
死にゆく文明の無言の墓地。過去を剥がされれば、墓碑も風化を待つばかりのただの石くれだ。

崩落して急斜面になった道路を、三人は勢い良く滑り降りた。斜面は雨で滑りやすく、一気に下まで転げ落ちないよう、全身に力を込めていなければならない。
それから五分ほど壮大な廃墟を進むと、幅十メートルほどのトンネルにさしかかった。トンネルは横長の台形で、天井もかなり高い。中はオレンジ色の照明で比較的明るかった。壁面のあちこちには事故車が撃突した痕があった。
ふいにトンネルが終わり、視界が開けた。
カナンたちはついに天を貫く中央タワー・ラビュリントスに到着した。
ゾハル研究の第一人者ヨアキム・ミズラヒの要請で建設されたU-TIC機関の本拠地である。この地下最下層に、構造体〈ゾハル〉が安置されていると聞く。尖塔付近は嵐の中で不自然なほど静まり返っていた。風雨が激しくカナンにむかって吹きつけてきた。雷光が暗雲に瞬き、雷鳴が轟く。
「案内はここまでのようです。U.R.T.V.部隊は、現在、この先の下層深部に展開しているはず――」
大尉の声はトンネル内に大きく反響した。
「ジンといったな、ここまでの協力に感謝する」カナンはいった。

ラビュリントスの尖塔を前にその右手に妙に不釣り合いな巨大な彫像が見える。その足下に強烈な気配が渦巻いていた。まるでそこに今しもこちらに襲いかかろうとする猛獣でも潜(ひそ)んでいるようだった。

ジンは土砂降りの中に一歩踏み出し、足を止めた。ジンの後ろ姿に先ほどまでは感じられなかった緊張感が滲んでいた。

「いいえ、どうぞ気になさらずに。それよりも、あなた方を助勢できず、ほんとうに申し訳ない」

ジンは戦闘服のポケットから一枚のディスクを取り出した。発光するディスクの表面で水滴が七色に変わる。

「ですが、わたしは何としても、このディスクのデータを捕足し、この紛争の背後関係を明らかにしなければならない。そのためには、ここのメインフレームにダイレクトアプローチする必要があるのです。そして――」

大尉のことばは雷鳴で遮られた。閃光(せんこう)が視界を白く塗り潰(つぶ)した。

カナンは前方の薄闇をすかした。

落雷の直撃を受けた彫像は、片腕から胸元にかけて大きく抉られて半壊していた。その胴体から飛礫(つぶて)がばらばらと転げ落ちている。

――あれは、人間、か？

カナンは目を細めて、半壊した像の足下に立つ人物を見つめた。

雨に打たれ、男は静かに立ちつくしていた。
頭部にぴったりと撫でつけた赤紫色の髪の下は、彫りの深い野性的な風貌だった。巨軀に黒の軍装をまとい、腰には幅広の軍刀を帯びている。猛禽類のごとき紫色の眼光が、三人を鋭く悠然と見据えた。
男は像の台座から跳躍し、路上に鮮やかに着地した。錆びた声で含み笑う。
「まさかとは思っていたが、のこのこ戻ってくるとはな――きさまにはコソ泥の才能もあったのかと半ば感心もしていたのだが、どうやらおれの見当違いだったようだ。蚤の蛮勇に投げかける敬意はいっさい持たぬ」
「大佐の寂しがっている顔が目に浮かびましてね。去りしなにひとめ会っておこうと戻ってきました」
男は皮肉な笑みを浮かべる。その体から善悪を超えた強烈な意志に満たされた闘争心が噴きあがっている。
「フン、相変わらず口の減らないやつよ、ウヅキ。それに虚勢が下手なのも変わらんな。その細い神経に、青ざめた顔が何とも似合いだぞ」
帯剣の柄に片手を置き、男は悠然と歩いてくる。
「きさまが持ち去った粗末なデータひとつで、我々の歩む大義の大伽藍がわずかでも揺らぐと信じたのか？　尻の間に尻尾を挟んだ痩せ犬が！」
「やり残したことを果たしにわたしは戻ってきた。そして、あなたこそ、その一抹の不

安に自らこうしてわたしを出迎えたのでしょう?」

ジンは腰の刀に手を伸ばす。柄を掴み、ぐっと男を睨めつけた。

「大佐、そこを通してもらいますよ。わたしはこの先に用がある」

大佐の顔からふと表情が消えた。空を見あげ、墨汁のような雨滴に頬を打たれるままにする。

「おれがきさまを斬るためにわざわざここまで来たのは、おそらくおれが己に許す最後の愚行となるだろう。痛みも感じぬうちにその命を絶ち、我が縁をも永遠に捨て去り、きさまの血肉が盛大に舞い散るのをあの老爺の餞別に送る。これより先つまらぬ一粒の感情さえも余分な染みとなるからだ」

男は肩をまわし、骨を鳴らす。筋肉が盛りあがり、ひとまわり巨大になったように見えた。手にした帯剣が白光を放つ。

「これで最後だ。ウヅキッ!」

叫び声と同時に、男の体はすでにその場所にない。

カナンの網膜に男の黒い残像が残っていた。

緩急の呼吸、特殊なタイミングで視神経に錯覚を引き起こす。

——どこだ。

カナンはあわてて左右に男の姿を探した。

「下がっていてください!　いえ、前に——」ジンの声。

カナンとケイオスは、大尉にまとめて突き飛ばされた。
黒い塊が脇を疾走した。
同時に、ジンは後ろにむかって跳びずさる。颶風のごとき一撃が大尉に襲いかかる。
剛剣は、ジンの頭をかすめ壁を抉り、飛礫を撒き散らした。亀裂がトンネルの壁を一直線に走った。その絶大の破壊力——触れれば、それだけで生身の四肢など吹き飛ぶだろう。
大佐は頭上に剣を振りあげ、次の一撃を放った。ジンは横転してこれを躱し、トンネルの外にまろび出た。水飛沫を跳ね上げて路上を駆ける。大佐は地を蹴って跳躍し、ジンとの距離を埋める。
空中から、大佐は袈裟斬りの一閃を繰り出す。ジンは瞬時に抜刀し、これを寸前で止めた。ふたりは互いの剣を挟んで睨み合った。
「軟弱だッ！　きさまの小手先の剣では、おれの魂はおろか、骨にすら届かぬわ！」
大佐は力任せに大剣を押し込み、受けるジンの顔が苦痛に歪んだ。
ジンの体が不意に沈む。勢いあまってよろめく大佐を、下からの刀閃が薙いだ。
大佐はのけぞり、よろめきながら態勢を立てなおし、続けて突き出したジンの刀を脇に弾いた。
激しい裂帛の声が空気を裂いた。大佐の踏み込みながらの一撃を、今度はジンが上方へ弾く。

ジンは地を蹴り、壁を蹴って、手すりを越えてラビュリントス中央棟の屋上に姿を消した。見送った大佐は首をまわして、カナンとケイオスを見つめてひとつ鼻を鳴らした。大佐はジンの後を追って、ひとっ飛びで屋上に消える。
カナンはこめかみを指先でつついた。
「いったいどうなってる？　人間の身体能力についての情報を書き換えなければならないか？」
「行こう、カナン」
ケイオスはそういって、屋上へと繋がるスロープにむかって駆け出した。

6

舞台を移したふたりの闘いはさらに激しさを増していた。古代の神殿のように円柱が並ぶ屋上をふたりの影が飛び交う。
ふたりの剣の質の差は、あえてあげるなら、破壊に対する志向の違いかもしれない。大佐の剣は無心だった。天災のごとく、剣先に触れるものすべてを薙ぎ払い、破壊し尽くすことを当然としている。
一方、ジンの剣筋は、あくまで目の前の男を斬ることに集中している。暴風を斬ることはできない。

ときおり、ジンの目の醒めるような一閃が大佐を脅かすことはあったが、闘いは終始大佐の猛攻をジンがどうにかしのぐというペースで続いている。

「カナン、E.S.アシェルを――」

「ああ、すでに呼んだ」

携帯コンピュータの中の地形データと起動キーは転送済み。

しかし、E.S.アシェルが起動し、データをマッピング再生して、座標を計測し終わり、ここまで飛んでくるのに、おそらく十分以上はかかる。そのころには、当然、この超高速の肉弾戦は終わっている。

カナンは冷静に状況を分析した。

U.M.N.の変調に引きずられて、今送った信号が、まるででたらめな指向に飛んでいった可能性もあるだろう。あるいはE.S.アシェルのマッピング再生が失敗することだってありうる。最悪、E.S.アシェルが乗員死亡と錯覚し、彼らをこの地獄の釜の底に取り残して、母船に帰還してしまうことも考えられる。

仮にウヅキ大尉が敗れたら、あの大佐という男は次にまちがいなくカナンたちを狙う。白兵戦ではまず勝てる相手ではない。作戦遂行のことを考えるなら、今のうちにできるだけ離れて、E.S.アシェルの到着を待つか、あるいは道はわかったのだから、思い切って来た道を戻るか。とにかく、ジンのことは見捨てて逃げるべきだった。

しかし、カナンの足はなぜか動かなかった。

闘いは大佐の有利に傾き、ジンは円柱の一本を背に、追いつめられていた。
大佐が地を蹴って、一瞬先までジンの頭があった空間を薙ぎ払った。大佐の剣は円柱を抉り取り、ジンの髪を散らした。間髪で身を屈めたジンは大佐の足下を剣で払い、大佐は後方に跳躍してこれを躱した。追いかけたジンの斬撃を大佐の剣が弾いた。
大佐は、その勢いにまかせて振りかぶった左の握り拳でジンの頰を殴りつける。水飛沫を散らして、ジンは円柱に激突し、その手から刀が力なくぶら下がった。
大佐は咳き込むジンにむかって黒い塊になって突進した。
ジンは頭上を見あげて、横跳びに身を躱して、地面の上を転がった。
円柱がぐらりと揺れ、大佐にむかってゆっくりと倒れていく。
「う、お――――」大佐は後ずさりし、後方に跳躍した。
倒れた巨大な円柱は屋上にめり込み、水飛沫と瓦礫を宙に散らす。屋上の全面に蜘蛛の巣状に黒い亀裂が走った。足元が斜めにぐらつき、カナンは思わず手すりにすがりついた。
ジンはうつぶせに倒れたままで動かなかった。ケイオスがジンに駆け寄って、抱き起こした。
「ウヅキ大尉!」
ジンの脇腹にかなりの量の血が滲んでいる。ケイオスの手が発光し、傷口をなぞった。
ジンがかすかな苦痛のうめき声をあげる。ケイオスはかぶりを振った。

「だめだ――傷が深すぎる。完全にはふさがらない」
カナンは手すりから大佐を睨んだ。大佐は目を細めて三人を見据えた。
「雑魚に助けられ、無様な姿だな、ウヅキ。もっとも半人前が粋がったところで、結果は見えていたがな」
大佐は剣で風を斬った。
ジンは荒い呼吸を繰り返していた。身を支えるケイオスを引き剝がして、うなずいてみせた。
「大丈夫――これしきの傷。月並みですが、ほんのかすり傷です」
ことばとは裏腹に大尉の顔からは血の気が失せていた。顔をそむけて、大佐にむかってよろめきながらも二、三歩歩いた。
地底から轟音が続いていた。
屋上の表面の黒い亀裂はさらに深く広がる。
足元がぐらつく。次の瞬間にもこの建物がまるごと崩壊して、四人を呑み込んでいってもおかしくなかった。それでも、カナンはここから逃げ出す決断を下せなかった。
ケイオスは濡れた銀髪を頰に貼りつかせて、無言で向き合うふたりを見守っていた。
周囲のビルが小刻みに顫動し、その外殻が次々と剝落していた。
大佐は剣を握った手を脇に垂らし、黒雲の渦巻く空を悠然と見あげた。
「これ以上の長居は無意味だ」大佐は剣をまっすぐジンにむかって差しむけた。「そろ

そろ貴様との関係、断たせてもらおうか」
　ジンは逆むきに刀をかまえ、刃に沿って指を置き、まっすぐに大佐を見やる。
「ほお、それだけの手傷を負って、なお刃向かおうとするとはな。悪あがきだけは一人前か」
「何ごとも――やってみなければわかりませんよ、大佐」
　ジンは不思議と穏やかな声でいった。
「減らず口が――」大佐は吐き捨てる。
　次の瞬間、ふたりの体から光(オーラ)がほとばしり、直線上の真ん中で激突した。大佐の体からは紅色。ジンの体からは青色。膨らみ、縮み、ふたつのエネルギー光は互いを呑み干そうと渦を巻いた。交錯する光の波。
　屋上に伝わる振動がひときわ激しくなり、亀裂がさらに幾筋にも枝分かれする。
「崩れるぞ！」カナンはケイオスの腕を掴んだ。
　ケイオスはカナンに揺さぶられたまま、立ちすくんでいる。
　光芒はさらに輝きを増して、闇を燦々(さんさん)と照らした。雨に濡れる街の蒼茫(そうぼう)たる姿が光輝の中に陰影を濃くした。紅と青の光の渦は大佐とジンの体を貪欲に呑み込んで、激しい衝撃波が大気を貫いた。唐突に屋上は静けさに包まれた。
　カナンは細めていた目を開いた。大佐とジンは光の攻防がはじまる前と同じ姿勢で、立ち尽くしていた。

カナンとケイオスは息を呑んでジンの後ろ姿を見つめた。
その体からふと力が抜け、ジンは音を立てて、その場に崩れ落ちた。
大佐は剣を力なくぶら下げて、荒い呼吸を繰り返していた。
「ウヅキ、貴様の実力なぞ、しょせんはその程度。技も力もおれの方が上であることが、これでわかっただろう。フン、それをあの老いぼれは――」
勝利の興奮に思わず吼え立てる大佐の右頬からこめかみにかけて、一直線に深い裂傷が走っていた。その傷痕から呼吸するごとに噴水のごとく血が噴き出した。
カナンの足元から何かが細かくひび割れていく音が聞こえた。カナンは亀裂を視線で辿り、大佐の立つ地面に集中する無数のひび割れに目を止めた。ジンの狙いは大佐ではなかった。その下の地面にダメージを集中させていたのだ。
次の瞬間、大佐を中心にした蜘蛛の巣状の亀裂は大きく隆起し、轟音と瓦礫の中に大佐を呑み込んだ。屋上の大半が崩壊し、階下のフロアを次々とその破壊に巻き込んだ。
カナンは片手に手すりを握りしめ、片手でケイオスの腕を摑みながら、崩落に呑み込まれていく大佐の姿を見送った。
揺れが収まり、カナンはゆっくりと手すりから手を離した。屋上は一瞬の静けさに包まれていた。屋上の約三分の一ほどが崩壊して、奈落の底は黒々として見通せなかった。
ジンはその大穴の縁に倒れていた。
カナンとケイオスが駆け寄るとジンは小さく咳き込みながら、うっすら目を開け、な

んとか微笑んでみせた。

*

いつのまにか雨は止(や)んだ。

都市の上空をすっかり覆い尽くした黒雲は、それでも去ろうとはしなかった。

仄暗い破滅の灯(あか)りが、ぼんやりと廃墟のシルエットを縁取っていた。

カナンはジンを見つめた。大佐との闘いで精根尽き果てたと見えたジンだったが一休みするとすぐに自分の力で立ちあがった。あれだけの傷を抱えて、見た目よりも遥かにタフな男だとカナンは内心驚嘆する。

ジンは、屋上に空(あ)いた穴の縁に立ち尽くし、大佐の消えた地の底を眺めていた。

大佐は遥かな地底に呑み込まれておそらく死んだはずだ。破壊に呑み込まれた大佐の怨念を反映するかのように、地の底から聞こえる轟きはさらに強さを増していた。全壊する前にこの屋上を立ち去るべきだ。

カナンは携帯コンピュータからのアラート音に気がついた。E.S.アシェルからの口笛(サイン)だ。カナンは薄暗い空を辿って、機体の飛んでくる方角を見つめた。

ジンが暗い顔でカナンのそばまで歩いてきた。

「残念ですが、もう時間がない。このデータを補完するのは——今はあきらめるよりほかないようです」

ジンはそれからカナンの顔に目を止め、ふと何かを思いついたような表情になった。
「カナンさん、ひとつ頼みがあります」
ジンは胸元に隠してあったデータディスクを取り出した。
彼が何をいいたいのかはカナンにもすぐに理解できた。カナンの記憶素子増強タイプのレアリエンとしての性能はすでに解説してある。あの程度のディスクに収まる量なら、おそらくまるごと脳に保存することも可能だ。
カナンはしぶしぶながらデータディスクを受け取った。
地形シーカーからソケットを引き抜き、代わりにそのディスクに差し込んだ。ディスクが軽快な音を立てて、頭の中に数字が流れ込んでくる。何か身体的な自覚症状があらわれるわけではない。約三分ほどでデータの転送が完了する。
ジンはカナンから返されたディスクを眼下の崩れゆくビルの谷間にむかって円盤投げのように投擲した。ディスクは高速で回転しながら谷間の底に消えて、誰の目にも届かぬ破壊の底へと永遠に退場した。
それが済むと、ジンはようやくほっとした様子を見せて表情をわずかに緩めた。
「今思えば、あなた方と出逢えたことが、わたしの幸運だったのですね。下手にモノとしてあるよりはこの方が遥かに安全でしょうから」
街の様子を見ていたケイオスが戻ってきて訊いた。
「大尉はこれからどうするんですか?」

大尉は少し考え込み、やがて決意を固めていった。
「わたしには、まだ行かなければならないところがあります」
カナンとケイオスは顔を見あわせた。
こうしている間にも街の破壊は進んでいる。ミルチアに残された時間はあと一時間もなさそうだった。
「これから？　その体で、危険すぎます。ぼくらの乗ってきたE.S.アシェルなら正規の乗員でなくても、あと二、三人は乗ることができます。大尉もぼくらと一緒に」
「これはわたしにとっての贖罪なんです。行かないわけにはいかない」
「ですが！」
気色ばんだケイオスにジンは穏やかな様子でいった。
「あなた方にはぜひ生きて帰ってもらいたい。そして、そのデータに隠されたこの紛争の真実の姿をいつか白日のもとにして欲しい」
ジンはかすかに微笑み、ケイオスを見た。次いでカナンに、こめかみをつついて見せる。
「データの件は頼みましたよ」
「――了解した」カナンはうなずいた。
ジンはふたりの顔を眺めて寂しげな様子で会釈をした。
「では、お元気で。無事に任務を果たされることをお祈りしています」

ジンの体がふわっと宙に舞いあがった。手足を大きく広げ、次々と壁を蹴って着地の衝撃を弱めながら崩れゆく街の闇に消えていった。
やはり生身の人間としては信じられない運動神経だった。何か特殊な訓練を受けた人間なのかもしれない。
暗雲が流れている。
戦火の瞬きはすでにあまり見えなかった。
地響きがひときわ大きくなる。
地表はまだそこにあるすべてを滑らかで平らな世界にしようともがき続けているようだ。
人間たちの造りあげた街並みは、この宇宙の片隅で、ちっぽけに、孤独に、最後の瞬間へと一歩一歩足を進めている。
この紛争の真実の姿――とジン・ウヅキは表現した。
この紛争が仕組まれたものだといった。
しかし、そうだとしても、それは真に人がたくらんだものといえるのだろうか。もっと無関心かつ圧倒的な諸力が、ふと退屈しのぎに、この街を滅びの方向に転がしたのではないだろうか。そんな気もする。
人の知らぬ間にも宇宙の歯車は回転している。なりゆきで頭に抱え込んだデータからひどく重苦しい圧迫感を覚えた。

青い光に覆われた死にゆく街並みを湿った風が渡っていく。
ケイオスは倒壊寸前の屋上の端で、ジンの消えた闇を見つめていた。カナンは彼に声をかけた。
「行くぞ。この棟は危険だ。もっと安定した場所でE.S.アシェルを待つ」
きびすを返しかけたカナンをケイオスの叫び声が呼び止めた。
「待って。見て、カナン。あれを！」
カナンは振り返り、ケイオスの指す空を見あげた。空は巨大な影に覆い尽くされていた。カナンは驚愕に目を見開いた。巨大な黒い影がふたりを包んだ。そして、慣れ親しんだ雑音が頭に広がった。焦燥と諦念がうすれゆく意識の中でうずいた。
おれは、またしくじったのだ。

エンセフェロンの途切れる電子音と聞き覚えのある肉声が耳元で聞こえた。
《やれやれ。おめでとうカナン。これで通算百二十七回目のロスト。またまた記録更新といったところだな》
カナンはベッドの上で目をこすって、周囲を確認した。機材が所狭しと敷き詰められた小部屋だった。少しの間、認識は寄る辺もなく世界を漂うが、やがて、エンセフェロンから十四年後の、この場所にしっかりと着地した。幾度となくエンセフェロンダイブを繰り返してきた第二ミルチア市庁舎の一室だった。

端末機の傍（そば）にいたオペレーターがカナンにむかって微笑んだ。
カナンは小さく溜息（ためいき）を吐（つ）いた。

7

代表執政室は、この第二ミルチア市を一望する展望で知られていた。数カ所ラウンジ風の雑談場まで設けられ、世が世なら舞踏会でも行えそうな広大なホールである。実際、国賓クラスの客を招いてのパーティなどが行われたこともあるらしいが、幸いにしてカナンはそういう行事に参加したことはなかった。
今はこの広大な部屋には、ふたりの人物しかいない。
ひとりはカナン、そして、もうひとりは第二ミルチア自治政府代表を務めるヘルマーである。ヘルマーは、壁の一面を構成する強化ガラスからいっぱいに溢れる光を全身に受け、腰に手を重ね、街の様子を見下ろしている。
カナンはヘルマー代表が使う横幅七メートルはある大仰なデスクの前に立ち、その後ろ姿を見つめた。ヘルマーの背中は軍人時代より、いっそう厚みと幅を増していた。
政務を行うようになってからは、軍服ではなく、長身にゆったりとしたローブをはおっている。頭は軍人時代と同じく禿頭に剃（そ）ってあるが、いかつい様子はなく、むしろ賢人然とした落ち着いた印象を与えている。

カナンにとって、この市庁舎でエンセフェロンダイブを行うのは、ほとんど恒例行事となっていた。ジン・ウヅキに託されたデータを分析するための記憶の検索洗浄作業だったが、毎度のごとく生じる奇妙な断絶現象によって、いまだにその記憶に辿り着くことができない。

オペレーションは、回し車から永遠に出られなくなったコマネズミさながらにパターン化した堂々巡りの失敗記録をすでに十年以上も続けていた。

「――そうか。残念だが、しかたあるまい」カナンの報告を受けてヘルマーはいった。

このところ第二ミルチアまわりで破滅的な事件が続いた。

星団連邦による第二ミルチア宙域のスペースコロニー〈クーカイ・ファウンデーション〉の代表理事捕縛、および星団連邦軍の包囲網。続いて生じた宙域へのグノーシス大量侵入と〈天の車〉出現。

いずれも、一歩間違えれば、ミルチア脱出移民の造りあげたこの惑星が滅亡しかねない大事件だったが、ヘルマーは見事な采配で乗り切った。

そんな激務をこなした後だというのに、その疲れの様子も見あたらない。背中に鋼の芯でも入っているのかもしれない。頑強な男だった。

ヘルマーは朗々と張りのある声で続けた。

「後でわたしの方から映像資料は請求しておこう。何か新しい発見があるかもしれんからな。それにしても、エンセフェロン被験者に報告までさせるとは。毎回、成果があが

らぬといって、どうも気が抜けているようだ。部署を一度、締めなおさんといかんかもしれんな」
カナンは肩をすくめた。
「気にするな。今日は担当者の子どもが誕生日だそうだ。おれにはよくわからないが、人間の風習ではたいそうな記念日なんだろう？」
ヘルマーは振り返り、相好(そうごう)を崩した。
「まあ、な。わたしに子どもはおらんが、この街を子ども代わりといっていいなら、年を重ねるごとに、積み重ねてきた時間を思い出す。えもいわれぬ、まあ——存在の悦(よろこ)びだな」
「危機を乗り切った直後だ。あんたも疲れが溜(た)まっているんじゃないのか？　感傷に浸るのも人間にとっては必要な精神のケアのひとつと聞いた。少しは気を緩めるのもいいだろう」
「そうもいかんのだ。事態は動き続けている。まだすべての危機を乗り切ったわけではない。はじまったばかりとさえいえる」
カナンはヘルマーの背後に広がる第二ミルチアの街並みを眺めた。
十四年前——ミルチアから脱出してきた人々は、望郷の思いと未来への希望を託してこの惑星を〈第二ミルチア〉と名づけた。
ミルチア紛争の結果、故郷の星ミルチアはブラックホールの狭間(はざま)に失われ、今では誰

も近づくことはできない。
　それまで住む者のいなかったこの惑星に植民し、一から築いてきた第二の故郷である。ひとつひとつの道や施設に、懸命なる日々の垢が染み着いている。晴れた空の下で、今日も都市は人の呼吸のリズムで息づいていた。
　ヘルマーは窓のそばを離れ、デスクについた。重い体を受けて、椅子がきしんだ。膝の上で太い指を組み合わせ、真顔に戻ってカナンを見つめた。
「それで、実感としてはどうだった。今までの百二十六回のエンセフェロンダイブと、まるで変わりがなかったのか？」
「残念だが。いつものように細部に変化は生じる。しかし、それもU.M.N.の補正誤差範囲内だ。大筋はまったく同じだった」
　ふむ、とヘルマーは気難しい裁判官のようにうなった。
「まあいい。いずれ自然に転機も訪れるだろう。ねばり強く取り組まなければならん。しかし、やはり奇妙なものだな。そこに確かにあるとわかっている情報がどうしても取り出せんとは。ジン・ウヅキの考えたとおり、確かにデータは安全に保管され続けている。しかし、安全すぎて誰の手にも届かないところに行ってしまった」
「ロスト直前にあらわれるあの黒い影の正体さえわかれば、おそらくもっと深層まで行ける。そうなれば、データも抽出できると思うんだが。あれからしばらくの空白の後、U.R.T.V.たちを保護した周辺の記録は頭にはっきりと残っている。けっきょくあの

ノイズが記憶をさえぎっているとしか考えられない」
カナンは軽く溜息を吐き、いつもの重苦しさを感じて後頭部を触った。
「——ミルチア紛争の真相、か」
「旧ミルチアを呑み込んだ謎の組織の背景情報だ。我らにとって、どうしても辿りつかなければならん真実だ。なぜ、我々は故郷の星を失うことになったのか」
カナンはふとエンセフェロンで見た男の顔を思い出した。
「そういえば、あの男——ジン・ウヅキは健在なのか？」
ヘルマーは椅子の背にゆったりと体重をあずけて、微笑を浮かべた。
「ああ、元気にしている。今では軍を離れて、隠遁生活を堪能しているよ」
「あの時は、おとなしく市井に収まる人間には見えなかった」
「あの紛争では誰もがたくさんのものを失った。彼は、その、いちばん深い部分に触れてきたのだ。それだけに、またその傷も深いのだろう。第二ミルチアでの生活は、いまだ彼の空洞を癒すには足りないのだ。彼はまだ若い。若いが、すでに余生を生きている」
ヘルマーは目を閉じ、椅子に深々と巨軀を沈めた。
「彼は、おそらくあの星とともに滅びたかったのだと思う——彼に妹を育てるという未来が与えられなければ、実際にそうしていたかもしれん」
「あの男には妹がいたのか」

ている。
　カナンは少し驚いていった。家庭というものが少しも似合わぬ男だったように記憶し
「ああ、シオン・ウヅキ。聞いていないか？　彼が連れ帰ったその少女が、今ではヴェクターの優秀な研究者になった。対グノーシス用のアンドロイドのプログラム開発主任を務めている。〈天の車〉の一件、ガイナンやJr.たち、ファウンデーションの活躍で防がれたとなっているが、実際は、シオン・ウヅキと彼女の調整していたそのアンドロイド〈KOS-MOS〉の介入がなければ第二ミルチアは壊滅的被害を受けていた」
　——わたしにはまだ行かなければならないところがある。
　あのとき、ジンはそういっていた。背負いきれぬ荷を背負ってしまった者の諦念をあらわしたジンの表情。あれはその妹に関わることだったのではないかとカナンは思った。
　カナンの顔をじっと見ていたヘルマーが、たえきれずに含み笑った。
「君は感情を抑制されたタイプと聞いていたが、他人のことが気になるのか？」
　カナンは肩をすくめる。
「まあな。おれに十年以上にわたるやっかいごとを押しつけた張本人だ。気にはなる」
　ヘルマーは声をあげて笑った。
「まあ、彼のことは今のところ忘れていい。それより正確な現状の把握をしてくれたまえ。このところ続いてきた〈天の車〉事件をクライマックスとする一連の事象は、諸勢力の旧ミルチアをめぐる思惑が背景になっている。というよりも、旧ミルチアに残され

たオリジナルゾハルをめぐってというべきか。君はY資料についてはどれぐらい知っているかね」
「あの紛争の原因となったものだ、とジン・ウヅキはいっていたな」
「うむ。ヨアキム・ミズラヒ博士の残したゾハル研究の集大成と考えられてきたが、実はそれ以上のものという噂もないではない」
「というと？」
「つまり、オリジナルゾハルとのリンク上欠かせないある種の霊的デコーダとしての性質だな。宇宙の真理に迫る何かを開くための鍵となる」
ヘルマーの表情はひきしまり、いつもの硬質な顔つきに戻っていた。本題がはじまったようだ。カナンはいった。
「要するにこういうことか。Y資料とは資料という名前に連想されるような単なるデータの集積ではなく、何かしら実効性のある鍵のような機能を含んでいると？」
「もちろん、実際に解析してみないかぎり推測にすぎん。ところで、ミルチア紛争後、Y資料がどこに隠されてきたかは聞いているか？」
ヘルマーはカナンの目をのぞき込んだ。カナンは首を振った。
「ジン・ウヅキが君の中にミルチア紛争の真実を記したデータを託したように、ヨアキム・ミズラヒ博士はあるレアリエンにY資料を封じたのだ。現在多くの艦船で正式採用が進んでいる百式汎観測レアリエンのプロトタイプ。個別コードはM.O.M.O.。先日、

この第二ミルチア上空にあらわれた〈天の車〉をおぼえているだろう？　かつてあの施設で彼女はヨアキム・ミズラヒ博士の手によって造られた。彼女の深層に今もY資料は眠っている」
　ヘルマーがパネルを操作すると、デスクの上に半透明のモニターがあらわれる。
　そこには桃色の髪の少女型レアリエンが映し出されていた。
　画面の下部に彼女の名前が示されている。コード／M.O.M.O.――。
　ヘルマーが続けた。
「このM.O.M.O.だが――ある経緯でクーカイ・ファウンデーションで保護することになった。そのためにU-TIC機関はもとより、各星団連邦議員たちや、その他、多くの勢力がこの件の動向を注視している。そして、彼女は今日この第二ミルチア市に到着する」
　ヘルマーはさらにパネルを叩く。今度は茶褐色の髪の女性の画像があらわれる。
「これに合わせて接触小委員会から、第二ミルチア政府に、正式に百式プロトタイプの深層意識の共同解析作業の申し入れがあった。むろん、拒む理由はない。明日、第二ミルチア市内のU.M.N.管理局で解析作業が行われ、小委員会からは、このユリ・ミズラヒ博士が派遣される」
　カナンはユリ・ミズラヒ博士の無表情な顔写真を見つめた。
「ユリ・ミズラヒと百式プロトタイプは、顔の特徴にかなりの一致が見られるようだが。

「ふたりには何か関係が？」
カナンの指摘にヘルマーはうなずいた。
「ああ。ヨアキム・ミズラヒは、自分の最後の作品を製作するにあたって、自分と妻の間に生まれ、若くして死んだ実の娘の姿をモデルにしたらしい」
ユリ・ミズラヒ。ミルチア紛争の首謀者といわれるヨアキム・ミズラヒの妻だった女性。その男が造りあげた娘にうりふたつのレアリエン。
ユリがM.O.M.O.を単純に受け入れられるはずもないことは人の感情に疎いカナンにもなんとなく察しがついた。
カナンは少し皮肉な気分で女の映像を眺めた。
「なるほどな。彼女にとっても十四年ぶりの悲願というわけだ」
カナンは画像から目を離し、ヘルマーを見やった。
「それで――おれの具体的な役割は？」
「さしあたって護衛役を頼みたい。たった今、軌道上から関係者が空港に降りたという報告が入った。彼らを君の車で迎えに行ってもらえると助かる」
「彼ら？」
「百式プロトタイプの護送には、ファウンデーションの代表理事らも同行する」
「どっちの？」カナンは訊いた。
「ちっこい方だ」ヘルマーがニッと笑う。

「ルベドか――」カナンは目を細めた。

「今はガイナンJr.だ。どうだ、懐かしいか？」

「まあな――騒々しい奴だが。しかし、やはりただの迎えというわけではなさそうだ」

「U-TIC機関だけでなく、例の移民船団の連邦に対する動きが活発になってきている。そんな時勢だ。正直、わたしにも何が起きるかわからん。解析作業に妨害が入らぬように大規模な軍事行動は避けねばならん。君の任務は例によって非公式ということになる」

「了解した」カナンはきびすを返す。

M.O.M.O.のことを考えた。

彼女とその両親たちのことを。

――人はなぜレアリエンを人の形にデザインするのか。なぜ創造者は己をその被造物に投影するのだろうか。

ヘルマーなら豪快に笑ったあとで、いうだろう。

――寂しいからに決まっている。

迷惑な話だ。

8

大聖堂は静けさと薄明に包まれていた。
蠟燭（ろうそく）の灯がぽつぽつと浮かび、蠟の沸騰する音がかすかに聞こえる。
奥の壁の中央には巨大な黄金の十字架が飾られていた——その下に立ち尽くす男がひとり。白髪の老人だが、背骨はまっすぐに伸び、それなりに逞（たくま）しい体つきだった。身にまとった上衣（うわぎ）は薄紫色で、灯火を受けて繊細な刺繡紋様がかすかに浮かびあがっている。
老人は片手に巨大な書物を捧げ持ち、静かにそれを眺めている。
女は、束ねた銀髪を揺らして音もなく老人に歩みより、緑色の瞳を半眼にしてその背中を無表情に見あげた。
「教皇猊下（げいか）——」オルグイアは口を開く。
「——う、む」教皇は書物から顔をあげようともしない。
「Y資料の件についてご報告がございます。詳細はマーグリス審問官長から猊下に直（じか）にお伝えしたいと」
「そうか」白髪の頭がかすかにうなずく。
オルグイアはすっと礼をして、きびすを返した。
唐突に、広間の真ん中に男の姿があらわれる。

筋骨隆々たる偉丈夫だった。無骨な頭の形がくっきりわかるほどぴったりと髪を撫でつけ、太古の貴族が着ていたような黒い羽織を身に纏(まと)っている。どこで付けられた傷かわからないが、その右頬には顎から額にかけて刀創の痕が走っていた。

ひざまずき、教皇を見あげる男の全身は薄く透き通っていた。常駐している艦船から送られてきたリアルタイム映像である。肉を欠いた情報体だ。

オルグイアはちらりとマーグリスに視線をやった。マーグリスはうつむいたまま一瞥もむけない。オルグイアは無言で、ひざまずくマーグリスの脇を通り過ぎた。

マーグリスが口を開く。

《猊下におかれましては、ご機嫌麗(うるわ)しく――》

オルグイアは足を止めた。振り返って、マーグリスを見る。

「うわべの挨拶はよい――聞けば、Y資料を保持していたレアリエン、クーカイ・ファウンデーションの手に落ちたそうだが、これについての釈明はあるのだろうな」

教皇の声は彼が通りすぎてきた長い歳月にすっかり錆びつき、砂をこするような微細な破裂音が混じっている。

《たしかにY資料を保持していた百式プロトタイプは、現在クーカイ・ファウンデーション、つまりは第二ミルチア政府によって保護されております。ですが――》

「これがどういう事象か、正確に理解しておろうな」

《かの男――U.R.T.V.アルベドによれば、Y資料には強固なプロテクトがかけられ

ており、これの解除には第二ミルチアにあるU.M.N.管理局での解析が不可欠とのこと。それも踏まえた上での現在の事象。すでに次の手は打っております》
教皇はおおげさに鼻を鳴らした。
「――先だっての第二ミルチアへの侵攻、ハインライン枢機卿による連邦軍上層部の操作と聞くが、これについては訊いておるか」
《その件については、わたくしは何も――恐らくは組織の思惑を考慮しての卿独自のご判断かと》
「そのことば、信用に足ると見てよいのだろうな」
マーグリスはうなずいた。
《むろん。わたしは猊下への忠誠を誓った身、古の教義に振りまわされるつもりは毛頭ございませぬ》
教皇はしばらく沈黙した。
「――まあ、よかろう。近々我が船団は非武装宙域に対しての侵攻も考えておる。このわたしを失望だけはさせないで欲しくないものだな」
《承知いたしております。必ずや吉報をお届けいたしましょう》
マーグリスの映像が薄れはじめた。
教皇が、ふと思いついたようにいい添えた。
「マーグリス、わたしはあのU.R.T.V.は好かない。ある下賤な男を思い出すのでな。

それだけはおぼえておいてくれ」
《御意（ぎょい）――》
マーグリスの映像は消失した。
オルグイアは虚空（こくう）をしばらく見つめ、靴音もなく聖堂を退出する。
腰に吊（つ）したライトサーベルの柄が音を立てる。
廊下は強化ガラスで覆われ、闇に抱かれている。瞬かぬ星の海。
彼女はゆっくりと暗闇の廊下を歩いた。白い肌にうっすらと青白い血管が浮かび、殺意の衝動に脈打つ。
わめきたてる頭の中の声がやかましかった。オルグイアの唇に笑みが刻まれている。
それに気がついた彼女は自分の表情を押し殺した。
「下がってろ、マネス」彼女はつぶやいた。

【第二章】追跡

I

ヴェクター・インダストリー〈KOS-MOS〉関連書類
ファイルナンバー▼02664３

※本書類はヴォークリンデ襲撃事件から〈天の車〉出現事件に至る一連の事象を解明のためにヴェクター社内に設置された各調査委員会の依頼に従って、提出者の主観によって事後作成された報告書の概略である。諸々の出来事の生じた日時、物質および波動状況の記録等の詳細については調査委員会の各データリンク先を参照のこと。

巡洋艦ヴォークリンデを旗艦とした小艦隊は、対グノーシス用戦闘アンドロイド〈KOS-MOS〉の起動実験および実戦テスト中にグノーシスの大群による襲撃を受けた。グノーシス出現に至る原因・経過などは提出者には判断できない。同艦隊はゾハルエ

ミュレーターの回収を目的にしていたようだが、この襲撃との関連性は不明である。
同日同時刻、私はKOS-MOS関連のシミュレーション・プログラムを終えた直後だった。艦隊はグノーシスの襲撃を受けて、その初撃の段階でほぼ壊滅、機能停止に陥った。
グノーシスの艦船への侵入によって、同艦内で局地戦が展開された。この際、KOS-MOSは、凍結中であった自律モードにより自発的に起動した。搭載の超広域ヒルベルトエフェクトを発動することでグノーシスを固着し、その後も武装によって艦内グノーシス掃討にあたった。
航行不可能となったヴォークリンデから脱出したKOS-MOSおよび私シオン・ウヅキおよびアレン・リッジリーは、その後、クーカイ・ファウンデーション所属の貨物船エルザに回収され、同船のマシューズ船長の協力を得て、KOS-MOS移送のために第二ミルチアへとむかうことになった。
エルザは、ミルチアへの航行途中に、U-TIC機関の本拠地プレロマより脱出逃亡中の百式観測用レアリエンのプロトタイプM.O.M.O.および彼女の護衛サイボーグであるジグラット8を保護した。その後、エルザはファウンデーション旗艦の〈デュランダル〉と合流して、M.O.M.O.は、エルザの雇用主であるクーカイ・ファウンデーション代表理事のガイナン氏、およびガイナンJr.氏の保護下に入る。
しかし、このため、我々はU-TIC機関およびアルベドと名乗る男の追撃を受ける

ことになった。

この後、連邦艦隊により、第二ミルチア政府およびクーカイ・ファウンデーションは包囲を受けたが、このときに我々のものとして挙げられた諸々の容疑は、これらU-TIC機関らの謀略によるものと推測する。ヴェクター社より連邦に提出された証拠書類もこのことを証明しているだろう。

U-TIC機関と綿密な協力関係にあると思われるアルベドという人物は、数度にわたって執拗にM.O.M.O.を狙い続けている。その動機は提出者には不明である。

第二ミルチア軌道上における〈ネピリムの歌声〉発生装置と〈天の車〉の出現という危機的な事象は、彼の手によって引き起こされたものである。特に、ミルチア紛争時より所在不明だった巨大エネルギープラント〈天の車〉は、M.O.M.O.の製作が実際に行われた頃の出力機能をいまだに維持していた。判断と行動が遅れれば、その攻撃能力は第二ミルチア壊滅にも結びつきかねないものであった。

これらの事象に対する危機回避にも、KOS-MOSの自発的な判断と行動が必須のものであったと提出者はここに特に強調するものである。KOS-MOSのこうした動向は統合OSを開発した私にとって、非常な違和感をともなうものだった。

KOS-MOSの基本設計者である故ケビン・ウィニコットの遺したKOS-MOS中枢部分を占めるブラックボックスの部分が多大に影響していると思われる。これは今後の研究における重要な課題である。

KOS-MOSは依然として自律的に稼働中である。そのプログラムにはいまだに不安定な要素も多く、さらなる改良が必要であると判断する。

ヴェクター・インダストリー第一開発局
KOS-MOS開発統合オペレーション開発主任シオン・ウヅキ

2

壁面の遮光スクリーンが開放され、Jr.の視界は真っ青に染まる——海が見えた。ブリッジから見る空と海には一望して、眩しい太陽の光が輝き渡っていた。貨客船エルザは海上数百メートル上空を駆けている。足元からエルザ内部の振動が伝わる。

エルザの諸機能が成層圏内の仕様に切り替わっていく。船内の人工重力が機能を停止し、船内の大気成分が更新され、惑星第二ミルチアのものに一致する。耳の奥が気圧の変化にキンと痛んだ。

Jr.は強化ガラスの天板から青い空を見あげ、深く息を吸いこんだ。額に降りた赤い前髪にむかってヒュッと口笛を吹く。

エルザのブリッジは、このクラスの貨客船としては平均的なサイズと構造だ。

奥行きは約十五メートル程、幅十メートル弱。
中央部の可変アームに支えられた船長席には、むろん今日も、このエルザを指揮するマシューズ船長の姿がある。ブリッジ先頭に設けられた流線形の操舵席（コクピット）にはタンクトップに軍パン姿の操舵士トニー。この操舵席のやや後方、左右に位置する端末機の前に、ナビゲーターのハマー、それにケイオスといった、エルザではおなじみのメンバーが座っている。
エルザ内では対グノーシスのスペシャリストとでもいうべき役割を果たすケイオスは、クセ者ぞろいのエルザクルーの中でも、もっとも正体の掴めない不思議な存在として際だっていた。銀髪に褐色の肌。十代後半の青年に見えるが、十四年前に出会ったときからその姿はほとんど変わっていない。
U.R.T.V.の変異体として不老の特性を持つJr.も、十数年間この十二歳の少年の体を保持し続けているが、このケイオスの場合は、そうした能力とか特性を超越した、まったく異なる時間軸をごく自然に生きているように感じるのだ。
しかし、宇宙に散った人類は、サイボーグやレアリエンの開発をはじめ、自らの手で様々な多様種（バリエテ）を形成してきた。不老手術や特定の姿にデザインされたレアリエンなどを勘定に入れれば、不変の容姿など異形のうちにも入らない。
もっと理解不能なのは、ケイオスの持っているグノーシスを素手で消滅させる力のほうだが、これについても本人が説明しない以上ことさら聞かないことにしているし、む

ろん公にも沈黙を守っている。
　これは社会的にミュータントと呼ばれて排斥され、差別を受ける多彩な人々を人材として抱えるクーカイ・ファウンデーションの代表理事として、Jr.が自然に身につけてきたやり方だった。
「第二ミルチアはもう目と鼻の先だ。ここまで来れば新たな襲撃もねえだろ。モモ、おつかれさん」
　頭上から船長がいった。
　はい、と明るく返事をして、モモはレーダー端末席を立った。頬にかかった桃色の髪をそっと指先で払って、こぼれるような笑顔をJr.にむける。
「どうした？」
「ほっとしました。うれしいです。みんな無事で到着できて」
　モモは笑顔のままでそばで彫像のように立ち尽くす男を見る。
　通称ジギーことジグラット・エイト。モモと任務に比類なき忠誠を守るこのボディガードは、いつでも臨戦態勢の冷静さを崩すことはない。
　接触小委員会の依頼を受け、単身U-TIC機関の本拠地プレロマに侵入。拉致されたモモの身柄を奪還し、守り続けてきた。
　ジギーの金属製の義体はサイボーグとしてはすでに旧式の部類に入る。だが、その冷静な判断能力こそが今日までの高い任務達成率の基盤となっているのだろう。

体格は大柄で、子どもの体であるJr.や、少女としてデザインされたモモにとっては見あげるようなかっこうになる。
ジギーは透き通った青い目でモモを静かに見下ろしていた。その無表情は以前より少しだけ穏やかに見えた。
ブリッジに満ちた白い陽光がこの微笑ましい光景を照らしている。
Jr.はジギーとの会話を続けているモモの姿をちらりと見やり、愛着のある黒いコートをなびかせて、マシューズ船長のもとまで歩いた。
マシューズ船長は半身を返して、トレードマークの赤いキャップの下で少し気遣わしげに眉をひそめる。
「大丈夫ですか、ちび旦那。なんだかお疲れのご様子で」
「ああ、大丈夫だ。体が興奮して、血の気が引いてるんだろ。けっこうハードな日程だったからな」
「まあ、あんだけむちゃな荒ごとを続けりゃ、エンケラフィンやらエンドルフィンやら頭ん中に大洪水でしょうな。こっちは、無謀なオーナーとクルーどもの調整役って役回りだ。胃液大噴出で、かぼそい胃がちぎれそうだ。ファウンデーションの豊饒(ほうじょう)な予算とやら、ちょこっとばかりこっちにまわして欲しいや」
「また借金を増やすつもりか？　胃腸が酒樽(さかだる)でできてるんだろ？　エルザのなかで船内バーがいちばんコストのかかる部署だってドロイドどもが漏らしてたぜ。カクテル・マ

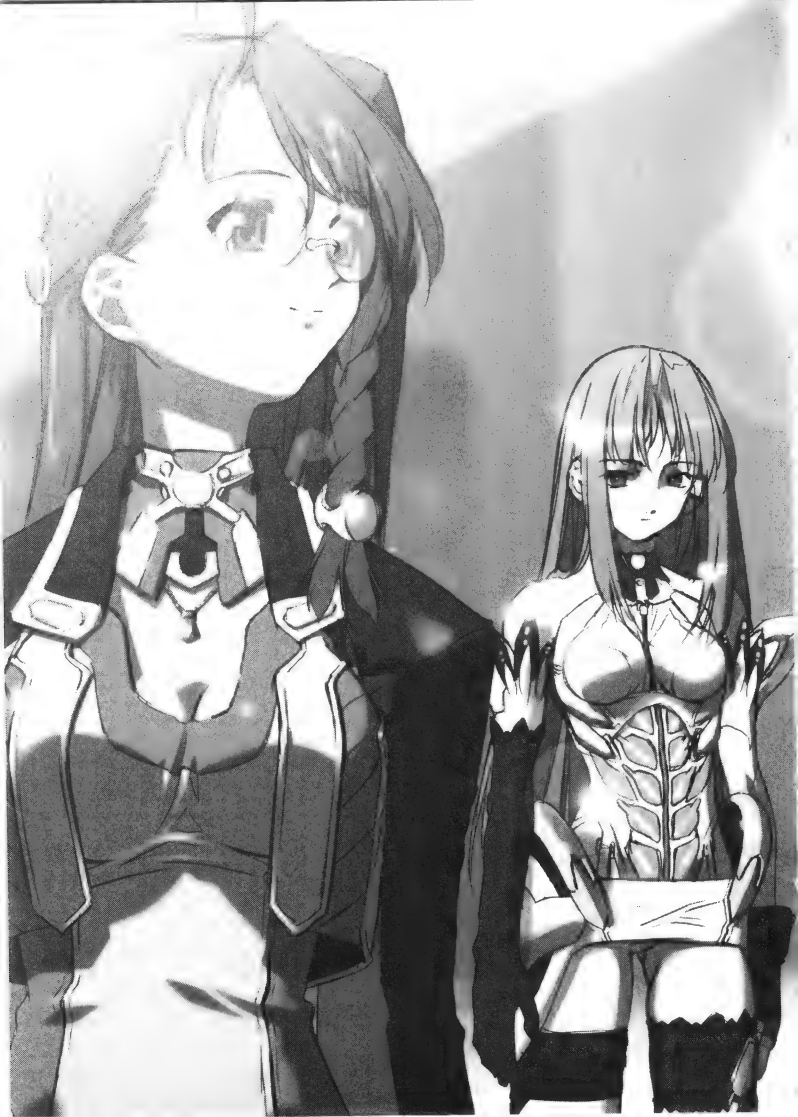
シューズスペシャルってなんのことだ」
　マシューズ船長は首を縮めて体をひるがえし、キャップを深々とかぶりなおしてその表情を隠した。
「これでも燃費は追求しているんですがね——で、どうなるんですか。これから」
「第二ミルチアに降りたら、エルザクルーはとりあえず放免だ」
「そりゃまあ、ひさしぶりの休暇ですな」
　マシューズ船長はうれしそうにうなずいた。シートに深々と身を沈めて、まだ見ぬ豪遊にでも思いをはせているのか、不敵な笑みを浮かべる。
「だが、所在については必ずどこかに記録を残しておいてくれよ。状況しだいではすぐに動くこともありうるからな」Jr.はくぎを刺した。
「へェ。了解——」マシューズ船長は肩をすくめる。
「で、ちび旦那のほうはどうするんで？　モモを運ぶってのは——」
「市庁舎までのモモの護送については引き続き、おれたちがやる。連邦政府と自治政府のあの軍事摩擦の直後だからな。いたずらに軍隊は動かせない。宇宙港にリムジンが用意されているはずだ。それでモモを市庁舎まで運ぶ」
「しかし、大丈夫かねぇ。また妙な連中が出てきたら——」
「ヘルマーのおっさんのいうところじゃ、U.M.N.や宇宙港の出入りをチェックしても、所属不明の軍事物資が第二ミルチアに運びこまれた形跡はないらしい。第二ミルチ

アの索敵は奇襲にそなえて惑星全域を覆っている。つまり、現在、第二ミルチアに敵対勢力の影は皆無らしい」
「なるほど。どうやら、ひとまず安心ですかね」船長は腕を組んで唸(うな)った。
「ま、いざってときの方法はあるさ。それよりも気になるのはアルベドの動きだ。どう考えてもあいつがこのまま引き下がるとは思えねえ。アルベドが、ウ・ドゥとの再リンクを目的とする以上、モモを簡単にあきらめるはずはねえからな」
「そうかねえ。あいつもこっぴどく負けた後なんでしょう？　ほんとうはちび旦那はアルベドとやらに早く会いたいんじゃないですか？」
「バカなこというんじゃねえ。そんなわけねえだろ」
船長の何気ない揶揄(やゆ)でJr.の顔色が変わった。Jr.は自分で気がついてとっさに表情を取り繕(つくろ)ったが、船長は雇用主の動揺を敏感に察して押し黙った。
Jr.は無意識に自分の右胸を押さえていた。どこかにいる兄弟の心臓の鼓動をそこに錯覚した。この錯覚はいつでもどこでも消えることはなかった。
アルベドを許せない、しかし心から憎めない。Jr.はそう思い込んできた。自分はアルベドの狂気にもっとも責任を負うべきひとりだ。だから、アルベドのことは殺すではなく捕まえるのだと自分にいい聞かせてきた。だが、おぞましい何かが心の殻を突き破ってどこかに噴き出そうとしている。やつを殺せ、と。
背後で扉の開く音が聞こえた。ヴェクター第一開発局のシオン・ウヅキとアレン・リ

ッジリーがブリッジに入って来る。ふたりは〈天の車〉事件で傷ついたKOS-MOSの調整に取りかかっていた。
「シオンさん。KOS-MOSさんは大丈夫でしたか？」モモがシオンに駆け寄った。
シオンは眼鏡をはずして、そのフレームでこげ茶色の頭髪を掻（か）いた。
「うん、まあね。いろいろ細かい故障はあったけど、とりあえずメインフレーム部分は無事みたい」
扉のむこうにはKOS-MOSが立っている。ガラス球のような赤い瞳にブリッジの光景が映っていた。
「ほんとに、どうなることかと思いましたよ」アレンは眠そうな目をこすって、大あくびをする。
シオンはなぜか浮かない顔で、手にした眼鏡に目を落とした。
〈Kosmos Obey Strategical Multiple Operation System〉略称KOS-MOS。
星団に名高いヴェクター・インダストリーが、その叡智（えいち）を尽くして開発した女性型アンドロイドの試験体である。
増幅器（アンプリファイアー）を必要としない単独での超高域ヒルベルト・エフェクトの発動を可能とするなどグノーシス対策の切り札になると目されている。
さらに様々なオプションに対応する汎用性の高い仕様になっており、統合オペレーションシステム開発主任のシオンでさえその多機能の全貌はわからないほどだ。

この航行中、多くの局面でKOS-MOSは自らの意志で動き、エルザを救った。
KOS-MOSのこの活躍は、同時に、長い間このアンドロイドのOSを開発してきた研究者を当惑させるものでもあったようだ。KOS-MOSの届け先であるヴェクター支社に近づくにつれ、シオンは無口になっていた。
KOS-MOSはブリッジを歩き、立ち止まった。
ちょうどまっすぐに射しこんだ陽光を真っ向に浴びて、青い髪が煌めいていた。
ここに集った人間たちの描く複雑な陰影模様など考えることもしないだろう。太陽の光に包まれた立ち姿は、古代の人間が天空や海に住まうと想像した女神のイメージそのままの超然とした雰囲気だった。
Jr.もそれにつられて光る海面を眺めた。
「――あの」アレンが口を開いた。
「客室のドロイドたちが、もうすぐ到着だっていってたんですが」
Jr.はうなずき、陽光の輝く水平線を指した。
「まあ、見てな。けっこう見物だぜ」
トニーとハマーが同時に歓声をあげる。
碧空と海の間の地平線。忽然と巨大都市がその姿をあらわした。
ミルチア移民が築いた第二の故郷。地に根ざし暮らす人々の息吹が無数の鐘楼群となって天を駆けのぼる。

その根本にはハイウェイの影が排熱に揺らいで、都市の活気をここまで伝えている。KOS-MOSは特に声を発することもなく、人の営為の証であるこの都市を見つめ続けていた。
「Jr.君たちは着いたらすぐにモモちゃんを送りに行くのよね？」シオンが訊いた。
「ああ、シオンたちは――ヴェクター行きだよな？」
シオンは、Jr.を見やり、モモを見つめ、それからKOS-MOSを見た。アレンが子犬のようなまなざしで見守っている。
「そうね。少し考えさせてくれる？　もちろん、モモちゃんに付き添ってあげたいけど、KOS-MOSのことも心配だし。KOS-MOSはどう思う？」
〈シオンの決定に従います〉美しいアンドロイドは平板な発音でそう答える。
「シオンさん。モモは平気ですから、KOS-MOSさんのことを優先してください」
モモは気遣わしげな顔だった。
「ごめんね。この子にはずっと無理させどおしだったから。調整タブでの整備じゃ追いつかなくなってきてる。ひどい故障を起こす前に二局でなんとかしておきたいの」
シオンは眼鏡をかけなおし、もの憂げにKOS-MOSを眺めた。
船長がクルーたちにむかって大声で叫ぶ。
「さっきの話聞いてたか、おまえら。第二ミルチアに着いたら休暇だ休暇。つまんねえ事故起こして台無しにするんじゃねえぞ」

「ういっす」「あいさー！」トニー、ハマーの喜びの声。
同時に、船体は斜めに傾いで、唐突に急降下。明るい悲鳴がブリッジに響きわたる。
「トニー。いったそばから船をちょろちょろ踊らせるんじゃねえ」
マシューズ船長の怒声にトニーは逞しい右手をひらひら振って応える。
「もう、ほんとにいい加減に頼むっすよ。トニー、管制が混乱するじゃないっすか」
ナビシートからハマーが叫んだ。
「わぁってるよ。星に降りるのもひさしぶりだから、こいつを遊ばせてやりたくなっただけだって」
トニーは先頭の特等席から後方の一同にむかって頭上で両手をあわせた。
「酒と女と太陽の休日がおれを待ってる！」
〈ようこそ、第二ミルチア へ。こちらは第二ミルチア宇宙港管制局。リピート。こちらは第二ミルチア宇宙港管制局。登録艦船コード１４８５ポイント５・ローエングリン級高速航宙クルーザー・エルザ。該当船舶の乗員は宇宙港の滑走路利用における所定の手順に従い、着陸作業に取りかかって下さい。レディ。カウント。五〇〇、四九九――〉
宇宙港からの機械音声が再生される。
「お、滑走路のビーコン、捕まえたっすよ」ナビシートからハマーが叫んだ。
「みんな定位置について着陸のショックにそなえるっす！」
「おれが舵とってるんだぜ。ショックなんかありえねえよ！」トニーが叫び返す。

操舵士の宣言どおり、エルザはしごく穏やかに第二ミルチアに着陸した。

着陸のどさくさで、小さな事件がひとつ。

ヴェクター第一開発局副主任アレン・リッジリー二十四歳が、同開発主任シオン・ウヅキ二十二歳の長年愛用してきた眼鏡を踏み潰した。

3

U.M.N.による物質転送を利用すれば、様々なもの――兵器から、家族への手紙、クイズ番組の景品まで――は、別の惑星へも即座に転送することができる。待ち時間もほとんどなく、貨物船などを使うより事故も遥かに少ない。

しかし、それでも宇宙港に発着する船舶が絶えることは決してなかった。

それはなぜか――。

むろん、生物だけは転送が不可能だからである。

それでは、なぜ生き物だけはU.M.N.での転送ができないのだろうか。

この疑問については、これまでも様々な説が浮上しては消えてきた。

曰く、物質の再構築の際に生物の持っている運動素が散逸してしまうから。曰く、U.M.N.内部に生息する生命体が生物を食べてしまうから。曰く、魂を転送することはできないから。いずれも突つけば証明不能な泡沫論にすぎない。

この議論はグノーシスにまで及ぶ。一見して生物とおぼしきこの存在群は、人間よりも遥かに自由自在にU.M.N.に出入りし、宇宙のどこにでも突如として出現することができるのである。

この事実に、グノーシスを研究する人々はさらに複雑怪奇な理論矛盾へと迷い込むことになった。

生体転送の実験プロセスでは多くの人間が廃人になり、さらに多くのレアリエンが廃品となり、無数の実験マウスが虚空に消えた。

けっきょく、生物転送の不可能性について、人類はいまだにいかなる結論にも到達していない。今も昔も、人は船に乗り、ネズミたちは古式どおりに船底に隠れる。

スペースシップの果たす機能は、ほぼ純粋に人やその他の生物を運ぶことに限られている。

長距離を移動するスペースシップは、U.M.N.管理局と連絡を取り合い、〈コラム〉と呼ばれるU.M.N.パルスのアドレスを伝って、無数のジャンプを繰り返して目的地をめざす。

直接転送ではなく、このように間接的にU.M.N.を利用することで船乗りたちは宇宙を駆ける。

そして、長い旅を越えてきた船乗りたちにとって、惑星の宇宙港ドッグに降り立つ瞬間は、深い安堵感をもたらすのだった。

ところが、今日のマシューーズ船長はエルザを見あげて苦い顔だった。
「なんでぇ——格納庫まで開けろってか？」
緑の制服を着込んだ一群がぞろぞろとエルザを取り巻いている。
マシューーズ船長は制服の職員たちがやたらにあちこち触りまわり、のぞき込むのも気に入らないようだ。
犯罪組織などが表立ってU.M.N.では送ることのできない非合法物資を密輸するのに船舶を使用することはあった。そのため、エルザのように比較的大規模な格納庫を持つ船はチェックが厳しい。
モモのことがあるから、今日はファウンデーション代表理事の顔パスというわけにもいかなかった。あまり騒がしく表沙汰にしたくなかった。
しかし、マシューーズ船長の動揺は見るからに大きかった。もしかしてほんとうに船のどこかに非合法の物資でも隠しているのかもしれない。それもありうる。
「ヘルマーのおっさんが気をきかして入国審査厳しくしてんだろうな。わりぃ、船長、おれたちは先行くぜ」
「ご無事を祈ってますよ、ちび旦那。U.M.N.利用代と修理の請求書はまわしておきますんでよろしく——おい、トニー、そんなところでアブラ売ってないで、こっち来てあのボウフラどもに船の扱い方ってやつを教えてやれ」

マシューズ船長が怒鳴ると、少し離れて空港ガードの女性職員にしつこくつきまとっていたトニーがあくびをしながら返事をした。

＊

港には旅が引き連れてくる独特の開放感がある。
グノーシスの活発化やU－TIC機関の活動の過激化など不安定な情勢も手伝って、ひと頃よりはずいぶん旅客も少なくなった。
それでも、ファウンデーションとのあいだの定期連絡船の乗客や他の星へむかう団体客などの姿はよく見かけるし、新たな任地へむかう軍人らしき人間もちらほらいる。
海浜というロケーションもあって、そうした人々の髪やたもとからふと潮の香を嗅ぐことがある。宇宙から来たものと、海の彼方より来たものの交わる地点というわけだ。
港はある種のフィルターになって、宇宙からの旅人をこの星の大地に立つ人間に変える。
まだ人間が宇宙に進出する以前から、旅の終わりに港が果たしてきたこうした機能を、現代の宇宙港もまだしっかりと有していた。
ウェルカムゲートをくぐり、思いきり息を吸いこんで放ったアレン・リッジリーの第一声。
「あー、生きてるってすばらしい！」

けっきょく、Jr.一行は、ヴェクター支社に直接むかうシオンたちとは、このゲートの出口で別れることになった。
「なあ、しばらくこっちにいるんだろ？　仕事が終わったら遊びに行こうぜ」
「もちろん。いろいろ案内してあげるわね、モモちゃん」
シオンはここまで来て腹をくくったのか、去りぎわの表情は明るかった。
取り残されたアレンがシオンとKOS-MOSの後を駆けていくのを見送って、Jr.は小さく息を漏らした。
頭上の電光掲示板に宇宙からの情報や第二ミルチアのニュースが流れているが、今のところ特に変わったことはなさそうだった。ミルチア標準時一三時〇〇分。そろそろ市庁舎行きのリムジンが到着する時間だった。
「ちょっと待っていてくれるか」ジギーがいう。
ジギーが見ているのは、ロビーの端に設置されたインフォメーションブースだった。ブース端末機のスクリーン上を、この宇宙港のロゴ形をイメージしたホログラフィックがゆっくりと回転していた。利用者の列が切れ、ちょうど一カ所あいているようだ。
「小委員会に経過の報告を入れてくる。ミズラヒ博士もすでにミルチアに降りているそうだ。何か伝言があれば伝えるが」
「ママが来てるんですか？」モモは目を輝かせる。
「ああ」ジギーは穏やかにうなずいた。

モモは喜びに声を弾ませる。
「お会いできるのを楽しみにしていますって伝えてください」
「わかった。伝えよう」
ジギーは片手を軽くあげて、ブースにむかって歩いていく。
「外で待とう、Jr.。リムジンが来てるかもしれない」ケイオスがうながす。
Jr.はブースの端末機の前に立つジギーの後ろ姿を見つめた。
そういえば、おっさんはモモを届けたらこれで任務終了なんだよな。
その後はどうするつもりなんだろうか。また生と死の狭間の世界に帰るのか？
実質はどうあれ、小委員会にとってジギーの公式の身分は「配備品」なのだとどこかで聞いた。
それが、ジギーのもう八十余年間も繰り返してきたサイクルだ。
相手の都合で仮死状態からたたき起こされ、経緯もわからない任務に配備され、それを果たせばまた仮死状態へ戻される。
レアリエンと同様に人型生物としての最低限の人権は保障されているが、とことん生きることに絶望しているジギーは自らそのほとんどを放棄していた。
部屋のスイッチを点けたり切ったりするみたいに命の火を灯されたり吹き消されたり、そんな最低の生活に戻るつもりなのだろうか。
Jr.は赤毛に手を突っ込んで頭を引っ掻いた――ったく、やりきれねえよな。

「ケイオス、モモ、先、行っててくれ」

Jr.はジギーのいるブースにむかい、ブースの入り口で足を止めた。

ジギーの青い義体の背中越しにホロモニターが見えた。

モニターの中のユリ・ミズラヒは葡萄色のスーツをござっぱりと着こなし、整った顔にかすかな微笑を浮かべている。Jr.は壁に設置された手すりに背中をもたれ、両腕を組んだ。

《了解しました。正式な引き渡しまで、引き続き任務に当たるように》

ユリの事務的な声が聞こえた。

ジギーは「はい」と告げ、しばらく迷った後につぶやいた。

「――ミズラヒ博士」

すでに手元の資料に目を落としていたユリがモニターのむこうで顔をあげた。

《――まだ何か、ジャン・ザウアーさん》

ジギーの義体がわずかに緊張し、張りつめた。

「今は――ジグラット・エイトです」

《そのようね》ユリは鷹揚にうなずく。

「モモが――あなたに会えると、喜んでおります」

《そう》再び書類に目を落としたユリの顔から完全に表情が消えていた。

《わたしは――》いいかけて、ユリは胸に手をあて、一瞬目を閉じる。頬が震え、その

顔が抑えきれない感情に強ばった。
《わたしもあなたがたの到着を歓迎します》
モニターからユリの姿が消え失せ、一瞬左右にひきつれ、また元どおりのロゴマークのホロに変わる。水色のロゴがゆったりと回転するのを、ジギーはしばらくじっと眺めていた。
「なんか、怖がってる感じだな。彼女に会うのをさ」Jr.は口を開いた。
ジギーは首を傾けて、横目でJr.を睨んだ。
「盗み聞きとは、あまり感心できる趣味ではないな」
Jr.は手すりから背中を離し、両手を広げて、できるだけ明るい調子でいった。
「なあ、おっさんさ。その体、炭素系にバージョンアップしないか？　戦闘レアリエンの技術を応用すれば、かなりいいセンいくと思うぜ」
「いたずらに寿命を延ばす必要はない」ジギーは即答する。
「あんたが長生きすると、モモが喜ぶだろ」
ジギーは再びロゴの回転に目をやった。首を振る。
「いや、遠慮しておこう。長生きするつもりはない」
「そうか」Jr.は目をつむった。「気が変わったら、いつでも声をかけてくれよ」
Jr.はそれだけいうとその場を離れる。
――ま、いいか。

選択肢はできるだけ多いほうがいい。運命からは概して逃れられない。だが、ちょっとした身じろぎひとつのスライドで生きるほうに転がり込むことだってあるだろ。

4

ゆるやかにホバリング。

機体下部のセンサーが働き、内部機構がボディを自動的に地上数十センチの位置に固定する。ハイウェイを行き交う車輛(しゃりょう)の間を縫い、リムジンは都市の動脈へと侵入し、加速する。

ドリンク一滴出てこない走り一辺倒のサービスだが、ドライバーの腕は最高級だった。ていねいでむだのない運転で、乗客は目をつむれば、移動中という事実さえ忘れることができる。しかも完全なる無口。無人の運転席に〈自動運転中〉を示す黄色いランプが点滅している。

座席全面は天井までわずかに黒みがかった透明なガラスだったが、UV効果は抜群で午後の強い陽射しにもストレスは感じない。

座席は六人乗りで、合皮を張ったシートが各三脚、前後に向かい合う形で置かれている。後部座席にはモモ、ジギー、ケイオスと並び、前の三脚はJr.ひとりで占有している。

といっても、べつにふんぞり返っているわけでも寝そべっているわけでもなく、窓際

の席で大人しく外を眺めていた。さすがにはしゃぐ気分でもなかった。
車窓のむこうはハイウェイの障壁。四車線のハイウェイをホバーモービルの河は渋滞を起こすでもなく、ハイウェイ上を整然と流れる。
ここを走る車輛の大半は、このリムジンと同じ自動運転なのだろう。車間はコントロールされ、それぞれが速度を落とすこともなく、上げすぎることもなく、スムーズな交通が続いている。
モモはしばらく何かいいたそうな様子でモジモジしていたが、そのうち意を決したようにさりげなく訊いた。
「ジギー、ママはなんて？」
ジギーは一瞬沈黙した。
「そうだな。とても忙しそうだった」
「やっぱり――」モモは視線を座席の下に落とした。
「接触小委員会を支える女性だ。相当の激務なのだろう」
「そうですよね。モモもママを支えられるようにがんばらなくちゃ」
努めて出した明るい声にも、隠しきれない寂しさが滲んでいる。
百式観測レアリエン・プロトタイプM.O.M.O.。
彼女はヨアキム・ミズラヒ博士の最後の作品だった。天才とも狂人とも謳われる、ゾハル研究で名高いヨアキム・ミズラヒ博士は脳物理学の分野でもほかを寄せつけぬ権威

だった。このミズラヒ博士がその研究成果のすべてを託したレアリエン。

このモモを祖とするバリエーションに、現在各艦隊に配備が急がれる百式観測レアリエンたちがいる。卓抜した観測能力と冷静な分析能力を誇り、また艦載アンプリファイアーに対応して限定ながら対グノーシス用のヒルベルト・エフェクトを行うことが可能な高性能レアリエンだ。

ファウンデーション旗艦の〈デュランダル〉にも数体の百式が所属していて、Jr.にとってもおなじみだったが、しかし、モモほど豊かな感情表現は見せることはない。

モモは人の愛情のそばにいることを強く欲している。だから、喜び、悲しみ、怒り、笑う。

ヨアキム・ミズラヒがその生涯をかけたY資料を隠すのに、なぜこれほど傷つきやすい器を選んだのか、その理由がJr.にはわからなかった。

ヨアキムの技術力ならもっと合理的な心理モデルを編むことも当然可能だったはずだ。

何度目かのトンネルを抜けて風景が開けた。

遠景にはオフィスビルが並ぶ。高層ビルの続く第二ミルチアの経済活動の中心地区である。ビル群の窓ガラスが鏡のように陽(ひ)を反射して輝いていた。ここまで来れば、到着まであと一時間弱といったところだろうか。

――なんだ？

甲高いモーター音を察知してJr.が顎をあげたのと、モモが小さな悲鳴をあげたのは同

時だった。
右側、ハイウェイ障壁の死角から、巨大な人型の機械がせりあがってくる。リムジンの走行に合わせて空中を併走している。
「敵か⁉」とジギーが叫んだ。
「くそ、市街のど真ん中でいきなりかよ」Jr.はシートから腰を浮かして、機械の巨人を睨みつける。
ライトパープルの細身のA.M.W.S.。球体の頭部はこちらを凝視するように傾けられ、艶（つや）やかな表面には走行するリムジンが映っている。
「前を見て！」ケイオスが前方を指さして声をあげた。
前方、左側の障壁が瓦礫を巻きあげて損壊する。
瓦礫とともにもう一機のA.M.W.S.がリムジンの前方上空に飛び出した。こちらは濃い灰色で見るからに分厚い装甲をまとった無骨な姿だ。
リムジンの真上まで移動し、車体に手を伸ばした。巨大なA.M.W.S.の手に掴まれて車体上部を覆うガラスの全面に亀裂が走る。上方からの圧力を受けて、リムジンの車体が激しく左右に暴れる。
モモが悲鳴をあげた。
「Jr.、これは⁉」ジギーがとっさにモモをかばった。
「アルベド⁉」Jr.の頭に白い髪の男の哄笑が響く。

Jr.はすばやく視線をめぐらせ、状況を確認し、懐のホルダーから二丁拳銃を抜き出す。

「いや、違うな。あいつにしちゃ紳士的すぎる」

Jr.はシートに背をつけて、A.M.W.S.にむけて発砲する。イメージしろ。拳銃に攻撃意志を伝えろ。体の中で荒れ狂う攻撃イメージを拳銃に託し、衝撃波の塊を弾丸とともに放出する。

銃弾が強化ガラスを貫通し、A.M.W.S.の装甲の上で爆ぜる。

ヒビだらけのガラスがみしりとたわんだ。A.M.W.S.はリムジンの上部をまるごと車体から引き剝がし、後方に放り投げた。

剝き出しになった車内に強風と耳を突ん裂くモーターの轟音が押し寄せる。

Jr.はコートの袖で顔を覆い、後方を睨んだ。

二機のA.M.W.S.はリムジンと同じ速度でぴったりと貼りついてくる。間近にグレー、そのわずか後方にライトパープルの機体。背景にそびえる高層ビルの輝きが網膜を灼く。

Jr.は座席の上に立ちあがった。コートの裾が背中から吹きつける風を孕んで、小柄な体に巻きつく。

二丁の拳銃で、続けざまに発砲。A.M.W.S.の装甲に衝撃が弾ける。受けるたびに巨体はわずかにぶれるが、たぶんダメージにはなっていない。

Jr.は思考をフル回転させて、その場所に続く最短距離を計算する。

「くそ、オートじゃだめだ。誰か運転を」Jr.が叫んだ。
ジギーの胸に抱かれていたモモが顔をあげる。
「ジギー、放してください。モモがやります!」
モモはジギーの腕を振りほどいた。モモは這(は)うようにして車中を進む。
前席とのあいだに立っていたJr.は、モモが通れるように、あわてて自分の片足を持ちあげた。モモはその下を器用にくぐり抜けていく。
「おい、モモ?」Jr.は戸惑って声をかける。
モモはそのまま運転席に滑り込み、ハンドルを握った。
「Jr.さん!」モモが運転席から振り返る。
「よし」Jr.はうなずいた。
「座標2089だ。思いっ切り飛ばせっ!」
風と轟音に負けぬように、大声で怒鳴る。
リムジンのモーターが高いうなり声で応えた。
突如、リムジンは超高速でホバーモービルの列の中に突進する。
Jr.はシートにしがみつく。リムジンは次々とあらわれる車輛を右に左にかいくぐりながら、さらに速度をあげてハイウェイを駆け抜ける。
背後からはA.M.W.S.が執拗な追撃を続けていた。
目の前にさらにホバーモービルが迫る。

「うわああっ――――！」

Jr.たちの悲鳴が風を引き裂く。

急に方向をねじ曲げられたリムジンは、一時的にいっさいのコントロールを失って、宙に浮いて斜めに傾(かし)いだ。慣性で横向きになったままハイウェイを滑走する。車体の右側が地面に擦り、投げ出されそうになったJr.の頭のすぐそばで火花を散らす。

モモは必死でハンドルにしがみついた。車体は激しく蛇行し、左右の障壁に接触を繰り返しながらそれでも走り続けた。

敵機はリムジンを見失わないために上空に高度をあげた。Jr.はシートに背を押しあて、A.M.W.S.にむかって拳銃を撃ち続けた。

一機のA.M.W.S.が腕部を伸ばし、ランチャー弾を放った。

ランチャー弾は上空から白煙を曳(ひ)いて飛来し、前方のハイウェイ上に着弾、炎のカーテンを天高く噴きあげる。走行中のセダンやワゴン、トレーラーなどが炎に巻かれ、次々と玉突き衝突を繰り返して、前方に折り重なった。しかし、モモの操るリムジンは速度を落とさなかった。

「少し揺れます！」モモが叫ぶ。

リムジンの左側が徐々に持ちあがり、横転したトレーラーの荷台と障壁のあいだに見える細い隙間へ、滑るように疾走する。車外に転がり落ちそうになったJr.の手をケイオスが摑む。

Jr.はシートにすがりつき、歯を食いしばって、目を見開いた。
リムジンは、この死地から逃れるただひとつの道であるそのわずかな隙間を、ほとんど垂直になって一瞬のうちに駆け抜けた。
大破した車輛の群れが後方に流れていく。車体はゆっくりと地面に対して水平に戻る。この先、ハイウェイは巨大なトンネルにさしかかる。Jr.は荒い呼吸を整えつつ、後方に目をやった。
グレーのA.M.W.S.は徐々に速度を落とし、トンネルに吸い込まれていくリムジンを見送った。
「よっしゃ。やったぜ！」Jr.はシートの上に立ちあがって興奮して吼えた。
なすすべもなく滞空する敵A.M.W.S.の姿がしだいに遠ざかり、トンネルの壁で死角に入って見えなくなった。
リムジンはしばしトンネル内を疾駆した。かまぼこ型の天井の右半分は採光ガラスで造られ、そこから青い空が見えた。
Jr.は頭の中にすばやく街の地図を思い描いた。このあたりは工業地帯につながる水路が入り組んだ浄水施設になっているはずだった。
ここはトンネルというより、浄水設備に隣接するターミナルというべきか。壁面に歩道も敷かれ、このあたりを職場とする人々の往来が見えた。上部が剝ぎ取られて、オープンカーのようになったリムジンを驚いた顔で見送っていた。

Jr.は空を仰ぎ、安堵の息を漏らす。と、その顔に暗い影が落ちる。
採光ガラス越しに、球体の顔がJr.たちをのぞきこんでいた。
鼓膜をつんざく音とともに大きなガラス片がきらきらとトンネル内に降りそそいだ。
爆炎を噴いてライトパープルの機体が突入する。トンネル内は突如クモの子を散らす大混乱に陥る。
リムジンは車道にまで溢れてきた人々のあいだを巧みに駆け抜けたが、さすがに出力が落ちてきて、速度があがらなかった。
A.M.W.S.はリムジンの描く蛇行する動きを空中でトレースしながら、路上を舐めすくうように飛来し、Jr.の乱射する銃撃にひるまず、腕を伸ばして車体の後部を捕捉する。リムジンはがくんと大きく前に傾き、モーターがひどい音を鳴らした。
Jr.は後頭部をシートに打ちつけてうめく。球体の顔には魚眼レンズで見たようにグロテスクに歪曲したリムジンが映っていた。Jr.の噛みしめた奥歯が音を立てる。
「Jr.!」ケイオスの鋭い声。
ケイオスは後部座席に片手をついてバランスを取りながら、もう片方の手で円筒形のものを掲げて見せた。
——消火器か。
ふたりの視線が交わされる。Jr.は瞬時にケイオスの意図を理解した。
「よし!」Jr.が叫び、それを合図に、消火器はケイオスの手から離れ、空めがけて高々

と飛んだ。
Jr.はそれをふり向きざまに発砲した。消火器が爆散する。
白煙はA.M.W.S.を包み、そのままトンネル内に広がった。視界はいちめん真っ白に閉ざされる。
「どういう威力の消火器だよ」
Jr.は咳き込みながら毒づいた。モモがアクセルを踏み込んだ。Jr.はシートの中に倒れた。リムジンを掴んでいたA.M.W.S.の手が離れた。リムジンは地を跳ねて道路上に轍（わだち）を残して滑走した。
煙の切れめの歩道の壁にアーチが見えた。モモがハンドルをきると、リムジンは大きく尻を振りつつ、アーチにむかって猛進した。
リムジンは下にむかう長い階段を、派手にバウンド、ほとんどあらゆる部品を盛大にまき散らしつつ滑り降りていった。

5

路地の角から、Jr.は顔を突き出した。こめかみを伝ってきた水滴を拳で拭（ぬぐ）い、手のひらを振って水を切り、片手に拳銃を抜いて通りをうかがう。
浄水施設を走る地下水道を抜けてきたため、全身が水浸しだ。汚水でなかったのがせ

めてもの幸いだったが、ふやけたブーツは重く不快だった。
地下水道の地図など、街の施設の位置関係はだいたい頭に入っている。おおまかなものでしかなかったが最終的に辿り着ければいい。
頭上にハイウェイで襲撃してきた二機のA.M.W.S.の姿はない。さすがに振り切ったか。しかし、手にした銃を撫でて気を引き締める。これがモモを狙っての攻撃なら、A.M.W.S.だけの作戦ではありえない。自分たちを捕捉するために同時に地上部隊が展開しているはずだ。
モモの疲労も気になった。Jr.の背後にぴったりと身を寄せたモモは、健気に元気な笑顔をつくろっているものの顔色は魚のように真っ青だった。
道路はこの先で左右をビルに挟まれた緩やかな上り坂になっていた。坂の先はカーブを描いて公園へと続く。目標地点2089は公園を抜けたさらに先にある。現在の位置を頭に思い描く。
坂道を警護する三名の兵士たちが見えた。
サブマシンガンをベルトで肩からぶら下げ、白い外套とヘルメットで軍装を統一していた。明らかに訓練統率された部隊の動きだった。
兵士たちは白い軍装のせいで妙に清潔感に溢れて見えた。その上、防毒マスクで顔を覆っているため、どこかしら人間離れして見えた。
路地にヘリコプターの放つ喧しい騒音が響きわたった。震えるビルの窓。窓際からこ

となりゆきを見守っていた野次馬たちが怯えて建物の奥へと逃げていった。ヘリコプターの姿そのものは死角になっているのか、ここからは見えなかった。
——敵はいないんじゃなかったのかよ。
Jr.は内心に毒づく。いずれ駐留軍が制圧にかかるだろうが、それまで逃げきれる保証はない。建物に隠れれば一般の人間に犠牲者が増える。
Jr.はジギーと視線を交わした。
「もたもたしてるヒマはねえな」
「先制攻撃をするなら今がチャンスだ。敵は三人、こちらは四人」
「一対一以上なら、こっちの勝ちは揺るがねえ。どこかにいるヘリコと——他の敵チームを呼び寄せることを回避できればな」
Jr.はモモを振り返った。
「よし。一気に駆け抜けるぜ。おれとおっさん、ケイオスの三人でやつらを片づける。そのあいだにモモはあの坂を上って公園まで走るんだ。おれたちもすぐに後を追う。公園まで着ければ、遮蔽物も多い。隠れながら２０８９の防衛システムまで着ける」
「わかりました。がんばります」モモは真剣な顔でうなずいた。
「パーティしようぜ」Jr.はニヤリと笑う。
右の手のひらを肩の高さまであげて、握り拳に三本の指を立てた。
一本ずつ握る——三、二、一。「走れ！」

Jr.、ジギー、ケイオスの三人は敵兵めがけて走った。
「待て――貴様ら！」白い兵士たちが彼らを見つけて声を張り上げた。
――エーテルドライブ！
距離は充分だった。U.R.T.V.の波動を飛ばして、U.M.N.構造体に干渉、イメージで大気の様相を書き換える。空気が熱を帯びて、視界が歪んだ。
発生した炎の壁が兵士たちの眼前に押し寄せた。兵士たちは口々にどよめいて逃げ惑った。
「モモちゃん！」
「はい！」ケイオスの声を合図にモモは走り出す。
同時にジギーが加速しながら敵兵に突進していた。ジギーの振りまわした剛腕が、モモに気を取られた兵士を横殴りに襲う。兵士のひとりがたっぷり七、八メートルは飛んで、植え込みの中に消えた。
超至近距離からジギーに銃弾を撃ち込もうとした兵士のマシンガンを、白く発光するケイオスの腕が宙に跳ねあげた。マシンガンは空中で発光して消えた。おびえた様子の兵士の腹部をケイオスの腕が捕らえる。
「ごめんね――」ケイオスがつぶやいた。
次の瞬間、すさまじい音が続いた。兵士の体がくの字に折れ曲がり、地面に崩れ落ちる。

残った兵士はひとり。彼は絶望とパニックに襲われて、奇妙な雄叫びをあげながら、モモを追いかけて坂道を駆けのぼりはじめた。Jr.はすかさず背後から銃撃を浴びせた。兵士は坂道の途中で倒れて、動かなくなった。
そのとき、路地に風圧が押し寄せた。ビルの陰から一機の小型ヘリコプターが姿をあらわし、ゆっくりと下降してくる。
ヘリコプターの下部に設置された小銃が続けざまに火を吹いた。
「うわあっと——やべ。公園まで逃げるぞ！」
Jr.たちはあわてて身をひるがえして坂道を駆けのぼった。銃撃は三人の後を追って、少しずつ迫ってくる。
「Jr.さん、うしろ！」モモが叫んだ。
後頭部に灼かれるような感触があった。
突然、何か網のようなものに背後から巻きつかれてJr.は坂道に転がった。電流が頭のてっぺんから爪先まで走り抜けて激痛にうめいた。
捕獲用移動電磁ネットだ。触れただけで対象に激しい電気ショックを与え、警報を飛ばして主人を呼び寄せる兵器。
「こっちに来るな。モモを守れっ！」駆け寄ろうとするジギーたちにむかって怒鳴った。
電磁ネットの警報が鳴り響く中、Jr.は苦痛に歯がみしながら手足に絡まったネットを外した。

低空に滞空するヘリコプターの側面のハッチが開き、中から白い兵士たちが四、五人飛び降りて発砲してきた。
Jr.は応戦しつつ、体を引きずり、近くのビルのカフェスペースに転がり込んだ。ヘリコプターのばらまいた銃弾が自動販売機を目の前でスクラップにする。
Jr.はガードレールに身を低く隠した。散乱した鉄くずが足の下で音を立てる。再び銃撃。えぐられた建築材がぱらぱらと頭上から降ってくる。
両手の銃を凝視し、攻撃のためのイメージを高める。力が沸きあがり、腕を伝って銃に流れ込んでいく。同時にヘリコプターの巻き起こす轟音と風圧も一段と強さを増す。
銃を両手に手すりから身を乗り出したJr.の視界を白い閃光が駆け抜けた。光の矢は吸い込まれるようにヘリコプターの中に消えた。ヘリコプターがぽんと音を立てて空中でぐらりと傾いた。
「Jr.さん！」声を辿ると公園の入り口でモモが弓を片手に立っていた。
「まかせろッ！」
ガードレールに片足をかけ、ヘリコプターの滞空する六メートル上空まで一気に跳躍した。驚いて上を見あげた兵士たちに真っ正面からジギーとケイオスが襲いかかる。
Jr.は落下しながらヘリコプターにむかって続けざまに銃撃した。
ヘリコプターは火を吹き、宙をゆっくりと回転しながら、ビルの壁面に激突した。
「ケイオス、おっさん！　避(よ)けろ！」

三人は跳躍し、そろって路上に身を伏せた。背中を熱い爆風が灼いた。
おそるおそる振り返ってみると、坂道のど真ん中に鉄塊となったヘリコプターが激しく炎を吹き上げていた。
ジギーが立ちあがっていった。
「このままでは追いつめられる。先を急ぐぞ」
頭の上を銃弾がかすめて、Jr.は首をすくめる。
「たしかにな。いったい何人いやがるんだよ、ったく」
樹木から樹木へと身を隠しながら芝生の茂る広い公園を通り抜け、さらに上のブロックにむかうために長い階段を駆けのぼる。
「Jr.！」踊り場でケイオスが眼下を指さした。
例の白装の兵士たちが公園を横ぎってこちらに走ってくる。
Jr.は舌打ちして空を見あげた。
「どこからか見てんのか。このままじゃだめだ。モモ、目標地点の座標観測できるか？」
モモは少しためらいがちにうなずいた。
「先に行くんだ。ここはおれがひきつける。おっさん、ケイオス。モモを頼む！」
しかし、モモは躊躇して動かない。
「絶対、後から追いつくから、安心しろ」

モモの髪の毛をくしゃっとひと撫でしてから押し出した。
三人が走り去っていくのを見送り、壁に背をつけて意識を集中する。
ガイナンとのラインを形成するための思念波を編みあげる。精神結合。
《――ガイナン！　２０８９にむかってる。ヘルマーに援護要請を頼む》
しかし、返事はない。どこにもガイナンの気配を感じない。
クーカイ・ファウンデーションのふたりの代表理事として名を連ねるガイナンとJr.だが、果たしている役回りは大きく異なる。ガイナンが代表理事として外交交渉やファウンデーションという組織全体の舵取りに関わる激務をこなしてくれるおかげで、Jr.は実働部隊として自由に行動することができる。
ガイナンとJr.との念話はいかなる状況にあっても最優先として扱われるのがふつうだった。それがふたりの絆で、兵器として訓練を受けた彼らの習性でもあった。
――居眠りでもしてんのかよ。
舌打ちして、そっと顔を突き出して敵の様子をうかがった。さらに四、五人が集まっているようだ。あわてて引っ込めた耳の横を銃弾がかすめていく。
――落ちつけ。
胸を押さえて呼吸を整える。湧きあがる攻撃イメージが殻を食い破り、今にも噴出しようとしている。
《ガイナン！》Jr.は彼方の盟友にむかって懸命に呼びかけた。

＊

《無機質な部屋の床には迷宮めいてチューブが這いまわる。卵形の金属ポッド。それからむろん子どもたち――そう、同じ顔をした金色の髪の子どもたちが列を作る。むろん、おまえもその中にいる。なるほどこれはおまえの記憶というわけか。

この赤毛の子どもは、ああ、むろんおぼえているとも。まさか赤い竜（レッドドラゴン）を忘れるものか》

《――ガイナン！　聞こえないのか？　どこにいる？》

どこかで誰かが自分を呼んでいる声が聞こえた――誰だ？　ここはどこだ？

何かが意識の皮膜の上を這いまわっていた。精神の上を指で直接逆撫でられるような不吉な感触があった。近づきすぎて文字が読めないようなもどかしい感触だった。

それはおぞましくも怜悧（れいり）な手つきで意識をまさぐる。ルベドやアルベドの念話とはまったく違う、しかし、あまりに親しんだもうひとりの自分。

《それにしても、まったくおまえたちはそれぞれに傑作だったよ。おまえたちに比べれば他の標準体六百数十余名、退屈の限りだった。なあ、我が愛しい処刑人よ。わたしの最後の日、腹にはおまえの銃弾の空けた穴。そこから立ちのぼる、我が臓腑を灼く硝煙の香をどれほど甘美に嗅いだことか、わたしの返り血を浴びて茫然となったおまえの姿をどれほど愛おしく感じたことか、おまえにはわかるまい。

おや、なぜ腹を立てる？
心拍数に乱れがある。発汗数値もあがっているようだ。大した演技力だな。おまえの役割は感情を制圧する自壊回路ではなかったか。
今は安心しろ。落ち着くがいい。目ざめたときにはわたしはいない。
見えてきたか。執務室のマホガニーのデスクだ。しがみつくがいい。いわば、君らの勝利の証。ただの戦闘兵器でないことを身を以て証明した可愛いらしい記念品だ。
しかし、しようがない子だな。こんなところでちょっと居眠りというわけか。フフ、多忙といっても、ちゃんとベッドで休まないと疲れは取れん。おまえひとりの体ではないんだからな。ああ、瞬間はさし迫っている、もう、すぐそこだ。
さあ、政治と経済の時間だぞ、孝行息子。
起きるがいい。
そこに座っているのは、やさしくて賢くて凶暴な、いつものおまえだよ》
ガイナン・クーカイは、はっとして目を開き、覚醒した。焦点は定まらず、世界は二重三重にぶれている。全身に鳥肌が立っていた。頭痛もひどかった。今まで何かの声が聞こえていたような気がするが思い出せなかった。
目の前に銀製のコーヒーポットがある。よく磨かれたポットの歪曲面に映った自分のよく見知ったはずの青緑の目がまるで他人のように彼のことを見返していた。口の中は鉄錆の味がした。

《――おい、ガイナンってー》声が頭骨の中で反響した。
ガイナンは我に返って、身を起こした。こめかみに指を這わせ、動揺を押し隠し、意識を凝らす。ルベドの戦闘意志が波動を通じて流れ込んでくる。即座にルベドが戦闘中であることを認識する。
《すまない――状況は？》
ガイナンはようやくことばを頭に思い描くことができた。
《２０８９》ルベドの念話はもどかしげに最低限の情報を伝える。
《了解だ》ガイナンは淀む思考を懸命に回転させた。声に集中するためにさらに意識を片むけたが、ルベドの声はもう聞こえなかった。あれだけのやりとりで彼が正確に動いてくれると信頼しているのだろう。
ガイナンは立ちあがって通信機器に手を伸ばした。いかなる事態に応じても乱れることのない冷静な判断力には自負があった。しかし、それが今わずかに曇っていた。意識の半分以上が得体のしれない何かでくるまれて、腕はのろのろとしか動かなかった。
ルベドの信頼に応えねばならない。急いで第二ミルチアのヘルマーに連絡を取って、それから、メリィとシェリィに命じて――。
背筋を何か冷たいものが撫でる。デスクの上に置かれた銀色のポットの表面に、自分では触ったおぼえのない濃い指紋の痕がべっとりと浮かんでいた。
コーヒーカップからこぼれたコーヒーが受け皿の中にこぼれて液溜まりを作っている。

戦慄がじわじわと背筋を昇った。
——おれは何をしていた？

6

A.M.W.S.スキュータムは爆音を鳴らし、ビルをかすめて飛ぶ。
コクピット全方位に映し出される映像から、第二ミルチア市内の様子を見下ろしていた。人々は逃げまどい、あるいは立ち止まって身をすくめ、この襲撃に怯えている。
派手な炎がスクリーンをかすめ、相棒のリヒャルトの駆るA.M.W.S.パイラムが、頭上に滞空し、スキュータムを見下ろす。
少し苛立たしい思いで、男は頭上のライトパープルの機体を睨んだ。
HUDの横にはハッキングした偵察衛星からの拡大映像が五枚並んでいる。しかし、めまぐるしく切り替わる五カ所の映像には、どれひとつとして桃色の髪の少女は映っていない。
——逃がしたか。
男は軽く舌打ちする。公園に逃げ込むまでは動きを捕捉できていたのだが。
あと数分もすればこの衛星の映像もミルチア側に奪い返されるだろう。
惑星軌道上からの物資のショートジャンプと地上に忍びこませてあった人員でしかけ

た地空連動の即席の奇襲だ。この程度の不備はしかたのないことだと思った。
しかし、彼の上官がそれを許すかどうかは別問題だった。案の定、受信信号が入る。
男は緊張に顔をこわばらせて通信をつないだ。
モニターにプラチナブロンドの女の顔が映し出される。
U-TIC機関異端審問官ペレグリー。組織の中ではマーグリス司令に次ぐ副司令官という立場にある人物だ。マーグリス司令の連邦軍人時代からの補佐役という腹心中の腹心だった。
《リヒャルト、ヘルマン。ハイウェイにランチャーを撃ち込み、トンネルを破壊。派手な活躍のわりには実入りが少ない様子ね》
「申し訳ありません。しかし、おそれながらあれはリヒャルトが――」
《いいわけを聞いている時間がないの。失敗した上、余計な時間を取らせるつもりかしら。地上部隊が連中の映像を送ってきてるわ。回線10190。とりあえずそれを確認しなさい》
憮然としながらも、手元のパネルを叩き、同期画像を呼び出した。
荒々しいノイズが一面に走り、縦横に揺れ動いて、見ていると気分が悪くなってくる。画面のむこうでは銃撃戦が展開しているようだ。
奇妙なのは相手が少年のように見えることだった。
「これ、相手、子どもですか？　ターゲットではないようですが」

《残念ながら百式プロトタイプではない。それに子どもでもない。U.R.T.V.ルベド。ファウンデーションの代表理事の片割れだわ。あの、アルベドの情報ではね》
ヘルマンは息を呑んだ。
——この子どもがU.R.T.V.?
そういえば、ハイウェイのときにもこいつが攻撃してきた気がする。どさくさであまりつぶさに確認できなかったが。
確かに、あのリムジンから撃ち込まれた弾丸はスキュータムの重装甲に阻まれたが、衝撃波が内部機構にまで伝わっていた。あのまま追撃を続ければ機能不全を起こす可能性もあった。
「ターゲットがいない、ということは別行動を取っているということですか?」
《わかりきったことを訊くのねヘルマン。少しは頭を使って。これは追いつめられたがゆえの陽動作戦よ。このU.R.T.V.の位置から逆算して、データを当たってみたわ。そして、連中の目指している場所がほぼ特定できた》
「そこで待ち伏せしろ、ということですか。どこなんです?」
《ポイント2089。あとはそちらで確認しなさい》
ヘルマンは異端審問官を前にする緊張で震える指先でコンソールを叩いた。
機体搭載のコンピューターがはじき出した結果に目を細める。
——座標ポイント2089。

第二ミルチア第六防衛機構。街に埋め込まれたオートメーション基地。

解析結果によれば、一個師団の襲撃に二時間は持ちこたえるらしい。対空防衛網まで設備されている。街中にこんなものがあるとは、軍人あがりが政府代表をやっているだけのことはある。たいしたもんだ。

「了解しました」ヘルマンはいった。

《倒そうとは思うな。へたを打てば返り討ちに遭うわよ。U.R.T.V.だけでなく、プレロマに単身潜入した例のサイボーグがターゲットを護衛しているという情報があるわ》

ヘルマンの眉が不快にひそめられた。

――プレロマに単身潜入したサイボーグ。

胸の底に憎悪が湧いた。我らのプレロマを愚弄（ぐろう）した輩（やから）。たったひとりでプレロマに侵入し、百式プロトタイプを奪取して脱出した。

この件を受けてプレロマは廃棄処分にされるという噂があった。ロスト・エルサレムから脱出した船の名前が付けられた特別な場所だった。

いつか思い知らせてやらねばならないと感じていた相手だ。

《わたしが出る。だが、この機体で惑星軌道上から降下して、おそらく十五分程度はかかる。それまで時間を稼いで》

ペグリーはあいかわらず冷静な口調でいった。

「了解しました」ヘルマンは低い声で答えた。
コンソールを操作して、機体とU.M.N.との接続状況を高める。ぎしぎしと関節部のきしみすら伝わる、完全に機体と一体になったと感じる瞬間だ。スキュータムのモーターが応えて咆哮(ほうこう)する。
「リヒャルト!」
《ああ、で、一応確認しておくけど、むろん、おとなしく時間をかせぐつもりはないんだろう?》
パイラムから聞こえてきたのは精神の不安定を思わせるリヒャルトの甲高い笑い声だった。ヘルマンは応えずに通信を切った。
二機のA.M.W.S.は炎を散らし、再び狩りの地へと赴いた。

＊

Jr.は呼吸も荒く、階段を駆けのぼった。しつこく追いすがる敵兵を弾幕で攪乱(かくらん)し、細い路地に逃げ込む。頭の中に念話の声が響いた。
《Jr.、連中の目を発見した。偵察衛星が一機乗っ取られていたようだ。メリィが奪還作業中だ。約三十秒後につぶせる》
ガイナンは淡々と要件を報告した。いつもからするとどこか弱々しく感じられたが、Jr.はそのことは今は深く考えないことにした。

《サンキュー、ガイナン》
《今後はどうするつもりだ。ここまで動きが捕らえられていれば、２０８９が必ずしも安全とはいえんぞ。そこで待ち伏せされる可能性もある》
《それならそれでかまわねえさ。あそこで戦えば街に被害は出ないだろ？》
《なるほどな》
《後はおれにまかせな》
Jr.は念話を閉ざして、すばやく周囲を確認した。まだ、追っ手は来ていないようだ。偵察衛星とやらの逆ハッキングがすでに成功したのかもしれない。
路地に面した壁を蹴って跳躍して、塀の上に立つ。
第六防衛機構の中心をなす巨大な円塔形の基部が見えた。周辺はオートメーション工業地帯で、この時間帯なら作業員はほとんどいない。多少の被害は出るにしても少なくとも人命に影響はないだろう。
モモたちはもう到着したのか？
Jr.は目を細めて、クレーンの向こう側を見つめたが、誰の姿も見えなかった。
頭上で轟音が鳴り響いた。Jr.は腰を落として空を見あげる。
二筋の炎が空を駆けていく。ハイウェイで交戦したA.M.W.S.たちが、まっすぐ防衛機構にむかって飛んでいった。
――あんまりもたもたしてられねえな。モモが襲われちまう。

Jr.はあわてて塀の上を飛び降りて、第六防衛機構にむかって駆けた。

二機のA.M.W.S.が高度をあげる。

基部の側面からミサイルが発射され、細身のA.M.W.S.にむかって一直線に飛んでいく。A.M.W.S.は身をひるがえし、横殴りの剣戟(けんげき)で空中に薙(な)ぎ払う。爆風にA.M.W.S.の機影が紛れた。

――モモたちは上か？

第六防衛機構ビルの入り口はすでに開いていた。おそらく、ヘルマーが先回りして、敵味方の選別機能をすでに発動させてくれたのだろう。そうでなければ、Jr.がここまで特に設備の妨害を受けることなく近づけたはずがない。

Jr.は基部の内部に侵入した。

頭上から爆音が聞こえる。すでに戦いははじまっているようだ。

Jr.は拳銃を両手に抜きはなち、ビル内の階段を駆けのぼり、最上階へむかった。殺風景な階段を駆け抜けると、廊下の先に真っ白い出口が見える。

A.M.W.S.の駆動音が聞こえた。己の内に高まる殺気に髪がそそり立った。

出口から飛び出すと、そこは円形の屋上で、二機のA.M.W.S.がこちらに背をむけて立っていた。モモたちは屋上の端に追いつめられていた。ジギーとケイオスが、A.M.W.S.とモモのあいだに立ちふさがり、身構えていた。

拳銃を握った両手を脇に垂らし、Jr.は二機のA.M.W.S.にむかって無造作に歩いて

いった。
U.R.T.V.特有の波動を脳内に集中させる。
歩きながら両腕を伸ばして、二丁拳銃を上向きに構える。
背を撃つことにためらいはない。相手は特製のヨロイを着てる。
好みの〈貫く〉イメージ。脳から脊髄を伝い、全身の神経を鋭利に研ぎ澄ます。
標的はでかい。正確さはいらない。ただ破壊をばらまけ。
「うおおおおお——」
細身のA.M.W.S.にありったけの銃弾をぶちまけた。
A.M.W.S.はがくんと前のめりに膝をつく。半身をひねってこの奇襲の相手を確かめようとする。Jr.は笑みを浮かべ、一方の拳銃を球体形の頭部に差しむけた。
発砲——手応えが腕を伝い、頭頂部まで突き抜ける。
衝撃にのけぞるA.M.W.S.。すかさず飛び込んだケイオスの腕が発光した。
A.M.W.S.は機体をよじってうつぶせに倒れる。
屋上の床面が砕け、瓦礫が飛び散る。
もう一機のA.M.W.S.が空中に逃れるのをJr.は目で追った。狙い撃つのも歯がゆく、適当に発砲した。
銃撃は相手の脚部に命中し、バランスを崩した敵が目の前に墜落してきた。
「消えろ」Jr.はいった。

＊

脚部に爆発が生じて、機体がぐらつく。制御機能が一瞬停止し、スキュータムの重量のある機体が空中で一回転し、ビルの屋上に叩きつけられた。
コクピットを襲った衝撃波にヘルマンの意識が一瞬霞むむ。
「化け物め――」
トリガーに指を伸ばしたが遅かった。再度の衝撃がコクピットを襲った。
エネルギーの塊がコクピット内部に荒れ狂う。
ヘルマンはのけぞり、シートに後頭部を打ちつけた。体中の組織がばらばらになったようだった。体内の治療用ナノマシンが死滅していくのがわかる。
――殺される。
今までどんな戦場でも感じたことのない恐怖を感じた。生身の、子どもにしか見えない化け物に。
《何やってるんだ！　この役立たずが》リヒャルトのわめき声。
おれの体、どうなっちまったんだ。ヘルマンは両手を広げて、見つめる。
《もういい。ボクひとりで片づける》
パイラムが剣を振りかざして、U.R.T.V.に飛びかかっていくのが見えた。パイラムの左腕部の楯から無数の小型誘導ミサイルが発射される。一瞬、少年のまわりを赤い

光が包んだ。ミサイルは空中で次々と爆散する。
パイラムの背後に青い影が跳躍するのが見えた。
例のサイボーグ——単独でプレロマに侵入し、百式プロトタイプを奪取した。
「リヒャ——うしろ」ヘルマンの声はのどにからまって出なかった。
サイボーグの腕が炎を噴きあげたように見えた。
背後からの衝撃を浴びて、パイラムはのけぞり、屋上に瓦礫を巻きあげて墜落する。
パイラムはさらにU.R.T.V.の銃撃を浴びて、えびぞりにのけぞった。地を蹴って空中に逃れたが、U.R.T.V.の弾幕はそれを追い続ける。
リヒャルトの逆上しきった金切り声が通信で聞こえる。
ヘルマンにはコクピット内部がしだいに狭く薄暗くなってくるように思えた。
意識が薄くなっているのだと気がつき、ヘルマンは気力を振り絞って、もう一度、体を動かそうと試みた。
アラームがけたたましく鳴り響き、コクピット内が赤く染まる。
ヘルマンはめまぐるしく数値を変転させるHUDを愕然と眺めた。
——なんだ、この高エネルギー反応は？　近くに駆逐艦でも来てるってのか。
いや、違う。ヘルマンは頭上を見つめた。
上空に黒い機影が一機浮かんでいた。

7

かつて、人類がゾハルを発掘したとき、それと同時に十数基の奇妙な物体が見つかった。それは全長数メートルにも及ぶ巨大な脳髄の形をしていた。この構造体のことを〈アニマの器〉と呼ぶ。

人類は長い研究の結果、この遺物を巨大機動兵器に組み込み、その構造体に潜在する尨大（ぼうだい）な力を引き出す方法を発見した。

この機構を組み込んだ機体は、もはやA.M.W.S.とは別格の兵器と見なされ、畏怖をこめてE.S.と称される。その性能はE.S.一機で一星系の軍隊とゆうに匹敵するとまでいわれた。

それは、E.S.イサカル（Issachar）と呼ばれていた。U-TIC機関が再生に成功したばかりの機体である。

全高十五・一六メートル。重量二十四・七トン。黒を基調とした色彩の表面にうっすらと桃色の光をまとっている。右手には長柄の武装。左肩部付近にはイサカル最大の特徴ともいえる奇怪な手のひら状の機構が浮いている。

異様な唸（うな）りが天をつんざく。それだけで空の様相がまるで一変する。青く澄みわたった空がふいにまがまがしさを帯びる。

Ｅ．Ｓ．イサカルは大気に波動の軌跡を残しつつゆっくりと下降してくる。
屋上に半身をめり込ませた重装甲のＡ．Ｍ．Ｗ．Ｓ．が、細身の僚機に肩をかつがれるようにして、空中に浮かびあがった。
二機のあいだを悠然と舞い降りる黒い機体を睨んで、Jr.はあえいだ。
「まじ――か。なんだよありゃ」
ゆっくりと後ずさりし、モモの体をかばった。
挑んではならない。絶対に勝てない相手だと生体兵器としての全本能が告げる。
かわいらしい音を立ててオートメーション基地が遅ればせながらのミサイルを放つ。
その機体は遠く長柄の何気ないひとふりで簡単にそれを撃ち落とした。
Ｅ．Ｓ．イサカルはそのままゆっくりした下降で頭上十メートル付近まで接近して、その場から悠然とJr.たちを見下ろす。左肩に浮かぶ巨大で不格好な手のひらが不気味に蠢き、彼らを手招いている。
《これ以上の抵抗は無意味よ。おとなしく百式をわたしなさい》
冷厳な女の声が響きわたった。
巻き起こった風を全身に受けてコートの裾が激しくはためく。
Jr.は唇を噛む――どうする。考えろ。ちくしょう。モモを守らなきゃ。
モモがJr.の袖をぎゅっと掴んだ。
「Jr.さん、何か来ます。上空、高度七百メートル――」

Jr.ははっとして空を見あげた。空に、小さな何かが煌めいた。
太陽の中に一点――青紫の機影。
E.S.イサカルが何かを感じ、身じろぎする。
刹那――銃撃が、E.S.イサカルを襲った。E.S.イサカルは曲がりくねった軌道を描いて弾幕から逃れる。左肩の翼が変形し、避け損ねた弾丸を弾き飛ばす。
転瞬――青紫色の機体は空を駆け下り、二機は互いを結ぶ直線上で激突する。
四人は屋上に低く伏せて、二機の繰り広げる闘争を見あげた。
「あの機体――カナンか!?」
E.S.たちはもつれ合うように宙を駆け上がり、火花とともに弾け飛び、一気に数百メートルの距離をおいて天空で睨み合った。
E.S.アシェルは衝突で破壊された武装を捨て新たな武器を手元に転送し、E.S.イサカルからは、肩の手のひら状の機構(クレスケンス・ハンド)が飛ぶ。
それは空中でいくつかに分離して四方からアシェルに襲いかかった。
E.S.イサカル本体も槍を振りかざして、同時にアシェルに突撃している。
E.S.アシェルはユニットの攻撃から離脱しようと加速するが、E.S.イサカル本体の槍の牽制によってそれははばまれる。クレスケンス・ハンドは手のひらの形に再集合し、E.S.アシェルをその巨大な手のひらで握りしめた。
E.S.イサカルは槍をしごき、E.S.アシェルにむかって突進する。

「やばいっ、捕まっちまった。カナンがやられる！」Jr.は叫んだ。

E.S.アシェルは身をよじってクレスケンス・ハンズを振り払いつつこの一撃から逃れ、二機は空中で激しく再度激突し、ひとつの塊になった。

その瞬間彼らは不可思議な光景を見た。

衝撃波(ショックウェーブ)が瞬時に空いちめんを駆けめぐり、空気が一瞬凍(い)てついたようになった。

Jr.の視界から色が失われた。二機をとりまく空間だけ時間が止まったかのように、ぴくりとも動かない。

ぎこちなく関節部位を震わせて、揉(も)み合うような体勢のままで固まっている。

次の瞬間、音の波が天をつんざいた。否——音ではない。人には感知できない高周波の塊が二機を中心にして、世界にむかって瞬時に拡散する。

「きゃあ」悲鳴をあげてモモが耳をふさいだ。

その上にジギーが覆い被(かぶ)さり、繊細な百式の感性を高周波から守ろうとする。

「これは——ふたつの機体が共鳴してる？」

ケイオスも苦しげに顔をしかめた。

Jr.は耳をふさいで叫んだ。

「どうなんだ！　カナンは無事なのか？」

誰かが応える間もなく共鳴現象の拡散は一瞬で終わった。
あとに残された二機のE．S．からは目に見えてあの強大な力が失われていた。
脱力したように空中で絡み合っているだけだ。
《くっ、ここは退却する――》E．S．イサカルから女の声が聞こえた。
敵機はE．S．アシェルを蹴り飛ばして距離を取ると、ビルの谷間に逃れて急上昇をはじめた。二機のA．M．W．S．があわてふためいてあとに続く。
あとには力なく空に漂うE．S．アシェルが取り残された。
Jr．は立ちあがって、去っていく敵機を茫然として見送った。
勝利感も敗北感も何もない、災害でも起きて決着が延びただけといった後味の悪い無力感だけがあった。
「いったい何が起きた？」Jr．はこわばった顔で仲間たちに振り返った。
「わからない。でもあわてて退却したところを見ると、相手にとっても想定外のことだったことは確かだね」
ケイオスも、衣服や髪についた埃を払うのも忘れて、黒い敵機のもはやあとかたもない空を見つめた。
「で、あいつは無事なのかよ。あの現象の中心点にいて」
Jr．は拳銃を両脇のホルダーに戻して、E．S．アシェルを見あげた。
E．S．アシェルはしばらく放心したように空中に浮いたままだったが、やがて意識を

取り戻して機体を半回転し、地上にむかって下降して、Jr.たちの頭上に滞空した。
ふだんに比べると、その駆動音はまだ弱々しかった。
「よお、なんともないのか？　何があったんだ！」Jr.は叫んだ。
しばしの沈黙。それから――
《おれは大丈夫だ。それにしても理解不能だ。こいつがあんな挙動を示したのは搭乗してからはじめてのことだ》
声には動揺のかけらもない。Jr.は安堵の溜息を吐（つ）いた。
「まったく――助けるつもりならもっと早く来いよな。ヒヤヒヤさせやがって！」
「お知り合いですか」モモが訊いた。
「うん、古い知り合いだ」Jr.は何気なくケイオスと視線を交わした。
《そんな弱音を吐くとはおまえらしくもないな、ルベド》
E.S.アシェルからカナンの声が聞こえる。あれほどの戦いのあとだが息は少しも乱れていない。
「今はガイナンJr.だ。いい加減覚えろって！」
Jr.は苦笑して蒼穹（そうきゅう）に浮かぶカナンに怒鳴り返した。
《いまだに昔の印象が強くてな――しばらくは敵の追撃もないだろう。おれは先に市庁舎に帰還する。じゃあな》
そういい残すと、E.S.アシェルは反転し、大気に衝撃の波紋を残しつつ、飛び去っ

て行った。
モモはようやく安心したせいか、エルザにいたときに見せていた笑顔を少し取り戻していた。Jr.はなんとなく照れ隠しに桃色の頭を軽く小突いた。
「あいつ、ひさしぶりに会ったってのに、あいかわらず愛想もくそもない野郎だな」
「あの――」おずおずとモモが訊いた。
「モモも、ルベドって呼んでいいですか？　とっても綺麗な名前です」
Jr.の笑顔が一瞬固まった。それから小さく、すばやく、かぶりを振った。
「ゴメン、それは――」早口でいいわけしようとして、声は喉に詰まってしまった。
「あ、ごめんなさい」
「あ、あんまり、いい思い出のある名前じゃないからさ」
モモは半分だけ納得したようにうなずいたが、少し寂しげな表情になった。
「――Jr.さんもジギーも自分のほんとうの名前があまり好きじゃないんですね」
Jr.はまた頭を振って、浮かびかけた少女の幻影を消した。
「ま、いいじゃねえか。おっさんはジギーって名前を気に入ってるみたいだし。ちょっと犬っぽいつうか、忠犬っぽい響きだけどな」
Jr.は、屋上の入り口付近に立ってまだ敵の接近を警戒するジギーを、おどけた表情で指さした。
それからJr.は急に脱力を感じて、屋上に積み重なった瓦礫の上に座り込んだ。黒いコ

ートが風に大きくたなびいた。口をとがらせて両手を広げた。
「しかし、見ろって、この広い空。だれもいやしねえ——ったく、丁重に歓迎してくれんのは敵ばっかりってな。もういいや。はやくモモを届けに行こうぜ」
《すねるな、Jr.》と、ガイナンからの念話。
《ヘルマー代表から正式な歓迎のメッセージを受け取っている。モモに対する、な。こっちもそろそろそっちへ降り立つ時間だ。市庁舎で落ち合おう》

【第三章】Yに至る鍵

I

抜けるような青空に微(かす)かな不穏があった。シオン・ウヅキはヴェクター・インダストリー支社ビルの手前で、足を止めて振り返った。遠くビルとビルの隙間から煙が空にむかって立ちのぼっていた。
「なんですかね、あれは——」
アレンがあくび混じりにいった。時差ぼけがまだ抜けていない。
「わからないけど、いいものではないわ。たぶん」
シオンは漠然とした不安を押し殺しながらいった。
エントランスを抜けて、受付の無人カウンターに到着を告げる。
人気のない冷え冷えとした空間に他の外来の姿はなかった。パーティションに仕切られた談話スペースでは数人の職員たちが歓談を交わしていた。窓辺に色鮮やかなプランターが見えた。

ＫＯＳ-ＭＯＳは黙ってそんな光景を見つめていた。

少し蒸し暑く、シオンは制服を摘んで風を送った。

これで、もうしばらくＫＯＳ-ＭＯＳとは会えなくなる。シオンは何かいおうとしたが、今は何も思いつかなかった。

いろいろと考えすぎて、しかもどれひとつとして結論が出ず、今やすべての仮説が棚上げになっているような状態だ。なんにせよ、こんな中途半端な状態でＫＯＳ-ＭＯＳを引き渡さなくてはならないことは開発者として依然気が重い。

ヴォークリンデでの事件の直前にもメインフレームに政府や社の要請を受けて用途不明のポートを多数増設している。出入力が複雑化するほどにＫＯＳ-ＭＯＳの挙動はますます予測不可能なものになってきた。

これまでＫＯＳ-ＭＯＳは自動的に起動し、自律的に行動してきた。まるで自分の意志があるように、宇宙の彼方からこの第二ミルチアまで勝手に帰ってきたのである。シオンはその手助けをしたにすぎない。

以前は意識的に忘れようとしていたが、最近よくケビン・ウィニコットのことを思い出す。とても身近で、あまりに遠かった存在。

気がつくと、ケビン先輩が、まるで自分の中に入り込んだように、穏やかな浮遊感をもってＫＯＳ-ＭＯＳを眺めているときがある。目の前にいるのが、戦闘アンドロイドではなく、どこか生きた魂を有する存在と錯覚して——。

「あ、来ましたよ。あの人たちだ」
アレンは咳払いをして、髪型を正し、込みあげたあくびを再び嚙み殺した。
ヴェクターの黄色い制服を着た人物が三名、エレベーターホールのほうから歩いてくる。先頭は、若い人間の多いヴェクターでは最年長クラスの中年男性、エルザからの通信で数回やりとりを交わしたことを思い出す。
開発二局の主幹技官、今回KOS-MOSを受け渡すことになる人物だ。
技官は事務的な笑顔を浮かべて、手を差し出した。握手を交わすあいだ、技官はKOS-MOSを値ぶみするように見つめていた。映像で対話しているときには気がつかなかったが、近くで見ると年のわりには脂気の抜けた枯れた感じのする人物だった。
シオンは愛娘（まなむすめ）を教師にでも託すような錯覚に陥って、自分の精神退行に舌打ちしたくなった。仕事は仕事、感傷と切り離さなくてはならない。
「どうも、おつかれさまでした。ウヅキ主任」
シオンはできるだけ表情をつくろって、技官に挨拶を返した。
「ご心配をおかけしました。申し訳ありません。もっとはやくに到着できる予定だったんですが」
「いやまあ、詳細は知りませんが大航海だったようですね。無事にこうしてKOS-MOSを受け取ることができて、こっちは一安心といったところですか」
エレベーターホールにむかいながら技官はまたちらりとKOS-MOSに視線を送る。

「送られてきた簡易データのチェックをさせましてね。チーム一同仰天しました。KOS-MOSの性能は想像を超えてすばらしい」

エレベーターを使ってフロアを移動すると、シオンたちは今度はさらに奥の研究棟に案内された。

開発研究室は広々としているうえに整然として清潔感がある。

Uの字形に並んだ端末機の前のモニターにはひとめでKOS-MOSのものとわかる多様な図面が映されていた。

つきっきりでKOS-MOS情操部に関わってきたシオンは、ともすればKOS-MOSが対グノーシス兵器として開発されたという事実を忘れがちだった。二局によるオプション兵装は、シオンのあいまいな知識の数十倍は進んでいるようだった。

苦い驚嘆で研究室を見わたすシオンに対して、技官は少し得意げに鼻をふくらませた。

「おかげさまでプロジェクトゾハルについての一定の成果をお見せできそうです」

「プロジェクトゾハル？」

聞いたことのない名前だった。シオンはアレンと顔を見あわせて首を傾げた。KOS-MOS開発計画の全貌はシステムの開発を行う一局の人間にとっても不明な点が多い。

「加速度的にその広がりを見せるグノーシス現象。最新の研究のなかには最悪、数年で全人類が滅ぶという予測もあるぐらいです。百二十以上の太陽系圏がすでに消滅している。公になっていないだけで、その実体はじつに逼迫している」

そこまで話して技官はモニターに映った多様なKOS-MOSの武装を右手で示した。
「武装オプションもこのように充実してきています。我々の開発しているKOS-MOSのオプション装備によってKOS-MOSは単体でゾハルコントロールシステムに一定の干渉を及ぼすことができる。第三種兵装と我々は呼んでいますが」
KOS-MOSとゾハルの関係がまだ腑に落ちず、シオンは首を傾げた。
「プロジェクトゾハルという名前から想像すると、グノーシスとゾハルの関係性を前提としたプロジェクトですか。おそらく接触小委員会の肝煎りですよね」
技官はうなずく。
「委員会とはプロジェクトに際して密な協力体制を取っています。ゾハルとグノーシスの関連性は以前から指摘されてきました。つまり、エミュレーターを含むゾハルと同様の性質を持つ構造体がグノーシスの大群を呼び寄せる」
シオンはかぶりを振った。
「しかし、グノーシスに襲われて滅亡した百二十の太陽系にすべてゾハルエミュレーターがあったわけではありません。確認されているエミュレーターは十二基に過ぎませんし、ヴォークリンデが回収したエミュレーターも含め、現在はすべてクーカイ・ファウンデーションが保管しています。グノーシスとゾハルの関係は必ずしも絶対条件とは思えませんが」
「もちろん、すべてのグノーシスが機械的にゾハルの力に吸い寄せられているわけでは

ないんでしょう。実際にはもっと複雑な動きをしていると考えられる。しかし、グノーシス現象の根幹にはゾハルがある。これは統計的事実です。おわかりでしょう。ゾハルのある場所には無視できない頻度でグノーシスが出現している」
　技官は少し考え込んでから、部屋の隅にある無骨なシャッターを片手で示した。
「いいでしょう。第三種兵装について、じっさいに見ていただきます。どうぞこちらへ」
　技官はセキュリティパネルを叩く。シャッターが横滑りに開き、中の様子が見えた。
　そこは様々な計器類の並ぶ開発二局の実験施設だった。作業中の技師が数人いて、入って来たシオンやKOS-MOSを物珍しげに見た。
　部屋に入ってすぐに目についた。
　あれがKOS-MOS第三種兵装だろうか。部屋の一壁面の半分以上を占める巨大スクリーンにKOS-MOSのワイヤーフレームが表示され、その両肩に翼状の兵装ユニットの画像が接続されている。
　それを見たシオンの驚きをすなおに受け取って、技官が少しうれしそうにいった。
「プロジェクトゾハルはグノーシスをこの宇宙から一掃する目的で推進されている一大計画です。そのためには、旧ミルチアに今も眠るオリジナルゾハルをサルベージしなければならない。オリジナルゾハルは、半世紀も前から、この次元宇宙最高のエネルギー機関として研究されていたものですから。しかし、そのゾハルの中枢――ゾハルを制御するためのコアユニットは諸刃の剣なんです」

怪訝な顔になったシオンを見て、技官はオペレーターに目配せする。
「まあ、ごらんください」
巨大なスクリーンに赤紫色のヴェールが映し出される。漆黒の宇宙を背景に、微妙な色彩が入り交じる雲の層が、幾重にも折り重なっている。見つめているうちに吸い込まれそうになる。
「ご存知ですか？　十四年前に旧ミルチアからの脱出船が捕らえた映像です。ウ・ドゥと呼ばれる現象です。コアユニットの暴走という初期事象が判明している以外、詳細はまったくの不明。この影響でミルチア宙域は今のような状況になってしまった。ご存知のように二重ブラックホールに阻まれて、近寄ることさえできません。そして何より忘れてならないのが、グノーシスはこのウ・ドゥに呼応する形で発生したということです」
「で、このKOS-MOSオプション兵装が開発されているということは——ま、まさか、再び新たなグノーシスが出現するとでもいうんですか？」
アレンが悲鳴のような声をあげた。
「それは断定できません。しかし、充分にありえる話だと思いますよ」
技官の合図でウ・ドゥの映像は消えて、元どおりのKOS-MOSの翼をあらわす表示に戻る。シオンが第三種兵装を示して訊いた。
「これは両肩のユニット——相転移システムですよね？」

「さすがは一局の華、ウヅキ主任だけのことはありますね」
「ちゃかさないでください」
技官のものいいに少し腹が立った。相転移システムは冗談半分に語るべきトピックではない。相転移とは文字どおり、真空中における物質の相に強制的にゆらぎを与える機構である。空間そのものをひずませることになるので、使いようによっては、全宇宙に影響を与えることになる。
技官は苦笑いを浮かべ、すぐに真顔を取り戻した。
「失礼。これは元型(アーキタイプ)用として開発されていたものですが、我々の手で現在のKOS-MOS用に再調整を施しました。システム半径は百三十ナノメートルになります」
「百三十!?　制御できるんですか。そんな規模のものを」アレンが叫び声をあげる。
「相転移システムのコントロールについては、二局と戦技研が威信を懸けて絶対に成功させてみせますよ。そのためにKOS-MOSをここに移送させたんです」
技官はわずかな不安も感じさせない自信に満ちた表情でいいきった。
しかし、技官の自信に溢(あふ)れた態度が、かえってシオンの不安を呼んだ。シオンはこの翼状の兵装をスクリーン上に見た瞬間にすでに嫌な予感を感じていた。ブラックボックスの解明をよそに危険度の高い兵装ばかりが充実していく。
「おひきわたしできないといったら?」
シオンはできるだけ平静な声でいった。技官はいぶかしげに首を傾げただけだった。

「これは正式な政府の依頼にもとづくプロジェクトです。一ソフトウェア開発主任のあなたに拒む権利はありませんよ」
「でしょうね」シオンは小さく諦めの溜息を吐く。
無駄な抵抗だということはわかっていた。KOS-MOSが目に見えて不都合な挙動を示していない以上、ここは引き下がるほかない。
技官は諭すようにいった。
「KOS-MOS起動の経緯からいろいろご不安なのはわかります。が、なに、大丈夫ですよ。これまでのKOS-MOSの活動記録からも、それが遂行できると本社は考えていますし、それは我々チームの人間も同様です。準備も整えてあります」
「信頼するしかないんですね」
「できるはずです。何より、このシステムを設計したのは、一局にいたケビン・ウィニコットさんですから」
シオンはここでその名前が出てきたことに驚いて、息を呑んだ。彼がいっていたこと、考えていたこと。そうシオンが思い込んでいたことが、一瞬混乱した。
技官はシオンの顔に浮かんだ動揺と困惑には気づかず、またスクリーンに映る第三種兵装に目をやった。希望とプライドに満ちた横顔だった。
シオンはかすかに首を振り、事務的な口調でいった。
「――わかりました。本日一四〇〇をもって、第二開発局にKOS-MOSを移管いた

します。書類はのちほどお送りしますので、必要事項を記入後、一局の私宛にご返送ください。ソフトウェアの引き継ぎは——彼、アレン・リッジリーにやってもらいます。ご不明なことがあれば彼に聞いてください」

技官はアレンの顔に目をやって、小さくうなずく。

開発成果をわざわざ見せてもらった礼をいい、シオンはひとり部屋を出た。KOS-MOSに一瞬目を止め、その脇を通り過ぎた。KOS-MOSはこの別れに際しても、まったく無表情だった。

廊下をひとり歩きながら痛む胸を抑えた。スクリーンで見たいくつかの兵装を思い出した。

たぶん、これが最後ではない。これからもさまざまな武装が彼女に着させられるのだろう。

——ケビン先輩。

KOS-MOSは人々を救うために生まれてきたと彼は語った。

——ぼくは信じてる。いや、信じたいんだ。彼女は破壊のための単なる兵器ではなく、彼女の創り出す未来が、すべての価値観を一掃した破壊も殺戮もない理想の世界であることをね。

甘い理想だろうか——ケビン先輩はKOS-MOSの元型によって殺害された。

それでも信じたい。ケビン・ウィニコットが信じたものを信じることで、少しでも彼

のいた場所、目指した場所に近づけるように願った。
そして、彼があれを造りながら感じた未来を信じたい。彼がKOS-MOSを見つめていたときの一点の曇りもないライトブルーの瞳を思った。彼はKOS-MOSのむこうに何を見ていたのだろうか。
シオンのあとを追って、アレンが部屋を飛び出してくる。
「待ってくださいよ。どうしちゃったんですか。なんかヘンでしたよ。今日の主任」
「別に、いつもと同じよ」感情を抑えて、できるだけそっけなくシオンはいった。
「どこかに行くんですか?」アレンは当惑した目でシオンを見つめた。
「ちょっと街まで、ね。ひさしぶりだから」
「ひさしぶりって、あ、そうか。主任の実家って」
「そ、ここの八区」
片手を振って歩き出したシオンはふと足を止めた。
「ねぇ、アレン君――」
「はい?」
「KOS-MOSから、目を離さないでいて、ね」
きょとんとなったアレンを残して、シオンは廊下を進み、エレベーターホールにむかった。今は彼女から遠ざかるほうへ。
第三種兵装の調整作業が終わったら、またKOS-MOSに関わる仕事に戻れるかも

しれない。とにかく、今はKOS-MOSを信じるしかなかった。KOS-MOSは幾度となく自分の命を救ってくれたのだから、それはそう難しいことではないはずだ。
しかし、思い出した。ヴォークリンデでのグノーシスとの乱戦の最中、自分たちが助かる可能性をわずか数十パーセント増すためだけに、容赦なくバージル中尉を射殺したKOS-MOSの後ろ姿を。
――でも、今はこうするしかないのよね。
ヴォークリンデ以来、心の中につきまとっている少女(ネピリム)の面影に呼びかけたが、今は彼女は心のどこにも存在しなかった。

2

シオンは長いエスカレーターに乗り、街並みを見下ろした。
ひさしぶりの街並みはすっかり様変わりしていた。
目に見えて高層建築が増えたし、ビルの壁面や空中に投影されている色とりどりの広告動画のせいでとても華やかに見えた。
平日の昼間だったが、人通りは多く、雑踏には活気が満ちていた。このセクターには一般車輛の乗り入れが禁止されているため、道には通行人の姿しかない。
三十分以上、シオンは特に用も見つけられず漠然と街をぶらついていた。

支社ビルを出たあと、Jr.たちのことを思い出し、コネクションギアで連絡を取ってみたが音信不通。ずっと仕事漬けだったせいか、KOS-MOSを受け渡してしまうと時間の使い方もわからなかった。買い物をする気も起きず、あの兄がいるかと思うと実家に帰る気もしない。

ならば本社宛の報告書類でも作ればいいのだが、そうするとKOS-MOSに付き合ってきた年月がほんとうに一段落ついてしまいそうな気がして気力が萎える。

さしあたっては今晩どこに泊まるかだった。

自宅は論外。初日から会社に寝泊まりというのも気が引けた。

宇宙港のある海浜地区に行けば旅行客むけの良いホテルもたくさんあるから、いざとなればそこに行けばいい。内心でJr.らファウンデーション絡みの施設に泊まれることを期待していたのだが、連絡が取れないのでは仕方がない。

モモちゃんに会いに行くのもいいけど、今は解析作業の準備で何かと立て込んでいるだろうから、仕事を取りあげられて、街をあてどもなく漂流する女ひとりいても邪魔なだけだろう。

そんなことを考えながら広告を冷やかし歩いているうちに、だんだんお腹が空いてきた。そういえば朝から何も食べていない。

食べ物屋の看板を探しはじめて数分後、一枚の看板に目を止めて、シオンは首を傾げた。

看板の中心に白クジラをあしらったキャラクターが歯をむきだしており、その周囲を囲んで円環状に〈ＭＯＢＹＤＩＣＫ・ＣＡＦＥ〉とある。
「モビィディック——これってもしかして」
扉のタッチパネルに触ると、扉はスライドし、頭上でカランとベルの音が鳴った。すると目の前に別世界が広がる。
店内は木製の帆船をイメージしてレイアウトされていた。板を打ちつけて作った床はさながら古船の甲板で、店内の支柱は帆柱のように投網（とあみ）や綱が飾りとしてぶら下げられている。右手に小さなプールがあり、耳を澄ますとスピーカーから静かなピアノの曲に混じって波の音まで流れていた。
小さな階段を昇って見ると左手奥に小ぶりのカウンターがあり、その上には大きなクジラの模型が吊り下げられている。
カウンターの中には店主とおぼしき男がひとりでグラスを磨いていた。人の良さげな毒のない顔に立派な口ひげをたたえて、せいぜい迫力のないこわもてを演出している。
「やっぱりそうだ。マスター！」
シオンはカウンターに歩み寄った。
「え、へへ、ども」片手を顔の横にあげて挨拶する。
マスターはしばらくぼんやりとシオンの顔を見つめていたが、その顔がふっと晴れ、懐かしそうに目を細めた。

「誰かと思ったらシオンちゃんじゃないか。見ないうちにずいぶん女っぽくなったねえ。ハイスクール以来？」
「――ですね。ごぶさたしてました。こっちに引っ越されたんですか？」
「再開発の波には勝てなくてね。ま、でもせめて店の中くらいはと思って、内装はそのままに」
シオンはぐるりを見わたして、満足げにうなずく。
「うん、モビィディックはやっぱりこうでなくっちゃ」
マスターはカウンターを示して、グラスを置いた。
「まあ、掛けて。いつものでいい？」
シオンはカウンターの丸椅子に腰を下ろし、そもそも店を探していた動機を思い出した。空腹だったのだ。
「――じつはお腹空いちゃって。そっちもお願いします」
マスターは口ひげの奥でにやりと笑ってうなずいた。
「はいよ。了解――ところで今日はどうしたの。休暇かな？」
シオンは首を振った。両手を組み思いっきり体を伸ばして、頭上のクジラを見あげた。ぎしぎしと軋む椅子に、壁のスピーカーからの波音がかぶさる。
「仕事。こっちに用事があって。支社ビルの二局。もうほとんど済んだけどね」
仕事がないとすることが思いつかないなんて、情けない悩みはとても人には聞かせら

れない。
「ふーん、えっと、たしかヴェクターだったよね。ジンさんから聞いてるよ」
シオンは予想していなかった名前を耳にして思わず首をすくめた。居心地の良かったはずの店内がふいに不吉な色を帯びはじめた。シオンはおそるおそる訊いた。
「ここ、兄さん、来るんですか？」
「うん、ちょくちょく。なに？　まだ会ってないの？　せっかく帰ってきたんだ。顔ぐらい出したほうがいいんじゃないの？」呆(あき)れ顔でマスターは両の眉をあげた。
そのとき、入り口でカランとベルの音が鳴り響いた。マスターが顔をあげた。
「お、噂をすれば――」
シオンは席から転がり落ちそうになった。
入り口から声が聞こえた。
「おーっ、見ろよ、ケイオス。内装バッチリ。ピークオドの雰囲気出てるじゃん」
声の主は、ぎしぎしと階段を踏みしめ、昇ってくる。
「こういう店ってさ、たぶん、マスターがこんなふうに口ひげ生やしててさ、客には自分のこと船長(キャプテン)って呼ばせるんだよな」
階段からひょっこりと赤い髪が突き出した。
「な、いったとおり――」Jr.はマスターを指していった。「あ――いた」
「シオン？」と続いて入ってきたケイオスが目を丸くする。

カウンターの中から驚いたマスターがシオンを見下ろしていた。シオンはカウンター席から転がり落ちそうになり、なんとかそこにしがみついているような状態だった。
「なにしてんの、シオンちゃん?」
シオンはあわててカウンターを突き放し、席から立ちあがり、手を振りまわして、あたふたとふたりを迎えた。「アハ、イヤ、どうしたの、ふたりそろって」
Jr.とケイオスは顔を見あわせた。
「いや、腹減ったな、と」「で、たまたまここに入ったわけだけど」
「何? お知り合い?」とマスター。
「えぇ、まぁ——」シオンはキョロキョロ首を動かしながら席に座った。
「まぁってのは、ちょっとひどいんじゃない?」ケイオスが少しからかう調子でいった。
「あ、ごめん。ちょっとね。動揺してたから」
といいながら、あいかわらず動揺を隠せずにシオンがいった。
「動揺って——何?」ケイオスが首を傾げる。
「まあ家庭の事情ってやつ、かな」マスターが苦笑していった。
シオンは乾いた笑いを放った。
Jr.とケイオスの表情は困惑でいっぱいになる。
「シオン、コネクションギアで何度かおれたちに連絡取ろうとしてたろ? もしかしたらこの辺にくりゃシオンに会えるかなって思ったんだよ。しかし、すげえ偶然だよな」

Jr.のことばを聞いているのかいないのか、シオンはわざとらしい笑顔を貼りつけたまま何度も首肯した。Jr.は少し呆れた顔で肩をすくめた。
「ま、どうでもいいや。船長、腹減ってるんだけど、なんかオススメ料理ってあんの？」
マスターは愛想良くうなずいて店の奥を指した。
「すぐにお持ちしますよ。ねえ、シオンちゃん、横並びもなんだから、そっちのテーブル使いなよ。ちょうどほかにお客さんいないし、ゆっくり話でもしたら」
マスターの提案を受け入れて、三人は奥のテーブルに移動した。Jr.はハイウェイでの襲撃ですっかりボロになったという黒いコートの代わりに渋いエンジ色のコートに着替えていた。
三人はこれまでの経緯を交換した。
Jr.たちからハイウェイでA.M.W.S.に襲撃された件を聞いてシオンは仰天した。
Jr.は、その後もう少しで市警（ガード）連中にとっつかまりそうになった、と笑った。
「せっかくひさしぶりでこっちに降りたのに、事情聴取ばっかかじゃつまんねえもんな。ジギーのおっさんを置いて逃げてきた」
シオンは、そんな命懸けの事件の後に悠々と街に繰り出すJr.の無類のずぶとさに半ば呆れ、半ば感心したが、当のJr.は、モビィディックのオススメ料理、湯気たてる絶品カレーを食べて、「うんまいっ！」と上機嫌だった。
皿に顔を突っ込むような勢いで食べ続ける彼を見ながら、シオンのほうはいざこうし

て前にしてみると食欲が消え失せてしまった。
シオンは自分の見通しの甘さ加減を思い知らされた気がしていた。
KOS-MOSのことでいろいろ悩みはあったが、第二ミルチアに到着すれば事態は自然に穏やかに推移するものだと思い込んでいた。
ところが、こんな街中にまでU-TIC機関のものとおぼしき戦闘兵器があらわれたのだ。そして、KOS-MOSに搭載される対ウ・ドゥ相転移システム。
旧ミルチアと第二ミルチアをめぐる宇宙史はしだいにゾハルから伸びる巨大な影に呑み込まれつつあるように思える。
Jr.の説明では、モモの解析作業については、準備の関係で、明日からということになるとのこと。解析作業に付き添いたいという希望も依然としてあった。モモの深層に隠されているというY資料への興味も高まっている。
ファウンデーションの人脈(コネクション)を使えば、Y資料解析作業に立ち会うのも可能かもしれないが、今はそれは諦めていた。ヴェクター本社からの帰還要請があるまでの猶予期間、できるだけ長いあいだKOS-MOSの傍についていたい。
食事を終えたJr.は、この店がハイスクール時代のシオンの行きつけだったと聞き及んで、カウンターのマスターとその話題で盛りあがっていた。
あまり社交的な学生ではなかったな――シオンは当時のことを思い出す。当時の友人の名前はほとんどおぼえていなかった。

あの頃はU.M.N.のデータベースを使って、レアリエンの研究者になるための基礎学問の蓄積に夢中になっていた。夢中の振りをしていた。
その甲斐もあって、多少は建設的といえるような思考ができる人間になった。自分のおかれた環境に適応し、大人になっていくこと――その奇妙な、退化ともいえるような変化を果たした。いつのまにか、ふだんは明るく笑えるようになった。
しかし、すべては過去を覆い隠すために掻き集めたむなしい煙幕だったのだろうか。ネピリムやフェブに出会ったことで、過去を忘れようともがいていた感情の表皮が剥がれ落ちた。今にも露出しようとする過去の痛みにはまだ立ち向かえそうもなかった。
あの幻の少女たちとの邂逅(かいこう)は、シオンにとって、いつのまにか行動のベクトルを定めるための重要な羅針盤になっていた。
ネピリムやフェブロニア――あの不可思議な虚数存在たちは、これまで踏み越えてきた多くの死者たちの仮象(エイリアス)となり、彼女を導いてきた。
とりわけ、ケビン・ウィニコットの死以来、シオンは生きた人間よりも死んだ人間に突き動かされて歩んできたと自覚している。
無数の死者たち――例えばKOS-MOSの手で殺害されたケビン先輩やバージル中尉、グノーシス化して死んでいったアンドリュー中佐たち――が、心にまとわりつき、シオンの世界を取りまいている気がしていた。
それは不快ではなく、むしろ生きた人間に苛立ちを覚えることのほうが多い。ミルチ

ア紛争以来、自分は半分死んだ世界を生きてきたのかもしれない。
ドアベルの鳴る音が聞こえた。
「お、いらっしゃい」
マスターの愛想のいい声を聞いて、シオンはふと我に返った。
ひとりの男が階段を軋ませてあがってきた。黒い長髪をうしろで束ねて、墨染めの着流しを颯爽と着こなした異装の美丈夫だった。
シオンは、慌ただしく席を立って右往左往したが、白鯨退治の船には逃げ場所も隠れ場所もなかった。
「マスター、いつものやつをお願いします――激辛で」
そういってから、男――ジン・ウヅキはシオンたちのテーブルに目を止めた。

3

ウヅキ家、畳敷きの奥座敷――庭から鹿威しの小さな音が聞こえる。
開け放たれた障子のむこうから午後の光が射していた。
シオン、Jr.、ケイオス、ジンの四人で長方形の卓袱台を挟み、シオンの近況報告が続いている。
モビィディックのマスターの口から兄の名前が出たとき、こうなるんじゃないかとい

う予感はしていた。もちろん、嫌な予感ほど確実に当たるものだ。
モビィディックで鉢合わせた彼らは、けっきょく、第二ミルチア郊外八区にあるウヅキ家でこれまでの経過を話すことになった。
シオンは面倒を避けるため、できるだけ危険な部分ははしょって語った。しかし、それでもシオンの話を聞いていくうちにジンの表情はみるみる曇っていった。
シオンがひととおり語り終えて口を閉ざすと、ジンもしばらく沈黙し、Jr.とケイオスをちらりと見た。また鹿威しが鳴った。
兄はシオンの話しぶりからその内心を悟ったのか、ふだんは涼やかな目元に若干の険をたたえていた。
「――で、彼らの手伝いをしたい、と？」
シオンはうなずいた。話しているうちにもその決心は固まっていた。
「仕事のほうも一段落ついたってところだし、ファウンデーションに協力して、ミルチア調査の手助けをできればって思って。ヴェクターにいることでしかできない協力もあるでしょう？」
この決意の背景には、Jr.たちファウンデーションへの感情移入もむろんあったが、より具体的な打算もあった。
ＫＯＳ-ＭＯＳの引継期間が終われば、おそらく、本社命令でしばらく〈曙光〉詰めになる。隔離された研究室で、なし崩し的にＫＯＳ-ＭＯＳから引き離されてしまう。

クーカイ・ファウンデーションと自治州政府に協力していれば、入ってくる情報の精度がだんぜん違う。

遠巻きでもいいから、ＫＯＳ-ＭＯＳやグノーシス、ウ・ドゥなどをめぐる全星団的な動きを少しでも監視できる位置に自分を置いておきたかった。

ジンは渋い顔で首をひねった。

「そいつは感心できないなぁ。聞けば、彼らはその道についてはプロのようじゃないですか。素人が首を突っ込むことじゃない」

「素人って――」シオンはことばに詰まって、Jr.とケイオスの顔を見た。

「わたしだってけっこう役に立ってたんだから。ねえ？」

ふたりは兄妹の視線に挟まれて居心地悪げに座布団の上で身じろぎしただけで何も答えられなかった。

この期に及んで分別くさい兄の態度に、シオンは苛立ち（いらだち）をつのらせた。

兄さんよりも自分のほうがよほどしっかりしていると思う。

さっきも、ひさしぶりに帰った実家の玄関先で、ジンが新しくはじめたとかいう商売のことで口論を繰り広げたばかりだ。

医者になる、と数カ月前にその兄の口から聞いたばかりだったのだ。ところが、ジンは家を改造し、祖父の遺物などから掻き集めた古本を売る蒐集家（しゅうしゅうか）相手の古書肆（こしょし）をはじめていた。ジンはこれまでも半年以上同じ職業を続けられたためしがない。

そんな人物にどうして説教を受けなくちゃならないんだろう。自分なりに考えて導き出した決心なのだから、いい加減な思いつきや印象で、ころころと反対されたくない。

要するに兄さんは演じている。

飄然(ひょうぜん)としているのは見せかけだけ。不器用に、必死に親の役割を演じようとしている。

シオンはむっつりと押し黙って、卓袱台を眺めた。

気に入らない。どうしてそんな演技につきあわなくちゃいけないのか。

木製の表面を照らす日光はしだいに夕刻の色に変わりつつあった。

ジンは眉間を指で挟み、溜息をもらした。

「ま、とにかく今日はゆっくり休んで。明日にでも父さんと母さんの墓参りに――」

「ちょっと待ってよ！」

シオンはさえぎった。頭に血が昇っていた。腰を浮かして怒鳴った。

「どさくさで蒸し返さないで。またその話？　わたしは行かないって前から何度もいってるでしょ。いやよ。絶対、行きたくない！」

シオンの語気の荒さに気圧(けお)されてジンは声を落とした。

「おまえはそういうけど、やはり子の務めとして、両親の墓前に花のひとつも供えてあげないと――」

シオンは激しく首を振って、立ちあがった。記憶の蓋が今にも開こうとしてもがいて

いた。今でも堪えられない、とうてい受け入れることのできない恐怖と悲しみがふとこみあげて、シオンは涙ぐんだ。
「やめてよ！　それに何が墓前よ。あのお墓の下には父さんも母さんもいないじゃないの！　ふたりがどこにいるのか、兄さんだって知ってるでしょ。そうよ！　あのとき、あそこにいたのはわたしと兄さんだけだった」
秘かに溜めこんできた恨みごとがシオンの口をついて出ていた。
「あのとき、兄さんがもう少し早く来てくれれば、父さんも、母さんも――」
シオンは口を閉ざした。ジンの頬が動揺を露して小刻みに震えていた。
ジンは奥歯を嚙みしめて、痛みをこらえるように顔を伏せた。
シオンは思わず口元を手で押えた。かすれた声でいった。
「ご、ごめん。そんなつもりじゃ――わたし――」
シオンはジンの顔から視線を引き剝がした。泳いだ視線の先で、Jr.とケイオスと目があった。彼らはシオンをとがめるわけでもなく、ただ戸惑ってシオンとジンを交互に見つめた。
シオンは卓袱台の傍を逃れて、夕刻の光が穏やかに遊ぶ縁台へと駆けた。
ウヅキ家の門を夕陽は飴(あめ)色に染めていた。塀の下にわだかまる黒い影。手入れの粗いこんもりとした草むらが微風に揺れている。
シオンは胸を刺す苦痛と後悔をこらえて茜(あかね)色の空を見あげた。

「でも、やっぱりお墓には行きたくない」いい捨ててシオンはその場を去った。
足は自然に家のいちばん奥にある自分の部屋にむいた。
戸を開けて中に入り、後ろ手に閉じた。
殺風景な部屋を見て胸が詰まった。
学生時代、必死で勉強した机の上には今は何も置かれていない。亡き両親の写真のひとつもなく、机の端に小さなウサギの人形がぽつんと置かれていた。
数年前、もう二度とここで暮らすことはないと決意して、身辺の荷物をすべて運び出した、そのままの寂しい風景だった。部屋には塵ひとつ落ちていなかった。
マットが剝き出しの寝台に腰掛けて、シオンは深い息を吐いた。予想はしていたが下腹に月経の鈍痛があった。シオンは気だるく寝台に身を投げ出して、両腕で顔を覆った。
ナノマシンで痛みを取り去ることもできるが、完全な無痛文明にはやっぱり抵抗がある。旧ミルチアの重篤者病棟で過ごした母親の最後の日々を思った。
母さんと父さん。わたしが生まれたとき、どんな顔をしたんだろう。どんな希望を思い描いたんだろう。まさか、自分たちの子どもらがこんな故郷の星からはるか離れた場所で暮らすことになるなんて想像もしていなかったはず。
そのふたりの子どもがまさか墓参りなどと些細なことで大ゲンカをするなんて――。
感傷が心の外殻を引っ掻いた。父母の顔を思い出そうとしても頭に浮かばなかった。
代わりに、広大な宇宙に漕ぎ出した人類の数多の両親を思った。狂おしく胸苦しいま

での感情を投げ掛けあって種を蒔いてきた人々。無数の母たちと父たちと子らが暗い宇宙にペルソナをばらまきながら、大渦を為して惑星に散っていく。
シオンは浅い呼吸を繰り返しながら、薄暗い板張りの天井を見あげた。
――シオン。
かすかな声が聞こえた。シオンはハッとなって身を起こし、左右を見まわしたが、いつのまにか薄暗くなった部屋のどこにもネピリムの姿はなかった。
ただ声が聞こえた。
――あなたなら知ってるはずでしょう。ほんとうは頭のどこにも記憶なんて存在しないの。脳のどこかに過去をプールする貯蔵庫があるわけじゃない。
脳は外界認識のためにニューロンで地図を描く。目の前のできごとを反芻することで過去のできごとがたまたまに誘発される、それを人は思い出と呼ぶの。
じつはあらゆる記憶はあなたたちの呼ぶ既視感というもの。
人は時間において孤独な存在よ。だからこそ、記憶を隠すなんて本源的に不可能なの。あらゆる外界認識の運動は脳に刻印された側溝を辿って記憶を再生し続ける。だから、あなたはミルチアの過去を拒絶するのではなく、理解しなくてはならないわ。
シオンは暗がりにむかって激しくかぶりを振った。
「――無理よ。だって旧ミルチアにはもう誰も辿り着けない。二重ブラックホールに閉ざされて、ジャンプに必要なU.M.N.コラムも断ち切られてる。あなたのいい方でい

うなら宇宙の記憶から断絶した場所なのよ」
——世界はまた背中を押されている、穢れた右手と無垢の左手で。絶望しないで、シオン。あなたのむかうその先こそが人が新たな認識と理解を手に入れる場所なのだから。それができなければあなたは永遠にその精神の苦痛を彷徨うことになる。
「わからないわ。もし過去を理解できなかったら、克服できなければ、永遠に苦しむってこと？　わたしは何をすればいいの？」
シオンの焦燥した声は闇に吸い込まれ、その答えは返ってこなかった。

＊

男はひとり縁台に座り、目を瞑り、夜風がなぶるのに身をまかせていた。
夜は深々と響いている。垣根のそばに群生する草木や草むらは涼やかな風に梳かれて、そこから虫たちの鳴く声が聞こえる。
蠟燭の燃える音。飛び交う蛾の羽音。そんな小さな音の集合が耳の奥をくすぐり、凝り固まった心を少しずつ溶かしていく。夜の褥に男を誘う。
ジンは、背後に人の気配を感じて目を開いた。突然の気配に、不思議と驚きはなかった。今宵、ウヅキ家に滞在した人物、珍客といえば珍客だ——十四年の歳月を超えて、そのままの姿で忽然とあらわれた青年。
「こちらでしたか——」

それはひどく静かな声だった。闇が凝ったようにあらわれたケイオスは、羽根が舞い降りるように静かにジンの隣に座った。

ジンは半眼になって闇の奥、夜風に身じろぎする草むらに目をやった。

「いい声でしょう?」

庭から聞こえてくる虫の音に耳を澄ませる。ケイオスは答えなかった。一瞬、この穏やかな青年も虫の音に紛れて消えてしまったのかとジンは錯覚した。

「眠れない夜はここがいちばん落ち着くんですよ」

「シオンさん——ですか」ケイオスがいった。

ジンは口元に苦笑を貼りつけて、目を瞑った。妹の激昂(げっこう)した声がまだ聞こえるような気がした。

「ええ、まぁ。あれとは二年ぶりでしてね。まだまだ子どもだと思っていたんですが、なかなかどうして——フフ、あの性格は祖父ゆずりかな」

ジンは目を開き、縁側の上の小皿に立てられた灯火に目を落とした。赤色の光がジンとケイオスの顔をぼんやりと照らしている。炎のまわりを飛びまわる一匹の蛾。

ジンはケイオスの横顔をうかがった。

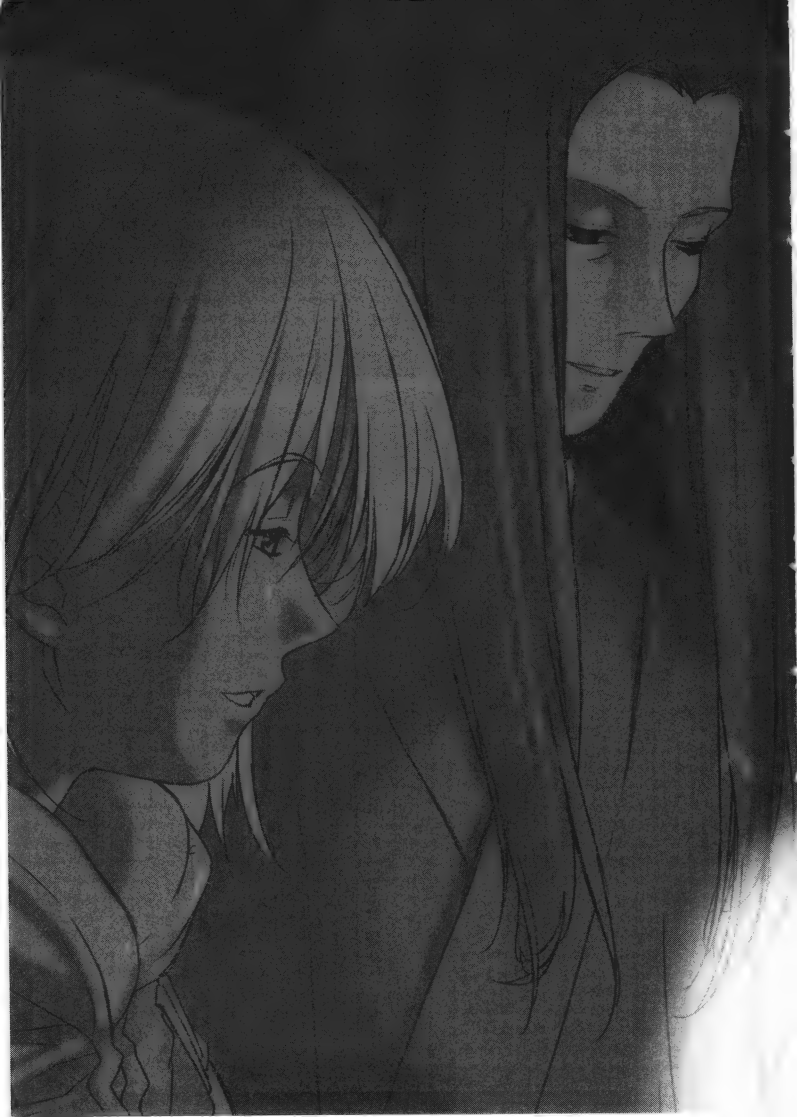
「で、何が聞きたいのですか? 話があるからここにいるのでしょう?」

ケイオスは少し迷って、口を閉ざした。

「あの、ジンさん、もしかしたらまだU-TIC機関のことを——」

ジンは灯火から目を逸らし、空を見あげた。月は雲に隠れている。
「やはり、その件ですか――」ジンは微かな溜息を吐いて、首を振った。
「十四年。長いようでいて、じつは昨日のことだったんだな、あれは。どうもわたしはその呪縛から逃れられない運命のようだ。いや、自ら招いたのか」
灯火に蛾の影が舞う。大きくなり、小さくなり、ふたりの体に模様を描く。
「狩猟採集民としてその歴史をスタートさせた人類は、やがて火を操る術を見出し、その火から刃を手に入れた。未来を模索する意識は時と共に姿を変えていき、そこに灯明を見出したとき、人はその本来の存在を忘れ、奔走する。思えばわたくしたち人類は、燭光に誘われ、舞い寄る羽虫のようなものかもしれません。その先に待っている結末も知らずに――。『廻諍論』をご存知ですか？　詩頌に曰く、灯火のうちに闇はなく、灯火のある場所にも闇はない。照らすとは闇を破ることとならば、その灯火は何を照らしているのだろうか？」
蛾を呑み込みかけた蠟燭の火を、ジンはすばやく指で揉み消した。よりどころを失った蛾は不満げに二、三度と羽ばたいて、やがて闇に紛れて姿を消した。
闇に呑み込まれて、ふたりの男は影だけの姿になる。
「あれが、色々とご迷惑おかけしたようですね。つたない妹ですが、これからもよろしくしてやってください」
「そんな――こちらこそ」

「わたしはあれが最も辛い時期に傍にいてやれなかった。そして、それをひきずって、いまだに近くにいてあげることができない。怖いんだな。きっと。今以上近づいたら、自分は家族として、兄として、認めてもらえないんじゃないか——そんなことを怖がっているんです」
フッとケイオスの気配から緊張が消えた。
「シオンさん、何かにつけてあなたのことを口にするんです。それってあなたのことを大事に想っている、そういうことだと思いますよ」
クス、とジンは笑った。
「で、そのあとにだめな兄貴——って接尾語が付くんでしょう？」
「ま、まあ、たまには」
ジンは笑みを含んだままケイオスのほうを見やった。
「ふふ、しかし不思議ですね。あなたにはなんでも話せそうな、そんな気持ちになる。わたしよりも遥かに老成されているような、何百年も生きているような、そんな雰囲気すら感じます」
「まさか。単にのんびりした性分なだけですよ。だからJr.にはいつもせっつかれています。おまえはとろい、ってね」
ふたつの影は静かに笑いを交わした。
虫の声が途絶えた。雲から出た月の光が垣根を白く浸し、夜は静寂に満たされた。

4

E.S.シメオン（Simeon）のコクピットで、乳白色の髪の男が狂気を湛えた紫の目を見開いた。
十四年前、U.R.T.V.の精神連鎖（リンク）でウ・ドゥに相対したあの日、自分を包み込んだあの感覚――生きながら進化していくような激痛と快楽をおのれのうちに想像しようとし、しかし、今はまだかなわなかった。
スクリーンに映る外は漆黒の宇宙だった。眼下に遠く第二ミルチアの青い球体が浮かんでいた。アルベドはその遥かな青を静かに眺めた。
――古代の人間は真球の神を妄想した。
「神とは是中心（これ）があまねく存在し、周辺はいかなる場所にも存在しない叡智の球体である」だったか。
天空を見あげて千四百年ものあいだ、人類はプトレマイオスの想像力に囚（とら）われ続けた。天空を愛し、宇宙を憎んだ。しかし、今もなお人類は同様の過誤を犯している。宇宙はこの宇宙のみで閉じていると思い込んでいるのだ。
絶対の超越者たる希求の念が猛々しく心臓を灼いた。かつてウ・ドゥと混じり合ったとき、想像を超える超感覚が体内に溢れかえった。怯えたルベドがリンクを切ることとさ

えなければ、惑乱の彼方、その最果てに辿り着けるはずだった。代わりに残されたのは寸断し、断裂したこの精神だけ。

しかし、今さらルベドを責める気持ちはない。

臆病とはむしろ力なのだ。逃走は草原のガゼルの発揮する暴力だ。

かつてのおれを見ろ。あるいはあの臆病極まりないディミトリ・ユーリエフを。そして、兄弟の力とは祝福してやるべき事柄だ。

ウ・ドゥと結びつくことさえできれば、たかだか十四年の歳月などわざわざ数えることもない瞬間の歳月となるだろう。そのときはすぐ間近まで迫っている。

その場所に辿り着くことさえできれば、おそらく、あらゆる人類は各々（おのおの）の時間という孤独の檻（おり）から解放され、そもそも個々の生命である必要さえなくなる。それはすでに人と呼びうる存在ではないかもしれないが、優先するのはおのれの快楽、その他のことはすべてついでの些事だ。

ペレグリーが勢い勇ましくE.S.イサカルに乗り込んだあげく、アニマの器の共鳴現象で、モモ（ペシェ）の奪取に失敗したと聞いたときにはアルベドはひとり大いに失笑した。

U-TIC機関というのはあいかわらず無駄な行動の多い連中の集まりだ。甲斐甲斐しく計画（プラン）を積み重ねることが真理に辿り着く唯一の道だと生真面目に思い込んでいる。

マーグリスやペレグリー、あのしかつめつらの連中に掴めるものなどなにひとつなかろう。

アルベドはシートに深々と身を沈め、頰に歪んだ笑みを刻む。
ペシェはすでに細緻(さいち)な罠(わな)に搦(から)め捕られた。先に〈ネピリムの歌声〉の塔内に拉致し、あのレアリエンの精神を蹂躙(じゅうりん)した際に、すべての予定を自らの手で決めた。あとは待つだけでいい。Y資料の本体にこそ到達できなかったが痕跡は見つけた。
きっとルベドが役に立ってくれる。
上機嫌で、その瞬間の光景を頭に思い描いた。
それは星雲のような、太古の神々が集う宮殿のような光と闇の饗宴。ペシェの体をタブローにして光輝と闇が紡ぎ出す宇宙の縮図だ。そしてヨアキムのオーケストラにおれの不協和音が乗り、盛大にごちゃまぜの悲鳴を掻き混ぜる。
その光景を直接目撃できないのは残念だった。せめてこうして想像することで、自瀆(じとく)の悦(よろこ)びとしようか。アルベドは顔に笑みを貼りつけたまま込みあげた情欲のたぎりにシートの上でかすかに身をのけぞらせた。
欲情に沸騰した神経を奇妙な感触が這いまわるのを感じてアルベドは眉をひそめた。
馴染みの感覚――ある人物の顔を思い出し、急におかしさがこみあげて、アルベドは声をあげて笑った。漆黒の宇宙を渡り来りて、ここに漆黒(ニグレド)のご登場というわけか。アルベドは上機嫌で懐かしい念話の波動を脳内に導き入れた。
《ようこそ我が頭蓋骨へ。ミルチア太陽圏一の大富豪を招くには少し散らかっているかな、ガイナン・クーカイ殿》

《やあ、あいかわらず無駄に元気そうじゃないか》
ニグレドの皮肉混じりの声が頭に響きわたった。アルベドは顔をしかめて笑う。
《いったいどうした、相手にされず寂しくなってきたのか？》
《なに、ちょっとした情報収集だ。これでこっちもいろいろ忙しい。おまえにいろいろ動き回られると予定が乱れる。もちろん、和平交渉に応じる余地は残してある》
こちらの様子がニグレド側に筒抜けになるのと同じく、アルベドにもニグレドの様子をおおむね察することができた。
ニグレドは堅苦しいツイードジャケットを着込み、端正な飾り気のない壁に寄りかかっている。場所はおそらく自治政府の市庁舎ビル。Y資料の保護のために探査役でも買って出たというところだろうか。
アルベドはニグレドに嘲笑を返した。
《和平交渉ときたか。フハハハハ、おまえの袖に短刀が光ってるぜ。本性を見せろよ、処刑人》
ニグレドの思念が一瞬何かに躊躇したように途絶えた。
《その役割はとうに捨てた》ニグレドの思念が低いトーンに変化する。
アルベドは同情と皮肉を双眸(そうぼう)に湛えた。
《どうかな？　ルベドの傍にはりついて職務遂行の機会をうかがっているんじゃないのか？　持って生まれた役回りからはなかなか抜け出せないもんだ。キヒヒ、死神の頭巾

でもかぶって緞帳にしがみつけ。舞台の端で息を潜めてろよ。そのうち出番があるかもな。ルベドは今はおれが借りる。せいぜい期待してるよ。おまえの活躍を》
ニグレドの思念にどす黒い淀みがあった。殺意でも憎悪でもない。冷酷な機能としての破壊衝動。
アルベドは念話を強制的に遮断しようとしたが、ふと好奇心が湧いて逆に防護を緩めた。頭に流れ込むニグレドの意識の波動がいちだんと色を濃くする。
《待て――》ニグレドがいった。
ニグレドの攻撃イメージの奔流が脳を伝ってアルベドの体内に流れ込んだ。右腕の筋肉と血管が膨れあがり、右腕が瞬間的に倍の太さに膨らんだ。右腕が爆散し、鮮血が飛び散った。
E.S.シメオンのコクピットにアルベドの楽しげな絶叫が響きわたる。叫び声にはしだいに笑い声が混じり、高らかな狂笑に変わった。アルベドの目が丸く見開かれ、星を映して明るく輝いた。
《怖い怖い。おまえは昔からそういう奴だよな。穏やかな顔して死の牙を研いでいる》
ぱっくりと赤いきれいな傷口から、消失した右腕が唐突にあらわれた。アルベドは新しい手を握りしめて満足げに笑った。
《どうした。遠慮せずにもっと来いよ。藁を持たぬ我が手をおまえの捻れた迷宮に永遠に捧げてやろう。おまえが永久に迷い続けるようにな》

アルベドは半眼になって続く衝撃を待ったが、ニグレドの思念はすでに戸惑いに濁っていた。ニグレドが茫然といった。

《やはり――どうあってもウ・ドゥと連結(リンク)するつもりか？》

アルベドはもう応えず、退屈のあくびで涙ぐんだ。餞別(せんべつ)代わりにパターン思考の映像群を送り込んだ。ニグレドの嫌いそうなイメージをたっぷりと織り交ぜてやった。

ルベドにリンクを切られ、苦しみもだえるU.R.T.V.標準体たちの姿。発狂し、殺しあう標準体たち。壁に背を擦り寄せ、やかましく喚(わめ)き続けるルベド――。

ニグレドの暗示能力の大半は言語使用に依存している。哀れなニグレドは画像の煙幕に取りまかれて難渋するだろう。

しかし、次の瞬間にはすでにアルベドはニグレドのことなどきれいに忘れ果てていた。もてあそんだ画像が暴走し、頭の中の漆黒(ニグレド)をカラフルな奔流に呑み込んで押し流した。思考は次々と浮かぶ端から泡のように弾けて消えた。アルベドはけたたましい笑いをコクピット内にまき散らした。

アルベドは呼びかけた――モモ(ペシェ)ではなく、その奥にある核へむかって。

――輝ける仮象(ダス・シャイネン)、輝けること(シャイネン)のみを望む誘惑者。ゆえに吾(わ)が追跡を招き、おまえは真理の祭壇へ身を隠す。輝ける仮象、無垢なる天使、ゆえに美しき心(エロス)が追うだろう。紅いイメージを滴らせて、追跡者ではなく、おまえを愛する者として。だが、おまえの輝きはどちらの目も潰してしまう。キヒ、ヒヒヒ、ヒヒヒ。

アルベドは両手の親指を自分の眼窩（がんか）に突っ込み、眼球を掻き回した。指の下に再生した新たな眼球が恍惚に震えて第二ミルチアの青い輝きを映した。
——さあ。おまえたちは家鴨（アヒル）ではない。人間だ。Yに至るための鍵を求め、直進しろ。

5

——ミルチア標準時八〇五。第二ミルチア上空
シャトルは高速で滑空し、U.M.N.管理局を目指していた。
雲に覆われた太陽の光は、遠くU.M.N.管理局の尖塔を灰白色に照らしていた。
上空五百メートル——ユリ・ミズラヒはシャトルの窓から第二ミルチア市を見下ろした。
都市が朝をむかえる。昔からこの時間帯は好きだった。無形のまどろみが秩序にむかって少しずつ動き出し、夜に凍ったにぎわいが溶けて街に色どりを加えていく。
操縦席でパイロットがシャトルのエンジン音にも負けぬ大声で叫んだ。
「おつかれさまでした。あと二十分ほどで、到着ですよ！」
ユリ・ミズラヒは自分のために小さくうなずいた。
本日一三〇〇（ひとさんまるまる）——いよいよヨアキムの残した遺産、Y資料の解析作業がはじまる。
隣席で半睡状態の若い書記官がうす眼を開けた。

「あれ、到着ですか？」
「まだよ。あと二十分。眠いならもう少し眠ったら？　着いたら忙しいわよ」
「ミズラヒ博士こそ目の下が凄いことになってますよ。少しでも休まれたらどうです」
書記官の心配ももっともだった。昨晩はほとんど寝ていない。眠れなかった。
ユリは膝の上で揺れるPCのホログラフィックモニターを凝視した。百式プロトタイプの疑似神経図が投影されている。ちかちかと瞬きを湛え、ただのシミュレーションデータがまるで生きているようだ。
あの呪わしいミルチア紛争から十四年。人がもっとも畏怖し、もっとも渇望してきたY資料の前にわたしは立つ。
ふだんは二千人を超える小委員会を代表する七人の専門委員のひとりとして、重責を担うユリだったが今日は少し勝手が違っていた。
夫だったヨアキム、憎悪の対象だったヨアキム。おそらく一瞬でさえ理解できたことのないあの男の遺産の解明に立ち会う。研究者としての義務感と肉親としての畏怖で、こうしてじっとしていると体が震えそうになった。
小柄なユリはひざの上で小さな手を握り、懸命にそれをこらえていた。個人的な動機に必要以上に捕らわれてはならない。危険な勢力からY資料を守り、彼らより一歩でも先に解析を終えることは、星団じゅうの数多の人間の安全を保証することになる。そのためにはメンタル面での緊張の維持は最優先ともいえる事項だった。

しかし、考えまいとすればするほど古い家族の肖像が頭に浮かんでくる。ミルチア紛争の元凶であるヨアキム・ミズラヒの妻として蔑(さげす)まれ、疑われて、紛争後の世界を仕事に没頭して生きてきた。憎んであまりあるヨアキムの顔は、記憶の中でなぜか穏やかな微笑(ほほえ)みを浮かべていた。

原因は一枚の画像データだった。

ヨアキムの写真でただ一枚残されたそれは、生まれたときからずっと意識がない娘を挟んだ夫婦の画像だった。

かたや悪名高いU-TIC機関の総責任者の男。かたや生体兵器U.R.T.V.の開発者である女。こんなありふれた家族愛の風景が最も似つかわしくない呪われた科学者の夫婦が、この映像の中でだけは、なぜかとても幸せそうに見えた。

ミルチア紛争から五年後のある日、委員会の政治圧力から極度の疲労に取り憑かれた彼女は画像の中のヨアキムの顔と自分の顔を削り取った。黒い顔のふたりのまんなかでは、白い服を着た八歳くらいのサクラがぼんやりとカメラに視線を向けていた。

しかし、データとしては永遠に消え失せたはずのヨアキムの顔が、なぜかユリの心に強い印象を残した。消えずにいつまでも心の中に残った。それはこの小さな家族が決して辿ることのできなかった希望への憧憬の象徴になってしまった。

Y資料の解析にあたって、この写真の一件が心に蘇(よみがえ)り、ユリの心の半分は悲鳴をあげて逃げ出したがった。誰かにこの責務を押しつけてしまおうと何度も決意した。

しかし、その一方で、残ったもう半分が叫び声を発し続けていた。ヨアキムの残したものを見届けなくてはならない。サクラが死んでいった意味に辿り着かなくてはならない。それが残されたおまえの責務なのだ、と。

ユリはホログラフィックモニターの映像に視線を落とした。

百式プロトタイプは人造生命体――その事実を自分の頭にしっかりといいきかせるため、少女としてのモモの画像はできるだけ避けていた。娘とそっくりの姿でも別のモノ。

書記官は涙目をこすって街を見下ろした。

「なるほど。ハイウェイがあちこち破壊されてます。戦争の跡みたいですね」

ユリもちらと外を見やった。昨日、Y資料を奪取しようとして街を襲撃した連中の残した爪痕(つめあと)だった。まだ襲撃者たちの正体は明らかになっていないが、絶対にY資料を渡すことのできない危険な勢力であることはまちがいなかった。

「第二ミルチアにとっては災厄の日々が続くわね。これで、あくまで強行姿勢を取り続けるヘルマー政権が民衆の支持を失わないんだから奇跡的よ。我々接触小委員会とミルチア政府との連帯を続けていく上で、こちらとしては不幸中の幸いというべきだけど」

「ミルチアの人間っていうのはみんな頑固なんですかね」

書記官はつぶやくようにいった。

「そうかもしれないわ」

ユリは抑揚なくうなずくと、渋滞を起こしたハイウェイから目をそらした。

「これが――M.O.M.O.ですか。すべての百式の祖となった傑作レアリエンでしょう?」
書記官がホロモニターをのぞき込んでいった。
「こんな女の子みたいなモノに、ゾハルの秘密に迫る鍵が隠されているなんて、わたしにはとても信じられませんよ」
「そうね」とユリは簡潔に答えて、PCを閉じた。
前方キャノピー越しに、しだいに近づいてくる管理局ビルが見えた。
なぜかあのサイボーグ、ジグラット・エイトの顔が頭に浮かんだ。
――モモがあなたに会えると喜んでおります。
大丈夫だ、と自分にいい聞かせた。わたしは落ち着いている。

――標準時八三〇。U.M.N.管理局
ポートに着陸し、地表に降り立つ。
風を巻き起こしてシャトルは飛び立っていった。ユリはもつれる髪を押さえながら、灰色の空に消えていくシャトルを見送った。ふだんから人の行き来が激しい上に、今日はハイウェイが寸断されているため、ひっきりなしにシャトルが行き交っている。
「百式プロトタイプと、ファウンデーションの方々も、先ほど到着したばかりだそうです!」
ヘッドセットで中と連絡を取っていた書記官が叫んだ。

「誰が来てるの？」ユリは大声で叫び返した。
書記官はメモをめくって告げる。
「えぇっと以下の方々です。立会人としてガイナン・クーカイ氏、ガイナンJr.氏、ケイオス氏。解析オペレーターとして参加予定のデュランダル・ブリッジクルーのシェリィ氏とメリィ氏、それに百式レアリエンが数体。それから百式プロトタイプに護衛のジグラット・エイト」
ユリは書記官の肩を叩き、その頭からヘッドセットを外して、耳元でいった。
「挨拶するわ。案内してください」
管理局ビルのメインエレベーターを昇る。フロアに行くと周囲はさすがに騒然としていた。U.M.N.の制服を着た職員たちが忙しく行き交い、解析作業の準備に追われている。
吹き抜け構造の空中廊下を歩き、U.M.N.管理局のメインフロアへとむかった。
出入り口を抜けると、この宙域近辺のU.M.N.の中枢ルームに辿り着く。
数十メートルはある巨大な空間に、無数の物質転送サービスのオペレーション端末が所狭しと並置され、そこでは職員たちが業務に追われていた。頭上には巨大なスクリーンが多数あり、星団各地を同期中継している。
目前のアクセスカウンターに、ちょうど到着の手続きをしているガイナンらクーカイ・ファウンデーションの面々がいた。少女の桃色の髪が目についた。ちらりとその横

顔が見え、ユリの胸に娘の面影がよぎる。モモはバリエーションの百式レアリエンたちよりも遥かに死んだ娘に似通っているのだ。

ユリは半眼になり、誰にも気づかれないように深呼吸した。モモからは視線をはずして、ガイナン・クーカイに近づく。

「おひさしぶりね」

「お元気そうで何よりです」

ガイナンは隙のない仕草で礼を返した。

ガイナンのすぐうしろに銀髪の青年、その隣には面識のあるジギーことジグラット・エイトがいた。赤毛の少年――Jr.は、一行のいちばんうしろでユリのことを探るような目つきで見つめていた。

Jr.と視線を交わして、ユリは再びわずかに動揺した。Jr.の静かなまなざしはユリの心を見透かしているように思えた。

ジギーの近くで頬を紅潮させて、もじもじとユリの様子をうかがっているモモの姿が目に入った。

ユリは少し目元をしかめて、ガイナンにむき合った。

「〈天の車〉の一件へのご尽力を感謝しています。小委員会を代表して御礼をいわせてください」

ガイナンは軽く黙礼を返した。

〈天の車〉については、落下した基部の破片も大半が燃え尽きてしまったために調査のめどが立たず、自治州政府にとってはいまだに頭の痛い問題だった。モモの作製に使用されたプラントだが、事件そのものがわずか数日前のできごとだ。
その探索調査は今日の解析作業にはとても間に合わなかった。
ジギーが横からいった。
「モモのおかげでもあります。モモの観測能力がなければ内部の状況の把握に手間取り、基部のデタッチ作業は不可能だったでしょう。〈天の車〉はそのままの質量で第二ミルチア市に墜落し、甚大な被害が出るところでした」
ユリははじめてその桃色の髪の少女を間近に見つめた。モモはジギーの背後に隠れて、何かを期待するようにユリを見あげた。
「そう、よくやりましたね。モモ」ユリは抑揚のない声でいった。
モモは感激の表情で「ママ」とつぶやく。続いて何か話しかけようとしたモモの脇を無言で通り過ぎて、ユリはJr.の目前まで歩いた。
Jr.がとがめるような視線でユリを睨んだ。ユリの胸に小さな怒りが湧いた。
——どうして、あなたまで。わたしの気持ちはあなたならわかるでしょうに。
できるだけ冷静な声でいった。
「落ち着いて作業できる場所が欲しいの。案内してくださる？」
「喜んで」Jr.は憮然としてうなずいた。

ガイナン一行に別れを告げ、去り際にいうべきことばを思い出した。それは昨晩から会ったらいおうと決めていたセリフだった。振り返って、モモの名を呼んだ。
「事態が落ち着いたら、いっしょに暮らせるといいですね」
はい、と元気よく返事をするモモの顔がみるみる満面の笑みで輝いた。その目が、頭上のスクリーンに映る映像を反射して光っていた。ユリは鳥肌が立つのを感じ、目を逸(そ)らして、Jr.をうながした。Jr.は当惑して二、三歩遅れ、あわててユリの先に立って歩きはじめた。
Jr.が案内した部屋は、解析を行う施設の向かい側にある小部屋だった。壁に並んだモニターに解析室の様子が映っていた。
ユリは椅子に座り、軽い倦怠感をおぼえて、眉間を指でつまんだ。
ほんの少しのやりとりを交わしただけなのに、モモとの会話には予想以上に神経を使っていたようだ。まだ胸苦しかった。
解析がはじまる前からこんな調子では先が思いやられる。ヨアキムがY資料という遺産を遺(のこ)すのに剝(む)き出しで放置していくことは到底ありえない。非常な緊張を要する慎重な作業が続くのだ。
Jr.はデスクに片手をおいてじっと一点を見つめていた。ユリはその横顔に目を止めた。
少年のままの変わらない面影――この青年は今年二十六歳を数えるはずだ。
変わらぬ彼の容姿が余計に娘のことを思い出させた。少年とサクラとユリ。かつて、

娘のことばを少し得意げに報告した少年の顔が、そのままそこには保存されていた。
彼が何をいいたいのかはむろん察していた。ここまで案内するあいだもずっと押し黙り、無言でユリのことを責めていた。
モモのことをもっと大事に考えろ。
可能な範囲で大事に考えている。でも、これ以上は――どうすればいい。愛情というのは自分でどうこうして、つくりあげる感情ではない。
ヨアキムが最初に百式の製造についてユリに報告したとき、それはじつは娘の治療のためだと告げられた。
ユリは娘が死んでからしばらくは、とても仕事のできる状態ではなかった。娘の苦しみに感情移入し、外出することさえできない日々が続いていた。
そして、ようやく彼女がひとりで歩けるようになった頃、ヨアキムの実験室で、死んだ娘にそっくりのレアリエンたちを目撃した。はじめて、娘が死んだ後もヨアキムの研究が続けられていたことを知った。すでに開発は完成を間近に控えていた。ユリはヨアキムの様子を見て、夫の精神が何かに憑かれていることを確信した。
そんなモノにどうしたら本心からの愛情を向けることができるだろう。あれが生き物と思えない。あれが愛情をふんだんに向けてくる分だけ違和感がつのる。
ユリは自分を叱咤（しった）するつもりで拳を強く握りしめ、それから、いつまでも立ち去ろうとしないJr.にいった。

「何か用があるのかしら？」
「ユリさんさ、どうしたんだよ」Jr.がうつむいたままでようやく口を開いた。
「何が？」ユリはJr.に横目をくれた。
Jr.はその青い目でユリをまっすぐに見つめていた。
「突然、モモに優しいことばをかけたりして」
「不自然だった？」
ユリは手をのばしてモニターの縁についた埃をなぞった。
「ヨアキムは家族の温もりという刺激にモチベーション喚起されるよう、あのレアリエンを設計したのでしょう？ ならば、今後の調査がスムーズに運ぶよう、その数値を満たしてやるのは、職務遂行上必要な行為じゃないかしら」
「やっぱり、仕事のためか――」
Jr.はとがめるというより、痛みをこらえるように顔をしかめた。
「冷たい人間のふりをして、あとで傷つくのはユリさんのほうなんだぜ」
ユリはモニターの縁に自分の指が這った痕をじっと眺めた。
「あのレアリエンを造ったのは、ヨアキム――わたしはそれが怖いのよ」
Jr.は、しばらく黙って立ちすくんでいた。
「おれはヨアキム・ミズラヒがどんな人物だったかは知らない。何を意図して百式を生み出したのかもだ。けど――おれはサクラとある約束をした」

「サクラと？」ユリは顔をあげた。
「だから、モモを年相応の子どもとして扱うつもりだ」
「どんな約束をしたの？」
「――ママと妹をずっと見守ってくれって」
ユリは動揺を押し隠すために唇をきつく結んだ。遠い目のサクラの愛情に胸を打たれた。
だが、次いである疑問が頭に浮かび、首筋が総毛立つのを感じた。
サクラはモモが生まれるのを知っていた？　どうして？
モモが完成形に至るのはサクラの死後のことだ。それに、Jr.はそれに気がついていないようだが、そんなことを頼んだということは、娘はひそかに自分の死を予期していたということではないだろうか。
「ユリさん、また笑ってくれよ。サクラもそれを願ってたはずだぜ」
ユリは膝の上に乗せたままの書類ケースとPCをデスクの上に置いた。そうしないとひざが震えて床に落としてしまいそうだった。
ユリには見えなかったラインが、ひそかにサクラとモモとを連結していた。サクラの意識が生きていた虚数空間の狭間（はざま）に、未来のモモの痕跡があったとでもいうのだろうか。
――ヨアキム、あなたはいったい何を造りあげたの。
いつのまにか悲しみで心は満たされていた。

何も感じず、何ひとつ知らされず、あの写真に写った三人の中で、ただひとり生き残ってしまった。遺されたのはモモという不可思議なレアリエンが一体。
ユリとJr.は、それからしばらく無言で見つめあった。
居たたまれなくなったユリはゆっくりと立ちあがり、Jr.の横を通り過ぎた。今はむしょうにY資料という遺産に対面したかった。小委員会の専門委員という立場からではなく、今はただひとりの研究者として。ただひとりの母親として。
少しモモと話をしたかった。

——標準時一一〇〇。
解析設備の最終微調整を指示し、ワークフロー資料の点検も終了。
解析準備のあいまをぬってモモはしきりにユリに話しかけてきた。ことばを交わしているだけでうれしくてしかたがないようだ。ユリはできるだけ動揺を隠して、他愛のない会話をした。壊れものを扱うときのような歯がゆさをおぼえた。

——標準時一一三〇。調整室。
ユリはメインフロアから少し離れた管理局の調整室へむかった。
扉を開けると、ジグラット・エイトが機械の椅子に身を横たえている。この調整ベッドから伸びたケーブルがサイボーグの義体のあちこちに差し込まれている。ジギーは眠

るように目を閉じている。

ユリは、この男がモモに示す思いやりに驚かされ、また内心感謝もしていた。ユリには決してできない形で、百式プロトタイプの肉体面の保護のみならず、感情面を支えることもしてきたようだ。ユリは、この男とモモとがどんな日々を重ねてきたのか、その詳細は知らない。

どこがといわれればうまく説明できないが、はじめて召還されたときに比べてどこかしら印象が変わった気がする。「モモの護衛という任務が終わったら人としての記憶を削除して欲しい」という彼の委員会への申請はまだ変わっていないのだろうか。

「調子はどう？」と声をかけた。

調整ベッドの上でジギーは静かに目を見開いた。

「――ミズラヒ博士？」

ユリは調整ベッドの操作盤に近づいた。

「モモにたのまれたのよ。ママは高名な科学者だから、サイバネティック工学にも詳しいでしょうって」

「いや、調整は」

ジギーは体をベッドから浮かす。もつれたケーブルがこすれて音を立てた。

機械の体になっても異性に体のすみずみまで知られるのは抵抗があるらしい。

ユリは微笑んで、ジギーを調整ベッドにそっと押し戻した。

「わたしはべつに若い女ってわけでもない。気にしないで」
操作盤に近寄って作業を続ける。ここまでの激しい道のりを物語って義体の損耗は激しかった。ほとんどがモモを守ろうとしてついた傷なのだろう。
しばらくは、お互いにことばもなかった。
「高名な科学者――どちらかというと悪名だと思うけれど」ユリがいった。
「あなたはモモが苦手なようだが、なぜです?」ジギーが目をつぶったままでいう。
ユリはしばらく考えてから答えた。
「娘と同じ顔をした娘ではないモノ、あなたは愛せる?」
「難しい質問だ」
「見た目だけ娘に似せても魂は戻らない。星団じゅうに散らばった百式たち――あの姿は、絶え間なくわたしに娘の死をつきつける」
長年の苦悩をついもらしていた。
「百式をいまの姿にしたのはあなたの夫だったのか」
「ええ」
どうしてこんな話をしたのかわからなかった。
自分はこの男のことをほとんど何もしらない。自殺し、当時のライフリサイクルのシステムに呑み込まれてサイボーグ化された。そして、何か問題が生じるたびに起動されて局地的な任務を強制される。それだけ。

人間だったころの彼をほとんど知らない。
しかし、知らないからこそ話せるのかもしれない。例えばJr.にはこんな話は決してできないだろう。こんなことを話したらあの青年をどれほど傷つけてしまうかと先に考えてしまうから。
「あなた、子どもはいる？」
「息子がひとり。元気で利発な子だったが、事故でなくした」
ジギーは目をつむったまま淡々といった。ユリは作業の手を止めた。
「ごめんなさい――それがあなたの自殺した原因？」
「ああ――そうだ」
「わたしも――娘が死んだとき、そうすればよかったのかもしれない。でも、悲しみの占めるべき場所を夫への怒りが埋めた」
ジギーは考え込むように少し沈黙してからいった。
「たぶん、貴女(あなた)は強い女性なんだろう」
「違うわ、意固地なのよ」
「ミズラヒ博士」ジギーは目を開いた。
「これは私見だが、貴女には娘がふたりいたのだと思うことができないだろうか」
「どういうこと？」
「ひとりは亡くなって、ひとりはまだ生きている」

「モモを娘のコピーではなく、ひとりの個人として扱えというの？　ずいぶんと難しい課題を出すこと」

「検討してみてくれ」

「考えてみるわ。わたしそろそろ行かないと。きっと書記官が青い顔になって探しまわっている」

ユリは笑って操作盤の前を離れた。

――サイボーグとの対話が避難所なんてね。

少し皮肉に考えて、それでも心は不思議と穏やかだった。

「わたしも行こう。モモの解析には立ち会いたい」

起きあがろうとしたジギーを手で制した。

「まだ時間はあるわ。立ち会いなら一三〇〇までに解析室まで来ればいい。できれば健康になってきてちょうだい」

ジギーは再び、調整ベッドに身を横たえた。

「調整、ありがとう」

「どういたしまして」

ユリは片手を振って答えた。

――標準時一二五〇。

ぎりぎりのタイミングで第二ミルチア代表ヘルマー氏到着。解析作業立ち会いのために別室に案内される。

解析室には、各端末機の前に、高速演算処理を得意とする百式レアリエンをはじめとして、作業を担当するU.M.N.の職員らも全員着席し、オペレーション開始の時刻を待っている。

——ヘルマーまでそろって。なんだか状況が似てきたわね、かつての娘の治療風景に。

ユリは隣に立つガイナン・クーカイを見ながら思った。

もうひとりの娘。ジギーのいったことばが頭に残っていた。

長年苦しんできた感情から逃れるためのバイパスとして、たとえ偽薬（プラセボ）としても有効な思考法だと思った。そう思えるのは、ジャン・ザウアーというあの男が、自分と似たような経験を経てきたと知ったせいだった。どうにかしてモモの誕生を感知したサクラが、妹として認識していたことをJr.の口から聞いたことも、原因のひとつだった。

ガラス越しに、調整ベッドの上に浮きあがったモモの姿が見えた。その傍には調整を終えたジギーとファウンデーションから来たメリィの姿があった。

スピーカーを通して三人のやりとりが聞こえてくる。

《心配せんでいいで、モモちゃん。これは、あくまでも解析の下準備やから》

《はい、がんばります！　モモ、自律調整型だからベッドでの調整は起動以来です。こうやって調整を受けているとジギーみたいですね》

《大丈夫、怖がる必要はない》
ジギーがモモを力づけるようにうなずいている。
コンソールを操作していた百式レアリエンが、ヘッドセットマイクを通して告げた。
《解析のため、模擬人格層を機能停止します。一時的に疑似感情表現および、抽象認識機能が停止しますが、心配なさらないでください》
そのときはじめてモモの顔がひきつった。
《疑似、感情――》不安にかられたか細いモモのつぶやきがスピーカーから聞こえた。
《模擬人格はあくまで対人用のオプションですから、観測機能そのものにはなんの影響もありません》
《モモの心は、ただのオプション機能――》
《人格層、スリープ完了。機能停止します》
百式は無駄のない操作でコンソールを叩く。
《あ――》
吐息のような声を最後に、モモの体を支えていた力が消え失せた。小さな人形がただ無造作に浮かんでいるような姿。そのうつろなまなざしは空を指していた。
ユリは胸に痛みを感じて、いつのまにかモモに感情移入していたことを知った。目を伏せて、手元に置かれたマイクのスイッチを入れた。
《わたしはユリ・ミズラヒ。接触小委員会より本解析作業にあたっての監督権を委任さ

れてきております。現在標準時一三〇〇。ただいまより百式プロトタイプM.O.M.O.の深層領域に暗号化されたY資料の選別及び解析作業を開始します》

6

〈解析作業中〉を示す青いランプが頭上で点滅している。
頭上の巨大なスクリーンに映ったモモの神経ネットワーク地図に変化はない。
作業開始から五時間以上が経過している。
いちおうひととおり全身のトレースが終わっていたが、いまだY資料はあらわれていない。資料の一部である旧ミルチア宙域への航行コラムの存在を確認しただけだ。
この部分のデータは当初から存在が予想されていたもので驚くべき発見ではない。しかし、旧ミルチア宙域への回廊が開けば、委員会とミルチア政府はオリジナルゾハルに続く道を独占的に確保することになる。
オペレーションメンバーは、作業上必要な最低限のコミュニケーションのほかはまったく無言で、幾度となく繰り返される作業に没頭していた。データの障壁のひとつひとつに数パターンのデコーダをあてて打ち破っていく。
ユリは全体を見わたせる壁際で、作業するメンバーたちを見守っていた。
Jr.の姿は解析室から消えていた。彼にはとても見ていられなかったのだろう。多感な

少年時代のできごとだ。ユリにとってもぴくりとも動かないモモの姿が娘の姿に重なった。
「最終障壁のデコードパターンを解読。プロテクトの全解除に入ります」百式が告げた。
室内に緊張が張りつめ、静寂が訪れた。百式がコンソールを叩く音が部屋に響いた。
「ミズラヒ博士、モモが」ジギーが口を開いた。
ユリはジギーの示す解析用ベッドのほうを見た。
うつろに目を開いて横たわる少女。口だけが動いて何かを告げている。
「モモが――何かいってるわ。音量をあげて」ユリは近くのオペレーターに告げた。
となりにいたメリィがもどかしく天井のスピーカーを見あげた。
「モモちゃん？」
《だ、め……》雑音に掻き消えるようなモモの声。
《モモちゃん？　どないしたん。なんやいいたいんか》
マイクに飛びついたメリィの声が反響して解析室に響きわたる。
《モモちゃん？　どないしたん。なんやいいたいんか？》
《これは、ワ、ナ》ぷつと声は途切れた。
ユリの背筋を緊張が走った。モモの声は、Y資料に仕組まれた何かがついに動き出すその合図のように思えた。
「なんだ。これは――！」U.M.N.職員のひとりがかすれた叫び声をあげた。

室内はオペレーターたちの口々の叫び声で一気に騒然となる。
「不可視領域から高速言語による大量の干渉が発生！」
「防壁ロジック崩壊六八％、緊急遮断――」
「拒絶されました。U.M.N.に端末が開放されています。侵入経路特定できず！」
「深層領域内で軸策の多重連結が進行中、大規模なホログラフィック・ネットワークが新規構成されています！」
スクリーンに映されたモモの神経ネットワーク図に異変が起きていた。ぽつぽつと体のあらゆる箇所で明滅をはじめた光の点が、各所いっせいに流れ出し、支流が集まり大河をなすように、大きな光の流れとなってスクリーンを輝かせた。
「ミズラヒ博士、これは」
問いかけるジギーの顔は明滅するスクリーンの光で白く染まっていた。
ユリは茫然とつぶやいた。
「システムをひとつひとつ解析しても、なにも見つからないはずね。各層自体は解像度の低い断片――散りばめられた記憶のかけらのようなもの。すべてが同時に活性化して、はじめて全体像を結ぶ――」
ユリの顔をスクリーンの発する光が白々と染めている。
「ヨアキムの仕掛けた壮麗な騙し絵」
ユリは我に返って解析室の一同に叫んだ。

「遮断再実行、外部ハッキングからの防衛ロジックを再構築しなさい」
「防衛ロジックの再起動、試行しています」
オペレーターの悲鳴のような声が響きわたる。
「拒絶されました！」
「ちょっと黙って。モモちゃんがまだなんかいうとるんや！」メリィが叫んだ。
砂の音混じりのスピーカーの音声。
《ゴ　メ　ン　ナ　サ　イ。モモ、気づかなかった》
ユリの顔が青ざめた。何かが起きていた。ある勘が脳裏をよぎった。
違う。これは――ヨアキムではない。
別の人間の仕掛け――濃厚な悪意の存在を感じた。
「自己展開するトラップが存在している。これはたぶん最近、別の人間に仕組まれたトラップ。障壁がすべて消えた時点で自動的にU.M.N.に開放されるようになっていたんだわ。心当たりはない？」
ジギーがしばらく押し黙り、顔を歪めてつぶやいた。
「考えられるのは〈ネピリムの歌声〉の塔のときだ――あの、アルベドという男」
「アルベド」ユリはその名前を茫然とつぶやいた。
このままでは一時的に、この宇宙に住むあらゆる人間にY資料が開示されてしまう。
資料のすべてではなくても、少なくともその一部である、旧ミルチア宙域への断絶した

U.M.N.コラムを修復する鍵は流れ出してしまうだろう。
そうなれば、旧ミルチア宙域に、オリジナルゾハルをめぐって無数の欲望にかられた人間たちが押し寄せる。再び戦乱がはじまる。
「防衛ロジック崩壊まであと二十秒！　このままではすべてのデータが流出するおそれが！」温厚なはずの百式タイプがひどく取り乱した様子で告げた。
なぜ。どうしてこんなことになったの？
真っ黒に塗り潰されたヨアキムの笑顔が脳裏をかすめる。
光輝くスクリーンを哀しく見あげた。スクリーンに映ったモモの神経ネットワーク地図はまだ激しく点滅を繰り返していた。
こうなった以上、彼女には果たさなければならない義務があった。
近くの端末機に駆け寄り、オペレーターを押しのけた。オペレーターは声をあげて床の上に転がった。
「ミズラヒ博士、何をする気です！」背後でジギーが叫んだ。
ユリは狂おしくコンソールを叩き、叫び返した。
「非常用の制御コードを使って、データを破棄します」
「ばかな。そんなことをすればモモが――」ジギーが怒鳴る。
「しかたがないわ。Y資料が奪われる事態だけはなんとしても避けなければ！　そんなことになれば、星団に生きる多くの人間たちが命の危険にさらされる。戦争がはじまる

のよ！」
一瞬——ガラス越しの、モモの姿が見えた。その小さな体はすべてに無抵抗で、今キーをひとつ叩けばあのすべてが消える。
——ヨアキム、あなたはどうして、こんな子どもにすべてを託して。
ユリは呼吸を求めて激しくあえいだ。
——このキーをひとつ叩けば、すべてが消える。
震える指は何度もキーと空のあいだを往復した。
押さなければならない。しかし、心の中で叫び続ける何かが、キーに伸ばしたユリの手を押しとどめていた。
もうひとりの娘。ママと妹を守って——。
ユリは手を握りしめた。あそこに今確かにいる、数時間前までわたしに懸命に笑いかけていた、あの存在を断ち切ることなど、わたしにはできない。
「——モモ」ユリはつぶやいた。
U.M.N.職員が叫んだ。
「ミズラヒ博士！　ホログラフィック・ネットワークが自己崩壊をはじめました。展開データ、消失していきます」
ユリは握りしめた自分の拳を茫然として見つめた。
「そんな——わたしはまだ」

頭上のスクリーンで、モモのネットワーク図の光輝が少しずつ弱まって、しだいに消失していく。
「どういうことだ！」
ジギーがユリを激しく問い詰めた。ユリはつぶやくように答えた。
「モモが——モモが自ら、神経回路を断って記憶を分散させているのよ。ヨアキムに託されたものを守るために。精神を自爆させるつもりだわ」
「なんだと⁉」ジギーが怒鳴る。
それは誰にも止められなかった。皆はなすすべもなくスクリーンを見あげていた。
そして——すべてが暗転した。
「百式プロトタイプ、システム機能停止しました！」
その叫び声を最後に解析室からいっさいの声が消えた。誰もが無言で起こったことの意味を、茫然として嚙みしめていた。Y資料は無傷のまま守られた。
そのために百式プロトタイプ、モモは死んだ。
ユリの喉が嗚咽(おえつ)に震えた。
スクリーンからはモモのホログラフィックが消失し、代わりに男の顔が大きく顕(あらわ)れていた。乳白の髪を持つその男は歪んだ笑みを頰に刻み、炯々(けいけい)と輝く目でこちらをのぞき込んだ。
《やあ、贈り物は気に入ってもらえたよな？》

——あれは？　アルベド⁉

ユリはおぼろげな記憶を辿った。記憶の中にいる白い髪の少年の姿。ユーリエフ・インスティテュート時代の少年の面影はもうない。

《ミズラヒの遺産は、ペシェが体を張って守り抜いたようだな。健気なもんだ。ミズラヒの戯言に乗せられ、ヒトになる奇跡を待っている。愛しい天使たちの死骸を塗り込めて造られた木偶人形》

「木偶人形、だと？」ジギーが怒りで顔を強ばらせる。

スピーカーから滴り落ちるような不快な笑い声を残して、アルベドの姿はスクリーンから消えた。

ジギーが振り返った。

「ミズラヒ博士、モモは⁉」

ユリはあわててガラスのむこうを見つめた。命の絶えた小さな娘。全身に鳥肌が立っていた。死んだ娘の姿が頭にちらついた。

「蘇生します！　死なせはしない——」

ユリはオペレーションブースを飛び出し、モモが力なく浮かんでいる解析用ベッドにむかって走った。世界が色を失い、思考がめまぐるしく回転していた。瀕死のレアリエンを助けるマニュアルを求めて記憶がめくるめく遡行した。

備え付けのマイクにむかって叫んだ。

《修復ナノユニット注入！　素子活性剤シリンジを十二本用意！》

モモを解析用ベッドから抱き降ろす。抱きしめた体に生命の気配はなかった。

「今度こそ、助けてみせる。今度こそ！」

ユリは腕を張り、体重をかけて、モモの心臓を押した。小さな体の奥底にまだわずかに残る命のかけらを求めて、懸命にその扉を叩き続けた。

7

暗い広大な円形のホール。空中には平板なスクリーンが何百も無秩序に並び、そのそれぞれに星系代表討議員の顔が映されていた。星団連邦議員たちの集まる壮大な議事堂である。中央にあるタワーを取り囲むように議員たちの顔が浮遊し、議事を進行する。

今日の議題は「移民船団」による艦隊派遣の討議だった。

かつて、人類が果てなき宇宙に漕ぎ出したとき、その航行を指揮していた移民船団という組織。一時は全星団に興隆し、星団連邦と勢力を競ったその組織の活動は、この数十年間は比較的穏やかなものになっていた。ところが、ここ数年、彼らの組織は再び、活性化してきている。星団議員たちを次々と籠絡(ろうらく)し、ひそかな権力のネットワークを造りあげてきた。

男は移民船団に買収されたそんな議員のひとりだった。

彼は巨大なスクリーンの前に立ち、その黒い表面を鏡代わりに、ニヤけた顔を映して服装を整えた。

すべては予定どおりに進んでいた。

例の百式プロトタイプが第二ミルチアに奪還されたと聞いたときには、またぞろ保身の虫が騒いだが、すべては杞憂だった。

今さらながら自分が属している組織の強大な力を思い知らされる。罠は十重二十重で、星団の中枢は遠からず移民船団の手に落ちるはずだ。

議員のひとりが激しい口調で発言する。

《なぜ今、移民船団が、ミルチアへ艦隊を派遣する必要があるのか！》

男は中央タワーに発言を求めるコールサインを送り、議事堂にその声を響かせた。

《まぁ、そういきり立つこともあるまい。彼らのいい分も聞いてみたらどうかね》

タワーが〈許諾〉のサインを出す。

《発言の機会をいただき、感謝する》

移民船団の代表である教皇の姿が大きくあらわれた。教皇は朗々といった。

《――かつてこの宙域にミルチアなる大地が存在していた。周知のとおり、その大地は十四年前に起きた事象により、人類最大の遺産とともに封印された。今では誰ひとり、その宙域に近づくことはできない。もともとかの遺物は全人類の所有物であり、古の時代から我らが移民船団により管理されてきたものであった。ところがやむを得ぬ経緯を

好機と利用して、この遺産の力を我がものにしようとする勢力がある》
議員のひとりが反論の声をあげた。
《待ちたまえ。現在、ゾハルの管理は連邦政府の管轄となっているのだぞ。君たちこそ、その大いなる遺産とやらを独占したいだけではないのかね》
教皇はうっそりと笑う。
《それは心外なことを。古からあれが我らの手で管理されていたのは、一勢力がその力を独占するためではない。かの遺産について精通した我らがあれを管理することが、人類にとって最善の選択だったからである。我々が訴えた艦隊派遣の件をもう一度よく考えていただきたい。独占を企んでいるのは我々ではなく、ほかにいる、と申しておるのです》
《まさか、ミルチア政府がそうだ、とでもいうのか》
教皇はうなずき、さらに続けた。
《彼らは十四年前の事件をきっかけに、自らの武力行使を正当化し、そしてその力の象徴として天の車なる巨悪をこの世に出現させ、この世界に紛争を再燃させせようとしたのだ。実質的には彼らの内部組織であるクーカイ・ファウンデーションを見よ。ミルチア紛争後に残されたゾハルエミュレーター十二基のすべてを我が者としているではないか。目覚めよ。彼らの目的は、紛争の混乱に乗じて旧ミルチアの遺物すべてを私欲のために利用することである。我々は、おぞましき簒奪者であるミルチア政府に対し、旧来の自

治権を主張する！　繰り返すが、これは我ら一勢力のためではない。全人類の安全と名誉と秩序のためなのだ！》

教皇は自分のことばが議事堂に響いていくのに耳をすますかのように沈黙した。

ざわめきが広がる。

《先の件はU-TIC機関の犯行によるもので、ミルチア政府への嫌疑は晴れたはずではないのかね？　ヴェクターからの証拠のデータもあると聞いているが？》

男は再び、発言する。

《いや、ミルチア政府にヴェクターが肩入れしているという噂もある。あのデータとて、どこまで信用できるものか。現にミルチア政府の代表がどこにもおらんではないか》

誰かが叫んだ。

《ヘルマー議員はどうしているんだ。この件についての釈明はないのか？》

議会場は混乱に陥り、しかし、ヘルマーはいっこうにあらわれなかった。

混迷の中で口々にわめく議員たちのバストアップ映像が、次々と大きくなっては小さくなり、賛同しあってはまた罵(ののし)りあった。

【第四章】ユーリエフの鳥籠

1

Jr.はモモの血の気の失せた顔を見つめる。

モモは解析用のベッドに再び浮かんでいた。ユリの適切な処置もあり、モモはいちおう一命をとりとめた。

しかし、それはかろうじて命がつながったというだけだ。すべての神経網が切断され、モモの意識は依然として外界から隔絶されている。時間をおけばその意識もしだいに失われ、モモは静かで確実な死を迎える。

くっきりと見開いたままの目をJr.は閉じてやった。

Jr.は唇を嚙んだ。

ユリには「モモを大事にしろ」なんてことをいっておきながら、自分はその危機を救ってやれなかった。それどころかそのときに傍にいてやることさえできなかった。またいつものように肝心なところで逃げ出したのだ。

モモの傍にはユリが立ちすくみ、赤く腫らした目で、モモを見下ろしていた。さっきまでの取り乱した様子から、少しは落ち着きを取り戻しているように見えた。
モモを救う残された方法はひとつ——意識をU.M.N.上にマッピングしたエンセフェロン空間でモモの深層に直接アクセスし、その精神を再統合するしかない。
エンセフェロン空間とは、被験者の脳内にある外因性記憶および主観イメージ、外部からの機械的補助、そしてU.M.N.という現象を組みあわせて作る仮想空間である。
その最深部に行けば、モモの閉ざされた意識が見つかる可能性は残っている。
この事態に際し、U.M.N.管理局に詰めていた自治州政府代表のヘルマーはヴェクター・インダストリーに対して、正式の協力を要請した。ヴェクターはレアリエンの中枢神経部分であるブラックボックス〈OEM〉の製造を独占的に担っている。レアリエンの精神をU.M.N.に再現するにあたって、その技術は不可欠だった。
「第三開発局から転送されてきたエンセフェロンダイブ用の機材はそのまま解析室に接続するわ。オペレーションブースには、もともと脳を中心とした神経系を検索する機能が充実してるから、その点ではつごうがいいわね。仮想空間を構築するためのU.M.N.との接続も問題がない」
緊張した硬い声でそういって、ブースに歩いていくユリの後ろ姿をJr.は黙って見送った。ブースのガラス越しにアレン・リッジリーが手を振ってモモの解析ベッドをエンセフェロン用に調整していたシオン・ウヅキに合図をする。

当初は三局の人材が派遣されるはずだったが、ヴェクターからは代わりにこのふたりが到着した。

「わたしたちも、お父さんの遺志を命を懸けて守ろうとしたモモちゃんの助けになりたいの」

シオンは決意のこもった表情でそういった。親しくなったモモという少女の事実上の死にショックを隠せない様子だった。

シオンは、もともと第三開発局志望だったこともあるが、レアリエンの脳生理学についてはかなり深い知識を持っている。アレンも第一開発局ではもともとKOS-MOSのエンセフェロン訓練のチーフを担当してきた。それにふたりはモモのことをよく知っていた。精神の深層に踏み込むエンセフェロンダイブにおいて、それはどんな技術や知識よりも重要なファクターとなる。

オペレーションブースからは解析作業を行っていたチームは、エンセフェロンの技術を持つ少数のスタッフを残してすでに退去していた。エンセフェロンダイブは少人数での実行が可能である。

ダイブの被験には、Jr.とシオンのほかに、ケイオスとジギーも参加を希望した。四人は緊張した面持ちで、モモの体が浮かぶベッドを取り囲んだ。被験者の四人は赤いゴーグルを頭部に固定した。このゴーグルが、エンセフェロン空間と被験者とのあいだをつなぐ媒介となる。

オペレーションブースからマイクを通したアレンの声が聞こえた。
《ダイブ被験者は主任、Jr.君、ケイオス君、ジギーさんの四人。あと、二局からKOS-MOSのデータをエンセフェロン内に同時に送り込んでもらうよう手配してあります。彼女がいたほうが何かと心強いでしょうから》
シオンがアレンにむかってヘッドセットマイクで礼をいうと、アレンはブースの中でうれしそうに頭を掻いた。アレン・リッジリーはダイブには直接参加しない。外部からバックアップオペレーターとしてエンセフェロン空間を構築維持する役目を果たす。
《ダイブターゲットはサクラ・ミズラヒの記憶を構造モデルとしたモモ・ミズラヒの深層領域。モモちゃんの中の記憶だけではなく近接空間と時間軸を共有した者の記憶を共鳴再生する可能性があります》
Jr.はベッドに浮かぶモモの姿を見つめた。正常な意識が途絶えた女の子にエンセフェロンダイブするのはこれが最初ではなかった。心の奥に、とても懐かしく悲しい思い出がある。
Jr.がオペレーションブースを見ると、ユリが悲しげな目でこちらを見返していた。
「サクラに接していた人間の記憶がエンセフェロン構造体内部に同時に再生されることがあるってことだよな。だったらたぶん、この場合それはおれの記憶だ」Jr.はいった。
正面のジギーが口を開いた。
「ミズラヒ博士から、サクラ・ミズラヒは中枢神経の器質障害を患っていたと聞いたこ

とがある。彼女と接した経験があるのか？」
Jr.はうなずいた。
「サクラの症状は生まれつきで、U.M.N.に潜在する波動異常となんらかの接点を持つと考えられていた。彼女の治療は、おれたちU.R.T.V.のU.M.N.連結訓練を兼ねてユーリエフ・インスティテュートで行われた。まさか、こんな形でもう一度訪れることになるとはな。あの白い庭の檻に」
Jr.は奥歯を強く噛んだ。ジギーがそんなJr.を無言で見つめていた。
「なんだよ、おっさん。また冷静になれとでもいうのか？」
ジギーは首を振った。
「ダイブする前に、ひとつだけ聞かせてもらいたい。ずっと疑問に思っていた。ウ・ドゥとは何なのだ？　おまえたちU.R.T.V.はなぜ、対ウ・ドゥ用に生み出された？」
「なんで今になってそんなことを訊くんだよ？」
「U.R.T.V.の生まれた場所に行くなら、知っておかねばならない。それにアルベドというあの男がモモを狙う理由はウ・ドゥと連結するためだといっていた」
Jr.は押し黙った。思い出せば今でも身の毛がよだつ思いがする。
十四年前、ミルチア紛争の末期、彼らU.R.T.V.はウ・ドゥと相対した。そして、その結果、歯車が壊れた。
「ウ・ドゥ、正確にはウーヌス・ムンドゥス・ドライブオペレーション・システム——

名前だけ聞くぶんには、U.M.N.の制御AIのような響きだが、あれは人間の手によるものじゃない。それはただの口当たりのいい名前。おれたちも最初は信じ込まされていた。U.M.N.上に潜伏する、危険な波動を帯びた人工意識体だってな。うそっぱちさ。おれたちの父、ディミトリ・ユーリエフ博士は何もかも知ってやがった。反存在であるおれたちU.R.T.V.ですら、正確な正体はわからない。ヒトの手で制御するなど無謀な、上位領域のエネルギー。そういう存在だ」

「ウ・ドゥの反存在として設計されたおれたちとU.R.T.V.とウ・ドゥが反存在衝突を起こせば、宙域をまるごと消し去るだけのエネルギーが荒れ狂う。リーダーだったおれは、それを怖(おそ)れて精神連結を強制的に断ち切ったんだ。でも、まにあわなかった。汚染されたアルベドは発狂し、それでも、なぜかウ・ドゥと再び結びつくことを強く求め続けてる。おれやガイナンには、それがどんな意味を持つのかわからない。それが局所事象変移を起こしかねない危険な行為という以外には、な」

「ウ・ドゥ――」シオンが溜息のようにその名前を口にした。

スピーカーからアレンの声が聞こえる。

《エンセフェロン構築、完了しました。非局所的連結(インターコネクション)、いつでも開始できます》

「OK、はじめて」シオンが片手をあげて合図する。

《この仕事にかけてはぼくはプロですからね。皆さん、安心して行ってきてください》

「うん、頼りにしてる」

シオンのことばに、アレンの表情がみるみるほころぶ。真顔に戻って軽く咳払いし、
《KOS-MOSのデータ転送を確認。再構築開始》
四人の身体の構成データがゴーグルを通じて、サクラの記憶をベースとしたエンセフェロン空間へと流れ込んでいく。
《ダイレクトアプローチ、準備すべてOKです》
「よし、行くぞ！」Jr.が叫んだ。
ひと呼吸して、彼らは白い光の中にいた。

＊

「ここは？」
シオンが周囲を見まわして真っ青な空を見あげた。霧吹きで吹いたような薄雲がかかっている。
「モモの深層領域に潜在する、サクラの内的世界だ」Jr.がいった。
ジギー、ケイオス、そしてKOS-MOSが次々と周囲に出現する。
そこは垣根に囲まれた二階建ての小さな家だった。垣根も家そのものも白いペンキで塗られていた。彼らはその垣根の内側に立っていた。
庭には小さな木々が生え、白く輝く風が枝に触れるとそれは緑の光を散らした。
遠景はなだらかな丘陵で、周囲に視界をさえぎるものは何もない。

それは美しい家だったが、同時に、この世界にたった一軒きりの寂しい家だった。家の玄関の軒先にベンチが吊されて、それがかすかに揺れていた。桃色の髪の娘が座っていた。Jr.はモモにむかって駆け寄った。
「モモ――？　モモ、無事だったのか？　聞こえないのか？　返事をしろよ！」
桃色の髪の娘は何も答えなかった。
鎖で吊されてブランコのように揺することもできるベンチの上に微動だにしないでただうつろな目で座っているだけだった。
「無駄よ。Jr.君。彼女は返事をしないわ」
「なぜだよ。ちゃんとここにいるじゃないか」
「彼女はいま、人格層を停止した状態。しかも神経ネットワークが分断されてるのよ。わたしたちのことを理解することができないわ。こちらからの問いかけも聞こえているかどうか」
「そんな――くそ！」
「ここにいるモモちゃんはあくまでも、無意識上の産物。たとえなんらかの行動を起こしたとしても、それは条件反射的に行動しているだけなのよ」
シオンは哀しげな目でモモを見つめた。
「モモちゃん、こんな状態でも、一生懸命わたしたちを助けようとしているんだわ」
Jr.がモモの手を取って、ゆっくりと立たせた。

声をかけようとしたが胸が詰まって何も出なかった。
「何をしている、時間がないのだろう。これ以上モモに心配をかけるつもりか」
ジギーがいった。
「わかってる。モモ——もう少しの辛抱だぞ」
モモは手を引くとなんの抵抗もなくふわふわと付いてきた。
そして——彼らはその白い家の扉を開けた。

2

不吉の長い夜が明けて、朝露が消えると、窓ガラスのむこうはいつもどおりの晴れ模様だった。
少女はベッドの上でいつもと同じ日がはじまるのだと思った。
だから、いつものように朝寝をした。窓から射しこんでくる太陽の日がポカポカとふとんを暖めていた。
ここでは、どれだけ寝ていても、どれだけ遅くまで起きていても、誰も起こしに来ることはないし、誰も叱らない。ここはわたしの世界だから、自分の好きにできる。それは、ときどきとても寂しいことだけど。
ところが、その日はほんとうはまるで違う一日だった。

異変のはじまりは窓からぶしつけに入って来たそよ風。

そして、部屋の壁際に置かれていたクローゼットが口を利いたことだった。

――痛いよ。痛いってば。

――バカ、くっつくんじゃねえってば。

両開きの戸が開く音がした。

鼓動が高鳴った。何かが部屋に入って来た。

少女はベッドの上で薄目を開けて部屋の様子を眺めた。

ここに誰かが来るのははじめてじゃない。

でも、今までここを訪れたものは、みんなぼんやりとした影のようなもので、むこうは何もいわず、彼女の声も聞こえないような存在だった。

ところが、今日の闖入者(ちんにゅうしゃ)は違っていた。三人のはっきりと姿の見えるそれは、明らかに子どもの姿をしていた。

少女は昔ママが読んでくれたこびとの妖精のことを思い出した。髪と目の色だけが違っていたが、三人とも同じ顔だったからだ。

しかし、むろん、妖精がこの世に存在しないことは知っていた。自分がほんとうの世界から切り離されて、誰とも話すことができない病人なのもわかっていた。

だから、男の子たちが会話をしているのを聞いてほんとうにびっくりした。

「接地座標、間違えてる？」乳白色の髪の子がきょろきょろと部屋を見まわしていった。

「座標はあってる。あの女の子が、ぼくらの接触対象だよ」黒髪の男の子が答える。
彼女は思わずベッドの上で身を起こした。
――やっぱり、しゃべってる！
床の上に座っていた男の子たちはいっせいに彼女のことを見た。
「わ、あの子、こっち見てる！」
ひとりの少年が仰天して、となりの赤毛の男の子にすがりついた。
「わあ、ご、ごめんなさい！」
赤毛の子も怯えた目であとずさった。
男の子たちはみんな逃げ腰で、彼女のいるベッドを遠巻きにしていた。
何がなんだかわからない。
「あなたたち――」
少女はようやくそれだけ口にした。
男の子たちは顔を見あわせた。誰ともなくあわてて立ちあがり、先を争うようにあたふたとクローゼットにむかって駆け出した。
「今度は玄関から来るよ」
去り際に、赤毛の子がクローゼットの戸にかけた手を、ふと思いついたように振ってみせた。
胸がどきどきした。頭はくらくらした。両手をふとんの上で握った。

——行ってしまう。
ぱたんと戸が閉まった。彼女はクローゼットにむかって叫んだ。
「待って——」
しん、と部屋は静かになった。
彼女は胸に手をあてた。
クローゼットが再び少しだけ開いた。
そこから頭がのぞいていた。怖がるようにおずおずと、それでも隠しきれない好奇心を浮かべて、赤、白、黒の髪の毛をした男の子たちが顔を突き出した。
戸がゆっくりと開かれた。
「あなたたち、わたしのことば、聞こえるの?」
彼女は震える声でいった。男の子たちはゆっくりとうなずいて、少しはにかんで笑った。
胸も顔も熱くて、涙があふれそうになった。
「うれしい。あなたたちが来てくれて」
男の子たちは名前を名乗った。
赤毛の子がルベド。白い髪の子がアルベド。黒髪の子がニグレド。
「三つ子なの?」と訊くと彼らは意味ありげに笑いを交わした。
それから、少し話をし、彼女もたくさん笑った。また必ず来ると約束して、彼らは来

たときと同じように風のように去った。
彼女は彼らがクローゼットの中に消えたあと、軒先に吊されたベンチの上で、その子たちの名前を何度も繰り返し口にした。
飽きるまでベンチを揺らした。
太陽は眩しく、芝生は風に揺れていた。
ここに来てはじめて、空に感謝を捧げた。
生まれてはじめて、畏れを知った。

彼らは遠き日々の残像の中を彷徨い、歩き、目にする。
それは水中の世界を訪ねるような不思議な感覚。
残像は彼らには気がつかない。
残像の呼吸まで感じられる、まるで自分たちが残像そのものになったような——。
「あれはモモちゃん？」シオンが訊く。
「サクラだよ」Jr.が答える。
夢から覚醒するような少し惨めな昂揚感の中で男と女の声が聞こえる。
《ディミトリ、本当に、あの少年たちがサクラの治療に役立つと？》
《君の娘さんが抱えているのは、単なる器質疾患ではない。U.M.N.の共時性に対す

る感受性過敏——狭い宇宙の時代には存在しなかった疾患だね。U.M.N.の波動を一定コントロールできる反ウ・ドゥ波動を有する、彼らU.R.T.V.との接触は娘さんの治療に有益だと思うよ》
《ウ・ドゥとの接触能力がこんなことに役立つなんて。でも、あの子たちはどうなるの？　サクラのためとはいえ、あの子たちを苦しめたくはないわ》
《苦しめる？　いつも行っている訓練プログラムに比べれば、君の娘とのコミュニケーション治療など彼らにとってみればサバティカルみたいなものだよ》
少年は卵形のポッドの中でふと目を開いて、跳ね起きた。喉が詰まって咳き込んだ。いつも目覚める青白い部屋。まわりには同じようなポッドがいっぱい並んでひしめいている。
でも、今日はほとんど空っぽだ。少年のほかにはアルベドとニグレドしかいない。彼らはまだ目覚めていなかった。
ガラス越しのオペレーションブースが見えた。たくさんの機械に囲まれて、金髪の男とこげ茶色の髪の女性が話をしていた。ディミトリ・ユーリエフ博士ともうひとりは見たこともない女の人だった。
ものめずらしく女の人を見つめているうちに、その人が誰かに似てることに気がついた。今の今までしゃべっていた女の子に雰囲気がすごく似てる。
ふたりは少年が起きていることに気がついて話を止めた。ユーリエフ博士がマイクを

入れる。
《こっちへ。彼女が少し話したいそうだ》
少年はうなずき、隣のオペレーションルームに入るために一度、廊下に出た。
廊下には博士と同じ金髪の標準体が二人で並んで歩いていた。少年のことをめずらしいものでも見るようにじろじろと見た。
少年はオペレーションルームに入り、部屋の中のモニターや端末機を眺めた。ここに来ると落ち着かない気分だった。いつもは白い服を着た研究者たちがここから自分たちのことをじっと眺めているからだ。
女の人はユリ・ミズラヒ博士と名乗った。
とてもやさしそうな目つきで、少年はふと見たこともない母親のことを思った。そんなことを考えた自分が少し恥ずかしくて、自分にいいわけした。
これはあの子と話をしたせいなんだ、と。あの子のママのことを聞いた、そのせいだ。
女の子と交わした小さな約束を思い出した。
少年はユリ博士のことを見あげて、いった。
「あの子が――あの女の子がいってた。ママを大好きだって。いつでもママを愛してるって、そう伝えてくれって」
ユリ博士の顔にさっと驚きが走った。
少年はそこまでいって、まだいい残したことがあるのに気がついた。

「えっと、去年の誕生日に貝殻の宝石箱をもらったって。そういえばママに通じるからって」
ユリ博士の顔がみるみる赤くなっていった。
ふたりをじっと眺めていたユーリエフ博士が眼鏡を押しあげてつぶやいた。
「ほう、波長があったか」
「サクラと話せたの!?」
少年はその真剣な顔にちょっとどぎまぎしながらうなずいてみせた。
「あなた、名前は?」
「ルベド! あ、じゃなくてU.R.T.V.個体ナンバー666です」
ユリ博士は少年の前にしゃがみ、その手を取って、ぎゅっと握った。
真剣なまなざしが少年の心を捕らえた。
「ルベド、これからも、あの子のことばをわたしに伝えて——お願い」
「はい!」といきおいよく返事した。
ユリ博士のうれしそうな顔を見て、少年もうれしかった。いつものエンセフェロン訓練では、死に物狂いでいい成績を出しても、誰もこんな綺麗な顔で笑わない。ほんとにいいことをしたんだと実感できた。
ユーリエフ博士は無表情で少年の肩をぽんと軽く叩いた。

3

それから幾度となく、赤毛の少年――ルベドは少女の家を訪ねてきた。最初に来たときにいちばん波長が合っていたとかで、おまえのママに頼まれたんだとルベドは少し照れくさそうにいった。
話しているうちにわかったのは、最初のどぎまぎした態度とはうらはらに、彼がちょっと並みの基準からいえば規格外の男の子だということだった。
少女は研究者の両親がいるおかげで医学についての知識も多少はわかり、自分の病気についてもそれなりに理解しているつもりだったが、ルベドの説明はこうだった。
「ユリさんの話によると、外界を認識して内面を表出させるための脳内の回路網が寸断されてるんだって。電位パルスの制御が不安定。その診断にしたがって薬品投与やナノマシンのグリア補助で膜電位を補正しても効果が出ない。だから、おれの固有波長をおまえの脳内に流すことで、外界と内面との接触効率を高めるってわけだ。わかったか？」
当の病人にむかって疾病のことを全部具体的にひけらかしてしまうのは子どもっぽいところもあるようだけど、と少女は思ったが、彼が自分のためになりたいと真剣に考えていることが口調から伝わってきてうれしかった。

自分は、U.R.T.V.というのだと彼はいった。

母親の胎内からではなく、特別な遺伝子操作によって生まれた、昔のことばでいえば試験管ベイビー。生まれだけでなく、育ちまでも徹底的にコントロールされ、デザインされた子どもたちなのだという。最初に会ったアルベドとニグレドのふたりもそんな計画の中で生まれたルベドの兄弟たちだった。

そして、なんとそんな子たちがもう六百六十九人も生まれたらしい！

それを聞いて少女は目を丸くして驚いた。三つ子だと思っていたら、六百六十九人の兄弟だなんて。

「みんなでひとつのところに住んでいるの？」と訊くと、ルベドは少し気まずそうにうつむいてしまった。

彼の話では、その半数以上が生まれる前や、訓練の途中で死んでしまったとか。ルベドの手のひらに赤い文字で彼の番号である〈666〉が刻印されている。アルベドが〈667〉、ニグレドが〈669〉なんだと彼はいう。

「じゃあ、六六八番目の子は？」サクラのことばに、ルベドは肩をすくめた。

「生意気な女、まだ一回ぐらいしか顔を合わせたことがない、シトリンって名前だよ」

「ルベドの仲間って女の子もいるんだ」

「ああ、でも女のU.R.T.V.はうまくいってないみたいだ。あいつを入れても、もう九人しか残ってないって。それをすごく悔しがってたよ。もういいだろ」

それっきりこの話はおしまい。ルベドは不機嫌そうだった。
ある日、ルベドとママは、ピアノによって彼女が外界との接触を増やしていく方法を思いついた。
ママが子ども時代に使っていたピアノがまだ家の中で埃をかぶっていることを思い出したからだ。
少女はその話を聞いてわくわくした。音楽ってどんなものだろう、とずっと考えていたから。いつもではなかったが、ママやパパが、話しかけてくれることばや、読んでくれる本や、聴かせてくれる音楽が意識のほうまで聞こえてくるときもあった。
「ユリさん、ユーリエフ・インスティテュートにある研究棟の一室にこんな大きいグランドピアノを持ち込んだんだぜ。さすがのユーリエフ博士も腹立ちで赤い顔になってたよ」
両手でピアノの大きさを示して、ルベドは笑った。
それから彼女は、毎日、ピアノを弾くことに挑戦するようになった。
少女は、彼が発する固有波をていねいになぞりながら、少しずつ意識を凝らして、決して見えない、感触さえ感じない鍵盤に触れて、辛抱強い練習の成果で、ひと月後にはアメージンググレースをみごとに弾き果(おお)せてみせた。
ルベドはママがそれを聴いて泣いたと伝えた。
「届かない世界から届いたことばなのよ」とママはいったらしい。

彼女には聞こえなかったが、ピアノを弾いているとき、ルベドも曲に合わせてハーモニカを吹いているのだという。

遠くかすかに、彼らはピアノの音を聴く。
耳を澄ましても、もう聞こえず、無人の白い庭には、木の葉がざわめく。
噴水が丸盆を打つ音。
石畳の上を失われた子どもたちの残像が駆けていく。

少年はベンチに座ってふたりにハーモニカを見せびらかした。
「けっこう、うまくなったんだぜ」
ニグレドは少年の目を、からかうようにのぞき込んだ。
「ふうん、ピアノに合わせて練習するんだ」
揺れる木陰がニグレドの顔の上で揺れる。その頬がふっとかすかに緩んだ。
「そんなにあの娘が気になるんなら、ずっと仮想空間にいたらどう？　あの娘も喜ぶと思うよ」
少年の頬がカッと熱くなった。
「そんなんじゃねえって！」
ニグレドの背中からアルベドが白い頭を突き出した。その表情は不安に曇っていた。

「最近のルベド、集中力が落ちてる。ウ・ドゥ・シミュレーターの模擬試験が控えてるのに、おかしいよ」
「そ、そんくらいおれだってわかってるさ。連結始点(リンクマスター)としての任務はまっとうする」
アルベドの紫色の瞳が潤み、白目が充血して赤みがかった。顔が歪み、唇がわななく。
「ルベドを信じていいんだよね。ルベドがいれば、ウ・ドゥなんて怖くないいんだよね」
「あたりまえだろ！　しゃんとしろ。おまえだってU.R.T.V.としてはケタ外れの波動を持つ変異体なんだから」
ルベドはニグレドと顔を見あわせて、あきれ顔になった。
アルベドは万事がこんな調子でいまひとつしまりがなかった。自分かニグレドがいなければひとりで何もできない。
標準体たちとの関係もおかしく、ルベドやニグレドといるときは強気で相手をののしりさえするが、ひとりでいるときには口さえ利けないようなことも多かった。
ユーリエフ・インスティテュートの大多数を占める標準体たちにとっては、彼らは不穏なイレギュラーという印象を与えるらしい。
確かに、標準体の中には彼らのように激しく感情を見せるものはいなかったし、髪の色もみんなくすんだ金髪で同じだった。彼らにとっては、変異体と呼ばれるこの自分たちは、姿も中身も自分たち標準体とは違う異物なのだ。
一方で、アルベドにいわせると、標準体のほうこそが、同じ顔、同じ性格、能力が低

いところも同じときて、要するに究極の没個性群体としての怪物なのだった。
こうした状況はリーダーを務めるルベドにとっては頭の痛い問題だった。
もともと標準体たちは感情が薄いぶん憎悪の感情も少ないから、アルベドさえ態度を軟化すれば、すべてはまるくおさまるんじゃないかと思う。
しかし、自分の能力に自信のないアルベドは、他人の能力の稀薄に対しては苛烈で執拗な性格だった。自分といつも冷静なニグレドがしっかりと抑えていなければ何か事件を起こすんじゃないか。
ルベドはアルベドがこっそり拳銃を隠し持っていることを知っていた。
少し前のことになるが、アルベドはこっそりとルベドを手招き、自分の小さなロッカーの中から宝物でも見せるようにちらりとその銀色の銃身を見せたのだ。
——研究員のところから盗んできたんだ。ホラ、あのクズども、ぼくたちを憎んでいるからさ。怖くはないけど、何されるかわからないもんね。
ルベドの咎めるような視線を受けて、アルベドは少し泣き顔になり唇を曲げた。
——念のためだよ。ルベドが欲しいならあげるからさ。
むろん、ルベドはサクラにはこんなつまらないことは話していない。こんなことよりも、もっと話したいことがたくさんあった。
サクラに会ってからルベドの暮らしぶりは自分でも気がつかないうちに変わっていた。
以前には気にも止めなかった樹木や土から漂う匂いや、風の起こすささいな物音など

に気づくようになった。サクラの代わりにそういうものを見つけてやろうと無意識に探し回っていた。どうしても見つからないときは、勝手に想像でつけ加えることまでした。そんなわけで、集中力が散漫になっているというアルベドの指摘は、ルベドの痛いところを突いていた。

4

彼に会ってから、少女の世界は変わったが、それにともなって彼女自身にも変化が生じた。

櫛(くし)で丁寧に髪を梳(と)かすようになったし、鏡で笑い顔の練習もした。せっかくやって来てくれる彼にいい気持ちでいて欲しいと思った。

変化のないこの世界に、彼は外の季節を手籠(てかご)いっぱいにしてやって来た。

ユーリエフ・インスティテュートという鳥籠の中で感じられるせいいっぱいの季節のうつろいを、彼は彼女にたくさん聞かせた。

ルベドがでたらめをいっているときがあるのに彼女は気がついていた。

彼は嗅(か)いでもいないジャスミンの香を告げ、聞いてもいないハンミョウの羽音を彼女に伝えた。それでもよかった。少年のほうでも気がつかれていることに気づいていた。

互いに閉ざされた生活空間に暮らすふたりは、夢の中のコミュニケーションで世界の

イミテーションを造りあげた。
いつのまにかこの仮想空間の風景を眺めるときも、外界と対応させて考えるようになっていた。そして、その世界のことを教えてくるルベドのことを、まるでひと呼吸ごとに思い出すようになった。とても温かい気持ちだった。どこからか絶えず押し寄せて少女を捕まえようとする暗雲をふせいでくれるやさしい防風林だった。
今は、この世界に流れる午後の時間も終わって、地平に夕陽が射していた。
白い家の軒先に吊されたブランコのベンチにふたりで座って夕陽を眺めた。
ふたりは橙色の光で染められていた。手入れの必要もないニセモノの芝生がさわさわと心地よい音で鳴っていた。
「――パパも治療の研究をしてくれているみたい。とても人間に近いレアリエンを造って、わたしの感覚を常にインターリンクできるようにするんだって。それが成功すればもうママを悲しませずにすむんだ」
「ふうん、いい両親だな、サクラんちは」
「ルベドは？　ルベドのお父さんはユーリエフ博士でしょ。お母さんはいないの？」
ルベドは両腕を頭に回した。キッとベンチを吊す鎖が鳴った。
「いるさ。遺伝的な意味では。傷ひとつない染色体を持った健康な卵子。おれたちが知っているのはそれだけ」
ルベドの顔が年相応の子どものものへと変わった。

「探さないの？　会いたくない？」
「会ってどうするんだよ——貴女は遺伝子操作された生体兵器の生みの親ですっていうのか？」
ルベドはかすれた小声でそういうと、ベンチの手すりに両腕を乗せて、それに力なく顔を埋(うず)めた。
こんなこと話さなければよかったのかな、と少女は少し後悔した。
こんなにたくさんの世界を与えてくれたこの男の子がこんなふうにやるせない気持ちを抱えているのを知ってつらかった。
少女は彼の肩にそっと手を置き、その体温を感じた。
こんなにやわらかくて、くよくよしてる兵器なんているわけないじゃない。
そう笑い飛ばしてあげたくなった。代わりに彼女はいった。
「そんないい方しないで。ルベドは素敵な男の子だよ。兵器なんかじゃない」
「違うもんか。おれたちがインスティテュートの外に出られるのは、戦争が起きるときだけだ」
ルベドは早口で言い募るとあとは黙り込んで、軒下に伸びた影をじっと見つめていた。
少女はその横顔に目をやり、自分とこの少年はとてもよく似ているといまさら思った。
でもいつか——君ならきっと出ていける。君は思い描いたイメージを外の世界に実現できる男の子だから。

そんなことを考えて、ふと今のうちに話さなくてはならないことを思い出した。
「あのね、ルベド。ひとつお願いがあるんだけど」
それは最近、心に起こったある予感だった。
「もうすぐ妹が生まれるの。お母さんから生まれるんじゃなくて、ちょっと違う感じの妹なんだけど」
突然の話のなりゆきに、きょとんとなったルベドに少女は笑いかけた。
「その妹とママを――わたしの代わりに守って欲しいの」
ルベドは話がよくわからずにしばらく目をしばたたかせていた。のどを鳴らし、つばといっしょに意味を呑み込むと、夕陽を受けるその顔が誇らしげに輝いた。
「いいよ。おまえの妹なら、おれの妹だと思って面倒見るよ」
ルベドの笑顔を見て、様々な思いが胸に込みあげた。彼女もなぜか少し誇らしい気持ちになって少年の顔をのぞき込んだ。
「約束だよ?」
「おう、まかしとけ――」
すべてをいわせず、少女は夕陽の色に染まったルベドの頬にそっと唇をつけた。
「おやすみルベド。また明日ね」
少女はそう彼にささやくと、家の中に駆け込んだ。
外でブランコの鎖がひどい騒音を鳴らした。

揺籃の日は蝕まれる。

少年はいつもサクラと会うときに使うU.M.N.連結シミュレーションルームにいた。しかし、今日はひとりではない。ありがたいことにほかのたくさんの標準体たちといっしょだ。陰気で無口で無駄口ひとつ叩かない。整然と縦横に列を作り、一糸の乱れもない。
ユーリエフ博士はいつもの超然としたまなざしで一同を見つめている。
となりにはサクラの母親ユリ・ミズラヒ博士の姿もあった。ユリさんは、今日のミッションの下準備に追われ、クマを目の下に浮かばせて少しやつれた様子だった。
列の途中にルベド、アルベド、ニグレドの三人は並んでいた。
ルベドの手のひらは汗で湿っていた。それなりの覚悟は決めたつもりだったが、ここに来て気持ちが落ち着かなかった。
まわりを見ると部屋に集まった数十人の標準体はすべて同じ顔つき、くすんだ金髪の少年たちだ。これから彼らを指揮してリンクを形成しなければならない。
ルベドの隣でアルベドがささやいた。
「ぼく、あいつら嫌いだ」
「しっ——」

ニグレドがたしなめるようにアルベドを見据えた。
「だってさ、見なよ。自分の意志ってものがなくて、全員でひとかたまりの自我なんだぜ。なんで665番までは、ああなのかな」
ルベドはかぶりを振った。
「標準体たちは反波動が弱いんだ――でも、そうやって生まれたのは彼らのせいじゃない」
「うー。やだやだ」アルベドはおおげさに身震いのジェスチャーをしてみせる。
マイクを通したユーリエフ博士の声が聞こえた。
《これは演習ではない。睡眠状態の被験者――その深層意識へU.M.N.経由でダイブを行い、知覚障害を改善する。対ウ・ドゥ訓練としても、得るものが大きいミッションだ》
ユリが少し硬い声で補足する。
《降下目標は白い砂浜のある海。この海は被験者による意識障壁下の主観イメージです。そのイメージの中に潜む、神経伝達を阻害しているものを除去していただきたいのです》
「海!」ルベドはもろもろの逡巡を忘れて思わず声をあげた。
「海なんて、見たことがない」アルベドが興奮して叫んだ。
「そうだね――いつか、行こう」ニグレドは穏やかにいった。

突然、海のことを想像することで緩みかけた思念に、張りつめた低波長の悪意が差し込んだ。ルベドはぎょっとして背後の標準体を見た。
彼は表情もなくじっとルベドのことを見つめていた。
すべての標準体たちがいっせいにルベドのことを見ていた。
微弱な精神の波が合わさって、繰り返し、引いては打ち寄せる。
標準体はもともと感情が稀薄――抑制された憎悪と侮蔑の波動が流れ込んでくる。

《どうして――。
どうして君がリーダーなの。
変異体のくせに。
怪物のくせして――》

ルベドは動揺し、小声で会話を続けるユーリエフ博士とユリとを見た。ふたりは気がついていない様子だ。
念話の声をとらえたアルベドの顔が蒼白になった。
「黙れ――クズども」唇を泡で濡らす。
「ルベドをバカにするな。おまえたちとはパワーがけた違いなんだよ」
怒りで小刻みに震えるアルベドの肩をニグレドが押さえた。

ルベドの心はざわめいていた――ここがサクラの心の中。
彼女と面会する牧歌的な雰囲気の一軒家ももちろんその一部だったが、今歩いている森はその核心に迫るものだ。
確かに空間のすみずみにサクラの呼吸を感じるような気がした。下ばえや木々、光る風、土の中に、あたりいっぱいに彼女の記号が隠れ潜んでいるようだった。それは彼自身がサクラのためにインスティテュートの中から探し出してきた季節にどことなく似通っていた。
太陽は強く照りつける。標準体たちが整然と隊列を作って前進する。同じ仕草で、土を蹴り、新芽をつぶして、枝を折って、彼らは行進する。こんなに暑いのにどこにもだれた様子もない。
サクラと自分が造りあげたコミュニケーションの世界に土足で踏み込まれているようで息苦しかった。腹立たしさをこらえていた。これはサクラのために行われているミッションなんだからと自分を納得させた。
これがうまくいって、あいつが外の世界に帰って来られたら、あいつと、それからあのときあいつの話してた妹といっしょに、ホンモノの海にだって行くことができる。
「――だって標準体どもがルベドを。あいつら、できそこないのくせに」

「ぼくらがしっかりとルベドを信頼していればいいんだ。連鎖（リング）が完成すれば任務に支障はないんだから」
ルベドは横目でふたりの仲間を見やる。
最近、彼らの様子はどこか以前と変わってしまったように感じる。
いや、むしろ変わったのは自分のほうだ。サクラに触れているうちに、以前のように彼らと接することができなくなってしまった。
今までは怖いものなんてなかった。
でも、今は死ぬのが怖い。そして、心を失ってしまうのが何より怖かった。
ルベドは再び標準体たちを眺め、その存在の果てにこの自己が確実に結びついているのを感じた。手のひらの赤い刻印を睨むように見た。
U.R.T.V.ナンバー〈666〉。
自分に繋がる六百六十五人の意志無き同類たちの犠牲の果てに、自分という存在は立っている。「今のぼくを造ってくれた尊い犠牲たち」なんてなま優しいものではない。
ルベドの精神に巣くう攻撃性を形作った実験材料の死屍累々（ししるいるい）の結果だ。
明るい森の中に潜むサクラの記号たちにむかって、ルベドは救いを求めて無意味な視線を走らせた。小川が光を湛え、樹木の緑が揺れる。祈りは応えを得られずに消える。
真夏の森。ルベドが彼女に伝えた夏の世界。三十人以上にも及ぶディミトリ・ユーリエフの子らを、拒むでもなく、歓迎するでもなく、ただその虚構のざわめきに揺れてい

た。

しだいに木々が少なくなり、ふいに風景が開けた。

標準体たちの列がいっせいに足を止めた。

風車の丘――丘陵には白砂の小道が敷かれ、風車の近くをゆったりと曲がっていた。

道は丘のむこうまで続いていた。丘にさえぎられて向こう側は見えなかった。

風に乗って波の音が聞こえた。海が近い。おそらくこの丘を越えた先だろう。

標準体たちは隊列を組み直すと前進を再開した。白い道に三列になった彼らが蟻の行列のように進んでいく。

ルベドはいつのまにか前方の空にかかっている暗雲に気がついた。

とぐろを巻く暗雲が遠い空からしだいに近づいてきた。

エンセフェロン空間が振動を繰り返し、肌にひりつくような感触を覚えた。

おぞましい何かがじわじわと自分たちを取りまこうとしていた。ルベドは即座に隊列に警告を飛ばそうとして意識を凝らした。

「危ないっ！　うしろっ！」

突然、ニグレドに突き飛ばされた。

ルベドはつんのめってたたらを踏んで振り返った。

数瞬前まで自分のいた場所に形を為(な)さない黒い物質が蠢(うごめ)いていた。ニグレドが腕を振って、エネルギーの塊をぶつけると、それは哀(かな)しげに瞬(またた)いてあっけなく消えた。

ルベドはすばやく頭をめぐらし、周囲を確認した。無数の黒いものたちが忽然と姿をあらわしていた。ぎこちない動きでルベドたちを捕まえようとした。
「何だよ、これ。しつこいな！」
アルベドは苛立ちを見せながらその物質を次々と薙(な)ぎ払った。
身近に迫った奇妙な物質群をあらかた追い払うと、ルベドは空を見あげ、暗雲の様子をうかがった。さっきよりも確実に大きくなっている。こうして改めて眺めると、雲というより空を侵蝕する液状の奇怪な染みに見えた。
ルベドは震える唇を噛み、いいしれぬ嫌な予感を頭の奥にしまった。
リーダーが動揺するわけにはいかない。
「標準体は？　精神連鎖(リング)を張って一気に叩くぞ！」
目をつむり、意識を凝らし、波長を整えて、波がやってくるのを待つ。とたんに引きつった恐怖の思考が脳内に流れ込んできた。
《波動が――。
波動が来る》
「おい、何をいって――」
「ルベド、あれ！」ニグレドの叫びにルベドは目を見開いた。
ニグレドの小刻みに震える指先が丘に続く道を指していた。
整然と列を作っていたU.R.T.V.標準体たちが、今はちりぢりになって、空を見あ

げていた。その表情は遠目に見てもすさまじい恐怖に引きつっていた。
標準体たちがこれほどの感情を示すのをルベドははじめて目撃した。
「いやだああっ」「わあああああ！」
彼らは口々に悲痛な悲鳴をあげて地面をのたうち回りはじめた。標準体の小さな体のあらゆる場所から深紫の物質が湧き出した。白い道に落ちたインクの染みさながらに彼らの輪郭は融けて固体としての特性を失いつつあった。
アルベドが震える手でルベドの右袖を摑んだ。
「やつら、汚染されてる？　ウ・ドゥ・シミュレーター内でもないのに！」
標準体たちの姿が次々に変貌していく。腕が異様に長くなり、頭は細長く、足はバッタのようにねじ曲がる。人間とは似ても似つかない化け物の姿だった。道を離れて丘に逃げた者や森に逃げ込もうとする者もいる。
今さらリンクを張っても収拾がつかない。しかも、さっき頭に混入してきた彼らの恐怖がまだ心に異様な後味を残していた。あんなものをもう感じたくはない。頭蓋の内側を黒い液体がたぷたぷ揺れるような感じ。
ニグレドがルベドの左袖を引いた。
「どうする。ルベド」
「ど、どうするって――」
ルベドは困惑して左右のふたりを見やり、ついで空を見あげた。

博士たちはオペレーションルームでこの様子を見ているんじゃないのか。どうしてエンセフェロンダイブを緊急停止してくれないんだ。見えていないのか。あの空を覆う黒い物質のせいなのか？　死にたくない。あんなふうになりたくない。

化け物たちはきょろきょろと頭を動かし、まだ異形化していない三人を見つけて首を傾げた。彼らの鳥のような鋭い鳴き声があたりに木霊した。

それから、いっせいにひたひたとこちらにむかって駆けてきた。

ルベドは悲鳴をあげた。

「逃げよう。森の中に逃げ込むんだ！」

「間に合わない、ルベド。迎え撃つんだ」

ニグレドはかぶりを振って、目をつむった。意識を集中させて力を高めている。

ルベドは唾を呑み込んで、迫ってくる化け物どもを見つめた。

——あれと闘う？　だってあれは。

甲高い雄叫びをあげてアルベドが身構えた。

彼らにむかってきた汚染体は六体。

ニグレド、アルベドのふたりはほぼ同時に飛び出した。

それに応えるように汚染体も空中に跳躍し、手に生えた鋭い爪をふたりにむかって振るう。ふたりの手からエネルギー波が放たれ、汚染体に激突し、空中に光をぶちまけた。

地に落ちた汚染体は即座に跳ねあがって、黒い閃光となってふたりに躍りかかる。

ニグレドは身をひねって地面に転がり、なんとかそれを躱した。半身を起こし、片手をあげて空中にひねると、襲いかかろうとした汚染体が内側から爆散する。
アルベドは唸り声をあげて刃物のように尖らせたエネルギー波を横殴りに振るった。
両断された汚染体が体内に詰まった黒い物質をまき散らし、けたたましい悲鳴をあげる。
「おまえら――」
いいかけたルベドに汚染体の一体が襲いかかった。
かぎ爪の生えた腕が迫る。
ルベドはあわててそれを躱そうと身をそらしたが間に合わなかった。
胸に灼熱の痛みが走り、ルベドは激痛にうめいた。温かいものが服を濡らした。破れた布が胸元にぶら下がった。
エンセフェロン世界での負傷は、脳内に作用し、確実に生身の細胞にもなんらかの影響を残す。激痛が神経を灼く。
汚染体は地に降り立ち、膝をため、ルベドにむかって再び跳躍する。
ルベドはその両腕を摑み、汚染体の額に自分の額を擦りつけ、咆哮した。
強烈な精神波動を相手の中に直接送り込む。
汚染体は悲鳴をあげて、地面に転がった。
ルベドは荒い呼吸を整えながら周囲を確認した。

他の汚染体はすべてニグレドとアルベドが駆逐したようで、すでに動いているものはいなかった。空を侵蝕した黒い染みのような物質もどこかにいなくなっていた。
朦朧とする意識を振り絞って丘に続く白い道を歩いた。
足が震えて、斬られた胸が痛んだが、一心に登りきった。
丘の上の断崖から海と砂浜が見えた。初めて見る海に心は高ぶらなかった。
ルベドは精神連結し、ニグレドとアルベドと、それに生き残ってちりぢりになった標準体たちを丘の上に集めた。
ここにいればオペレーションルームでもこちらを捕捉しやすいだろう。
ここまで辿り着いたが、こんな状態ではもうこれ以上治療を続けるのが不可能なのは明らかだった。もし、もう一度あんなことになれば全滅は避けられないだろう。
まだミッション中止の指令は来ない。むこうでも何かが起きたのは確実だ。
しかし、今は連絡が来るのを待つしかなかった。
遥かな海——寄せては返す波を見ているうちにアルベドの怒声が耳に入った。
「ルベドに手を出すなといったろ。ぼくら変異体がヘンなんじゃない。おまえたちが役立たずなんだよッ！」
アルベドは興奮して倒れた標準体の脇腹に蹴りを入れている。
無抵抗に倒れたままの標準体の上に、今度は馬乗りになって拳を叩き入れる。
標準体の首がその殴打を受けるたびに骨でも折れてるかのようにぐらぐら左右に揺れ

た。返り血がアルベドの顔に転々と付着した。アルベドは呼吸をしだいに荒げていく。
「やめろ。殺す気か」ルベドはアルベドの腕を摑んだ。
「ルベド——」アルベドは彼の顔を見あげた。その頰が二、三度チックを起こした。
「なんでそんな目で見るのさ。ルベド？」

5

しばらく、ルベドにとって憂鬱（ゆううつ）な日々が続いた。
エンセフェロンからの救援後、医務室で、ユリはルベドにいった。
——失敗したのは、あなたのせいではないし、これで終わりというわけでもない。今は体と心を癒すことを第一に考えて。サクラもきっと元気なルベドを待ってるから。
ユリの顔には焦燥の色が濃かった。
誰かのなぐさめが必要なのはむしろ彼女のほうだったろう。
それから、ユリは救援が遅れたことを率直に謝った。突如としてエンセフェロン空間が絶縁し、しばらく復旧できなかったのだという。
標準体たちが変貌したことも含め原因は不明。サクラの治療については無期延期。
心身ともに傷ついたルベドは、医務室に入院してナノ治療を受けることになった。となりの集中治療室ではアルベドが叩きのめした標準体６２３が昏睡状態になっていた。

ニグレドは毎日見舞いに来たが、アルベドはやって来なかった。

ニグレドはルベドの枕元に椅子をおいて、何をするでもなくじっと考え事をしていた。

ヒマな医療室のベッドで、ルベドもあてどもなくいろいろなことを考えた。

——なぜ、サクラの心の中にあんなものが棲んでいるのか。

——あの黒いモノはいったいなんなのか。

——今サクラはどうなっているのか、これからどうなるのか。

退院となったが、病室を出る際にサクラとの接触がしばらく禁じられたことを伝えられた。それはそれでよかった。

今はとても暗い気持ちで、彼女に会ってもうまく話せる自信がない。いつかみたいに慰めてもらうなんて気もなかった。力づけなきゃいけないのはこっちなんだから。

医務室から出ると入院のあいだじゅう気がかりだったアルベドを探した。

あの寂しがり屋が見舞いにも来ないなんて、そうとう傷ついたに決まってる。

アルベドには悪いことをしたと思った。

逆上したアルベドが、あの標準体623にしでかしたことは確かによくないことだ。

623がルベドたちを襲ったわけではないし、何よりあの変貌した者たちにしても、べつに落ち度があったわけではない。問われるとしたら、まずリーダーであるこの自分の危機判断の甘さを責めるべきだった。

それでもあのとき、アルベドは彼のために怒ったのだ。それを頭ごなしに叱りつけた

ことで、アルベドはほんとうに孤立してしまった。
とにかく安定を欠くアルベドのことだ。ひとりにしておくわけにはいかない。何より
おれたちはもとはひとつの生き物だったんだから。
ルベドは後悔と面倒の入り交じった溜息を吐いて、樹木の幹を見あげた。
ひさしぶりの外の空気は新鮮だった。
入院は一週間ほどだったが、そのあいだに夏が去り、秋が来ていた。
インスティテュート内の常緑樹は葉を落とすことはなかったが、それでもその葉は夏
のあいだの旺盛な緑からかすかに枯れたような色へと微妙に色合いを変化させていた。
芝生の土からは熟したような匂いがした。
様々な命がその絶頂から徐々に滑り落ちはじめていた。
「ルベド――」
振り返るとニグレドが立っていた。
「アルベドを見つけたよ。裏にいる」
ニグレドは親指で背後を示した。
ルベドはうなずき、連れ立って裏手にむかった。
インスティテュート主棟の裏手には煉瓦塀に囲まれた小さな裏庭がある。剥き出しの
土と生い茂った樹木のせいで、昼間でも薄暗い鬱蒼とした雰囲気があった。
この施設のなかで唯一といっていいホンモノの自然が観察できる場所で、運がよけれ

ば昆虫も発見できる。
　ルベドたちはもっと小さい頃はそこで遊ぶことが多かった。
　アルベドはこの裏庭にはいなかった。裏庭を出てすぐのところにある碑文の傍で、ぼっと立ち尽くしていた。
　ルベドたちは無言で近寄り、アルベドを見つめた。どう声をかけていいものか迷っているうちに先に口を開いたのは白髪の少年のほうだった。
「なんだよ」
　その口調が癇に障った。
「何考えてたんだ。ナンバー623は重傷だぞ」
　振り返ったアルベドは妙に明るい笑顔だった。
「なんだぁ。そんなこと」
　ニグレドがあきれたふうに腕を組んだ。
「なんだってことはないだろ。標準体がぼくたちに不信感を持つようになったら、やりづらくなるのはルベドなんだぜ」
「心配する必要ないよ。あんな怪我すぐ再生すればいいいんだ」
　アルベドは無邪気な微笑を浮かべる。
「再生？　おまえ、何いって――」
「何って、こうだよ」

アルベドの笑みが三日月形に広がった。
いつのまにかポケットから取り出した小さな拳銃を無造作に自分のこめかみにあてる。
引き金を引く。
風船が弾けたようにアルベドの頭部の大半が吹き飛んだ。
血と脳漿が飛び散る。
「うわあああッ!」
ルベドとニグレドは絶叫し、あとずさりして、尻餅をついた。
ルベドは愕然として頭の失せた胴体を見あげた。
弾け飛んだはずのアルベドの頭部は元どおりになっていた。
「ほらね」
アルベドは無邪気に笑う。
「馬鹿――」
起きあがりざまに、アルベドに駆け寄って夢中でその頬を張った。
――くそったれ。なんてもの見せやがる。てっきり死んじまったと思ったじゃないか。
「二度とそんな真似するな。死んだら、死んだら二度と生き返らないんだぞっ!」
ルベドの声は震えた。
アルベドの顔が戸惑いを浮かべた。何をいわれたのかわからないというふうに首を振って、それからハッとしてふたりの顔を交互に見た。

「そんな、まさか――」おそるおそる訊いた。
「ルベドたちは再生しないの？」
「あたりまえだ」
ルベドはそっぽをむいて吐き捨てた。
「それは君だけの特殊能力なんだよ」
ニグレドがそっとつけくわえた。
アルベドは目を見開いた。手から拳銃が滑り落ちた。両手で頬を触った。
「ぼくだけ――」アルベドの顔は動揺と恐怖に凍りついていた。
「ふたりともぼくを残して――死ぬの？」
ルベドは慄然として悟った。アルベドは見舞いに来なかったわけじゃない。ただルベドが怪我で入院しているということが理解できなかっただけ。
アルベドは鼻をすすって、泣きはじめた。
「ルベド、おいてっちゃやだぁ」
アルベドはルベドの胸にすがりついて号泣した。いつまでも泣き続けた。

＊

ユーリエフ・インスティテュートの裏庭に彼らは集う。
いちばん大きな樹の根元の土を白い髪の少年が掘っている。

「彼は何をしているの」シオンがいった。
「わかんねえ」Jr.は首を振った。「だけどあの日、自分は死ねないと知った日から、アルベドはどことなく変わっていったんだ」
アルベドの残像は一心不乱に土を掘り続けている。
彼のまわりを標準体たちが茫洋とした表情で取りまき、その様子を観察している。
「俺たちにはわからなかった」
白髪の少年は口を動かし何かをしゃべり続けている。聞こえない音で。
「死ねない体を持つというのはどんな気持ちなのか。わかりようがなかった」
「死は魂の休息。そういったのは誰だったか、な。肉体は死なず、精神の負う恐怖だけを積み重ねてゆくとしたら、もはや世界は永遠の牢獄でしかない」ジギーがいった。
一瞬、KOS-MOSの目にほんの一瞬、感情の兆しがかすめて消えた。
「おれとアルベドはもとはひとつだった」Jr.は土を掘る少年を見つめる。
「オリジナルの受精卵が同じだから？」とシオン。
「いいや。文字通り受精後二十八週まで背中でくっついていた。この辺にあいつの心臓がくっついててさ」
「えっ？」
〈稀に不完全な分裂によって、臓器の一部を共有する双生児が存在します〉
KOS-MOSが告げた。

「その通り。基本的に細胞の再生を止めたり、促したり、おれとあいつの特殊能力は同じ原理で成り立ってる。不老と不死ってぐあいに、切り離されたことでその方向性は両極へむかったがな。だからこそおれはあいつを見放しちゃいけなかったんだ」
「Jr.君。もう一度歩み寄れないのかな。あの人と」
「おれもあいつもへそまがりだからな」Jr.は視線を落とす。
アルベドは何かひとりごとをいいながら土を掘り返し続けている。
決してやめることはない。
それは彼の兄弟たちのための墓穴だから。
モモは空虚な様子で立ち尽くしていた。ほとんどの刺激に無反応で何も目に入っていない。ガラスのような目の表面に土を掘るアルベドの寂しげな背中が映っていた。

＊

記憶ははっきりとしていない。あまりにあいまいな風景だったので、少年はあとからそれが夢だったんじゃないかと思うときもあった。サクラを失ったことを実感できず、その思い出を封じるために造りあげた虚構のイメージ。
そのとき、ルベドはひさしぶりの上機嫌だった。
隣には彼にとってとても大切なあの少女の姿があった。
サクラの治療が再開された。今度は慣れ親しんだルベドとサクラのふたりだけで海へ

むかう。
　サクラ自身が克服すべき対象を認識することがまず重要だというユーリエフ博士からの提案だった。一週間の準備のあいだじゅうルベドはひさしぶりに会う少女と何を話そうかとずっと考えていた。
　エンセフェロン内の森は真冬で雪が降り積もっていた。ひどい寒さだったが、それでも、ルベドの心は浮き立っていた。
　ふたりは歯をカチカチ鳴らしながら、笑い声をあげて雪を踏んで歩いた。そうしているうちにしだいに体も温まって、寒さは気にならなくなった。
　霜を湛えた木々や下ばえ、粉を吹いたような枯れ木、静謐(せいひつ)を湛えた美しい森をルベドとサクラは騒がしく歩いた。
　凍りついた小川を渡ろうとして、滑って転んで真っ白になったルベドをサクラは指さして笑った。
　憮然としたルベドに雪玉を投げつけられてサクラの焦げ茶色の髪は真っ白になった。あとから考えれば、このときのふたりは少々はしゃぎすぎだった。不安を隠すために興奮を擬態したのかもしれない。
　森を抜けるといつか見た風車が見えた。
　ルベドの胸にあの恐怖感がかすかに蘇った。
　しかし、今日は丘の上に例の暗雲は見えなかった。風が吹き、白い世界に潮の匂いが

香った。ルベドは興奮して叫んだ。
「サクラ。今日は何もいない。走ればすぐに海だ」
サクラの手を引き、雪を蹴ってその丘にむかって夢中で走った。
しかし、海の見える丘の頂上に登ったときに、ふたりの繋いだ手が切れた。サクラは立ち止まってしまった。
「なんでだよ。行こう。病気を治して、おれと本物の海へ行こう」
ルベドはもどかしそうに振り向いて、怪訝な顔になった。
サクラの顔に、ルベドがはじめて目にする——恐怖の表情があった。
ルベドはサクラの視線を追って、自分の足元を眺めた。足から生えた影が自分の動きと関係なしに激しくのたうっていた。その形の原型は正確にはわからないが、どう見ても人間のものではない。
「ルベド——それ——」
サクラの声は震えていた。サクラは後ずさった。代わりに蠢く影が愛(いと)おしむようにルベドを招いた。
《なんだァ。ルベドも、ルベドもぼくの仲間なんじゃないか。ルベドも化け物だったたんじゃないかァ。そうだよね。もとはぼくとひとつだったんだもんね。ぼくが化け物なら、ルベドも化け物に決まってるじゃないかァ。うれしい。うれしいよォ》

「違う、これは。おれの影じゃない！」ルベドはかぶりを振って叫んだ。
「ルベド、怒らないで。落ち着いて、お願い」サクラが叫ぶ。
ルベドは腕を振りまわして影を追い払った。
「おれは怪物じゃァないッ！」
少年は何かにむかって怒りをこめて叫ぶ。記憶と現実の境目があいまいになった。
そして、少年(ルベド)はふいにJr.になる。頭の中に声が聞こえた。
《今も右胸に鼓動を感じるか。おまえの右背に埋まっていたおれの心臓の鼓動を》
Jr.は狂おしく周りを見回した。――ここはどこだ。
右胸を摑んでうめいた。
――おれは誰なんだ。
「これは罠だよ、ルベド！」どこかでサクラが叫んだ。
「これは罠です、Jr.さん！」どこかでモモが叫んでいた。
しかし、それはJr.の心まで届かなかった。立ちこめるウ・ドゥの気配に体が自動的に反応している。神経にめまぐるしく電流が走りまわり、Jr.の体が戦闘状態に移行していく。
《緊急事態(アラート)、赤い竜(レッドドラゴン)ＭＯＤＥ。かわいい姿だな、ルベド。ウ・ドゥを感じるか？　おれがおまえのためにわざわざ混成したアレの余波だぜ？》

アルベドが彼方より哄笑した。
Jr.は両手を広げ、彼方にむかって荒々しく咆哮した。

6

視界が真紅に燃えあがっていた。
絶対の破壊衝動が自己と他者の境界を灼いて、この世のすべてを壊せと猛(たけ)り狂った。
自分がおそらくどこかの時点で、罠にはまったのだと気がついた。
手の込んだ罠(トラップ)に誘い込んだ敵も、それにみすみすはまり込んで心を失いつつあるおのれも、どちらも激しい憎悪の対象だった。
記憶が錯乱し、今、自分が果たしてどの日々にいるのか正確に認識できなくなる。
おれはルベドなのか。Jr.なのか。
サクラの病気を治しに来たのか。モモの意識を取り戻しに来たのか。
全部ブッ壊セ――熱を帯びた雄叫びが喉を灼いた。
海面から溺(おぼ)れた者の手が突き出すように、混然とする意識の濁流の中で、かろうじて仲間たちの呼ぶ声が聞こえた。
《主任、エンセフェロンフィールド構造体が急速な崩壊をはじめています。システムの異常ではなく、モモちゃん側に依然トラップが残存していた可能性が――》

「やっぱりまだ仕掛けてあったのね。あの男、アルベドは、わたしたちのエンセフェロンダイブの可能性も見越していたというの⁉」

「あの男もサクラ・ミズラヒの知己だったのなら、ここでJr.の暴走がはじまるのも予期していたのかもしれん。エンセフェロン内部にJr.を降ろすのも予定のうちだったのか！」

《エンセフェロンへのバイパス侵入――⁉》

Jr.の喉からほとばしる獣の咆哮が急に静まった。

彼は周囲を見わたした。サクラの姿は消えていた。

長い記憶の果てに辿り着いた丘に彼と仲間たちだけが立ち尽くしていた。彼方に見える灰色の海で波はその動きを止めていた。海風もない真空のごとき静寂の世界だった。

仮想世界の空一面にひびが入った。空の天気が晴天から灰色の空へとめまぐるしく変化する。

雪がひとひら――。

空間に亀裂が走った。その奥に濡れた闇の内臓がかいま見える。その闇を掻き分けて、ひとりの男が姿をあらわす。ボサボサの白髪、狂気を湛えた紫色の瞳。

アルベドはちらと無表情のモモに視線をくれた。ジギーがモモをかばってふたりの間に立ちはだかる。アルベドは笑みを浮かべてつぶやいた。

〝おまえの舌を上顎にへばりつけよう。そうすれば口が利けなくなり、彼らをいましめ

ることもできない。彼らは反逆の民なのだ〟
うつむいてくっくっと笑った。
「あわれなペシェ——樹木で揺れる生け贄の人形。おまえにとっては心を殺しているその瞬間だけが唯一安らげる時間なのだ」
それから、顔をあげて、無造作にJr.に近づいてきた。
Jr.は自分の胸ぐらを摑み呼吸を整えた。
今、一歩でも動いたら、心のたがが外れてしまいそうだ。そうなれば、自分はただの兵器に舞い戻ってしまう。暴発するイマジネーションを残り少ない理性で凝結させて、このアルベドの罠から逃れなくてはいけない。
いったいどこで地雷を踏んだのだろうか。何がまちがっていた。あの日々を辿るうちに、おれはいつのまにか、もしかしたら違う結末を——サクラやモモ、ニグレドやアルベドたちといっしょに輝やく砂浜にたたずむ、そんな美しいエンドロールでも期待していたというのか。
アルベドは悠々とJr.の髪を搔きむしり、鼻をひくつかせて、あざけりを浮かべた。
「いい匂いだ、ルベド。怒りが全身を駆けめぐって気化する匂い。ノルアドレナリン過剰なんじゃないか。ン？」
Jr.の臓腑で激しい怒りが煮えたぎる。屈辱と憎悪に歯ぎしりする。赤い思念波がその体からほとばしった。

「Jr.！」ジギーが叫んだ。
「Jr.君、落ち着いて。兄弟とこじれたままは哀しいんでしょう？」
「こじれる？」
アルベドはシオンのことばを受けて、大声で笑った。
「おれとルベドはこれでも、とっても仲がいいんだよ。お嬢さん」
ひたりとJr.の背中になま暖かい手のひらが添えられた。衝撃が体を引き裂いた。
Jr.は自分の背を貫いて右胸から突き出したアルベドの腕を茫然として眺めた。手のひらはそこに咲いた花のように開いては閉じた。
「ホラな、こうすりゃ、いつもいっしょだ。見てくれ、睦み合う昼と夜、ディオスクロイの双子の馬車ウマみたいにわずかのあいだも離れず――」
「うぁぉおおおおアルベドォ！」
凄まじい激痛にルベドはのけぞり、くねり、暴れまわった。
「そうそう。その調子だよ。夢精しちまうくらい溜め込んできたものがあるんだろう？それをこの場にぶちまけてみせろ。ここはおまえの大好きな娘の精神の内部だぜ」
「ブッ飛ばすぞ、てめえは生け捕りだ」
Jr.はかすれた小声でいった。怒りのあまり声は喉に引っかかった。
アルベドはJr.の耳に口を寄せてささやいた。
「だが、よく考えてみろ。おまえにこれを怒るだけの資格があるのか？」

スッと視野が一気に狭窄した。
気がつくと、ホルダーから二丁の拳銃を引き抜いていた。
体をひねってアルベドの右肩に押しあて引き金を引く。攻撃イメージが弾けた。鈍い音とともにアルベドの右腕が肩から消滅した。Jr.の胸から生えていた手が同時に地面に落ちた。
Jr.はすばやく身をひるがえして、二丁の拳銃を同時に発砲した。
左腕と頭部が吹き飛んで消える。残された胴体がよろよろと後ずさる。
二、三歩歩くうちに両腕が生じ、頭部が再生する。
アルベドは身をよじって笑いを絞り出した。
「確かに肉体とは魂の鳥籠だ。死ぬたびに因果が周回するが、現実の肉体には魔術師の描くフィートの円ほどの広さも存在しない。だが、同時にこの頭蓋骨は神そのものと同じ大きさでもある。肉が飛び散り、骨が白い飛沫になるのが見えたか？　認めろよ、快感だっただろう？　人殺しとはまた唯一神殺しでもある奇跡の瞬間なんだからな。もっとだ。おまえの激情と痛みを露出し、その赤い腸をこの世に曝すがいいぜ！」
Jr.は低い唸りをあげつつアルベドに近づいた。
Jr.の銃が火を吹く。アルベドの脇腹が消失し、ついでその胸部が爆発する。
音を立てて頭部と両腕が地面に落ちる。アルベドの頭部はまだ哄笑を続けている。
その白髪を見下ろしてJr.は銃撃を放つ。頭部が蒸発する。

よろよろと歩きはじめた下半身には、いつのまにかすべてが揃っていた。
アルベドは悠然とJr.の隣に歩み寄ってささやいた。
「どうした？　ちんけなピストルマニアのペドフィル野郎。処刑される日を指折り数え待つのにも疲れたか？　だが、残念だったな」
アルベドはねじまげた唇で音を立てた。
「贖罪の日々は永遠に終わらない。なぁひとつ質問していいか？　あの娘はおまえにまとわりつかれなくてもやっぱり死んじまったと思うのか？」
Jr.の全身から真紅の波動がほとばしり、激しく燃えあがった。
アルベドは薄笑いを浮かべた。その体から紫色の波動が発散された。
二色の光が互いに絡みあい、天高く昇りつめる。エンセフェロン空間がぎしぎしと軋み、表皮が剝がれ落ちはじめる。乱流はエンセフェロン空間そのものを引きつらせていた。そして目を覆う粉雪が大気の擾乱に舞い踊り狂った。
思わず飛び出そうとしたシオンをジギーが右手でさえぎった。
「待て、危険だ。シオン。Jr.は自分の力を制御できていない！」
アルベドが彼らのほうをちらりとうかがって笑った。
「ああ、誉めてやれよ。ルベドは充分に感情を抑制してる。だが、単なる意志の力ではこれは止められないんだよ。体が闘いを欲している。なにしろ、おれたちは兵器だから

な」

Jr.は両手を広げ、のけぞり、天にむかって猛々しく咆哮を絞り出した。

頬に触れる粉雪にシオンはぞっとして身震いした。その雪に体温のような生暖かさがあった。空間の法則は完全に破壊されつつあった。

シオンは風圧にとても立っていられず、振動する地面の上をよろめいた。

暴風から守るようにKOS-MOSはシオンの前に立ちはだかった。

〈シオン、警告します。エンセフェロン空間を構成するU.M.N.構造体が可変閾値を超えて仮象の変移を重ねています。このまま同規模の高エネルギー衝突が続けば、約六十五秒後に、このエンセフェロン空間は完全に崩壊します〉

眼前で行われる兄弟の闘争はなお勢いを増していた。Jr.の炎の色の波動に対抗してアルベドは片腕を掲げて紫色の光を放つ。真紅と紫にイメージされた二色の波動は互いを喰らいあいながら、抱き合い、火花と雷撃を空中にまき散らした。

「そんな――エンセフェロンを内側から食い破るエネルギー衝突なんて聞いたことがないわ」

シオンは青ざめた。ここが破壊されればここにいる全員無事には済まない。

背後でケイオスがいった。

「あのふたりはU.R.T.V.の持っているU.M.N.干渉能力で、空間の特性を次々と書き換え合っている。エンセフェロン空間がそのひずみに堪えきれなくなっているんだ」

シオンは振り返って叫んだ。
「いったい、どうすればいいの!?」
「こうなったら、誰にも止められない。このエンセフェロンの母体となるはずの記憶の持ち主が意識を持っていないからだと思う。U.M.N.構造体の変形に無抵抗に応じてしまっている」
「モモちゃんが――?」
シオンは無表情のモモを見た。二色の光に照らされたモモの顔はあいかわらず人形のように無表情だった。シオンは見ていられずに、無邪気だった頃の見る影もないモモの顔から視線をそらした。
「とにかく、今は離脱の方法を考えなきゃ。アレン君!」
シオンの声はむなしく鉛色の空に吸い込まれた。風の唸りが聞こえるばかりだった。
「ちょっと、アレン君!　聞こえないわけ!」
ジギーが動かないモモの肩に両手を置いて、かぶりを振った。
「あれほど周到なトラップを残していた男だ。我々は奴の用意した罠にみすみす飛び込んだのかもしれん!」
〈――シオン、あと三十秒です〉
「わ、わかってるわよ。あわてさせないで、KOS-MOS!」
シオンは周囲を見まわしたが、嵐に掻き消されて何も見えない。

赤と紫の渦巻く中に、ユーリエフ・インスティテュートの水色の制服を着た子どもたちが駆けていくのが見えたようで身震いした。
今までに見てきた記憶の映像がかき乱れて、入り交じり、グロテスクな極彩色の光景に変わる。それは一瞬だけ見えて、ほどけて粉雪になって消えてしまった。
彼らのいたはずの海の見える丘はすでに原型を止めていなかった。地形がねじ曲がり、空が波打ち、水平線が真紅に燃え盛っていた。
シオンはもどかしく、耳元を探った。手を伸ばせばすぐそこにゴーグルがあるはずなのに。生身の肉体は指一本動かすことさえできない。エンセフェロン内部で見たサクラという少女の苦しさが少しだけわかったような気がした。
そのとき、耳元でとぎれとぎれの声が聞こえた。
《――任、聞こえ――れません！　どうなって――》
「アレン君!?　そっちこそどうなってるのよ!?――いいから、早くこれを止めて！」
〈――あと十秒です〉KOS-MOSが冷淡に宣告する。
シオンは絶望的な気分で赤い海を見つめた。
《――ベド、ルベド！》
「ミズラヒ博士!?」ジギーがモモの両肩に手をやったままで空を見あげた。
《――ドの狙いは、おそらく、モモ――資料が――》
どこからか――かすかな、やめて、という声が聞こえた。

シオンは声のほうを振り返って思わず叫び声をあげそうになった。
モモの瞳が焦点を取り戻していた。
「意識が戻ったの⁉　モモちゃん！」
その両目ははっきりとした意志を持ってアルベドを睨みつけていた。
「やめて――」彼女は闘い続けるふたりの男にむかって叫んだ。
両肩に置かれたジギーの手をどかし、モモはふたりにむかって歩きはじめた。
おぼつかない歩みを進めるうちに、モモの体からやわらかな光が満ちあふれた。
崩れはじめたエンセフェロン空間に少しずつ秩序が戻りつつあった。真紅の海の色がやわらぎ、鮮やかな桃色の光が世界に満ちあふれた。
鳥肌の立つような張りつめた感覚が空間内部を走り回り、エンセフェロン空間が、U.M.N.内部に複雑なネットワークを再生しはじめる。
掻き乱された時空は急速に自己同一性を取り戻しつつあった。本来のサクラ――モモの精神構造を。風は嵐を沈め、柔らかく頬を撫でた。海は真紅から深い青へと変わった。
アルベドは喜悦の表情で、真っ赤な大口を開けて、両手を広げた。
「――ようやく口を利いてくれたな、沈黙のペシェ」
それを合図にして世界に満ちた光がのたうちはじめた。光は収束し、空を駆けのぼった。シオンたちは愕然として空を見あげた。
エンセフェロン空間の天空に、巨大な楕円形の穴が口を開けていた。

モモが驚きと困惑の表情になり、ついでそれは恐怖へと変わった。貪欲な虚空に、U.M.N.の彼方に、厖大なデータの束が一瞬のうちに啜りあげられていくのを見あげた。光には無数の記号が溢れかえっていた。

アルベドはデータの束が楕円の穴に吸い込まれて完全に消え去るのを見届けると、モモを急に興味を失ったような感情のない目で眺めた。

「ペシェ、おまえはほんとに純粋で扱いやすい。ミズラヒも酔狂な男だ。ヒトに似せた心など持たせないほうが遥かに安全だったろうに。いや、しかし、そう見えるだけで実際には人になぞ似ていないかもな？　理想的に無垢な人間の感情のまねごとをしているだけじゃないのか？　やはり天使とでも呼ぶべき哀れなキメラなんだよ、おまえは」

アルベドは高らかに笑った。その背後で空間が再び引きつれを起こした。アルベドはシオンたちには一瞥もくれず虚空へ忽然と姿を消した。

残された一行はしばらく立ちすくんだ。

誰もことばを発することができなかった。何もかもが一瞬のことだったように思え、何が起きたのか理解できなかった。

海が波を取り戻し、穏やかな海風が吹きはじめていた。草木が穏やかに揺れていた。

「いったい、何がどうなったの？」シオンがひとりごとのようにつぶやいた。

〈エンセフェロン記録上に残されたログの状況からは、M.O.M.O.の意識構造体下部に存在していた連結情報集積体がU.M.N.に転送されたと推測されます〉

KOS-MOSが答えた。
地面に倒れかけたモモの体をジギーが支えた。
「アルベドはモモが自発的に意識を取り戻すことを悟っていた。あの男はおれたちを全員まとめてこの場で滅ぼすこともできたはずだ。だが、それはやつの目的ではなかった。やつははじめから、モモのデータだけを狙っていたのだ」
シオンはうなずいた。おそらくエンセフェロンのデータ上になんらかの仕掛けが施してあった。Jr.の精神を高ぶらせ、そして、ふたりのあいだで生じた闘争を止めようとしてモモは自ら閉ざしていた意識を統合した。すべてアルベドの狙い通りに。
シオンは唇を噛んで、急に全身の力が抜けるのを感じた。
ジギーは腕の中で眠るモモを見下ろし、その仮象(エイリアス)が目元に浮かべた涙の痕をぬぐった。
「だが、あの男があらわれなければ、モモはおそらく最後まで鍵を守り、自発的に意識を再統合することはなかっただろう。結果だけを見れば、モモはアルベドによって助けられたともいえる」
目を閉じたモモはひどく哀しげな表情だった。命を懸けて守ろうとしたデータをむざむざ奪われてしまったのだ。そして、それはモモを大切に思う人たちが、彼女の意識を復帰させようと努力した結果だった。どちらが正しかったのか、答えようがなかった。
シオンは、ケイオスに抱き起こされるJr.を眺めた。

あの少女なら、サクラなら、どういうのだろう。それが聞きたい。
シオンは少年と少女の夕暮れの日の約束を思った。
幻の少年と少女ははっきりとした印象になって記憶に刻まれていた。Jr.とサクラというあの少女は、あの後けっきょくどんな運命を辿ったのだろう。
人の深層を再現し、その中に侵入するエンセフェロンという特殊な技術に特有な錯覚だった。他者と自分の人生が渾然となって入り交じってしまったような感覚。相容れないはずの存在と存在の境界がしばらく定かではなくなってしまう。過去は決して頭から消え失せることはない。記憶は、脳内の各知覚野に刻まれて、ただの保存ではなく、現状認識のために駆動し続ける回路そのものとなるからだ。
シオンはふいに込みあげた締め付けるような不安に、胸に手をあてて深い溜息をもらした。このエンセフェロン空間を構築するモモの精神の深奥から、何かが自分たちをじっと見つめているような気がした。
生身の身につけたゴーグルが振動し、頭骨を微細に刺激していた。オペレーションブースにいるアレンからの合図だった。シオンはひさしぶりに地に足のついた感覚を感じて、ほっとして溜息を吐いた。
《主任、エンセフェロン構造体、再構築されました。モモちゃんは目覚めてるみたいですし、いったい、何がどうなってるんですか？》
「状況が入り組んでいて簡単には説明しにくいの。とりあえず目的は——終わったわ。

今はこのエンセフェロン空間から出られるようにして」
《了解。離脱時にちょっとショックがありますから、皆さん、注意してくださいね》
シオンはふと思い出して、KOS-MOSに振り返った。
「KOS-MOS、これで、またお別れ。一局でも――がんばってね」
〈ありがとうございます。シオンも、お元気で〉
KOS-MOSは無表情で答え、その姿はふいにエンセフェロン空間から掻き失せた。

*

頭の中で何かが切れる音が鳴り響き、シオンは急速に現実世界に覚醒した。
ゴーグルを外した後一瞬状況がわからず、数度目をしばたたかせた。まだ、視覚に別れる直前のKOS-MOSの青い髪の残像が彼方の海の色と混じって残っていた。
頭を二、三度振って我に返ると、見覚えのある解析ベッドの前に彼女は立っていた。
次々とエンセフェロン空間から離脱した仲間たちが、ゴーグルを外した。
目の前の床でユリがベッドから下ろしたモモの小さな体を抱きしめていた。
モモはうっすらと目を開けていた。その頬にはかすかだが、赤みが差していた。
「モモちゃん、目が醒めたのね！」
シオンは思わず叫んでから、ユリの険しい横顔に気がついた。
「やっぱり、Y資料は――」シオンはおそるおそる訊いた。

ユリはしばらく顔を伏せ、それから、あえぐようにいった。
「流出したわ。この十四年間、我々がもっとも恐れていた鍵が——」
顔をあげて、シオンと目を合わせた。
「時局は動き出した。これで、もう止まることはない」
ゴーグルを床に叩きつけたJr.は虚空を睨み、それっきり押し黙っていた。

＊

周囲を闇に抱かれたE.S.シメオンのコクピットで、アルベドはひとり狂喜していた。星と闇の宇宙と自分の体がクラインの壺状にひっくり返り、今は自分の体の中にこそ星雲を抱いている心地がした。
体の中で存在の網の目がほどけて、輝く粒子になって静かに沸騰していた。
待ち望んでいたものをついに手に入れた。苦労を重ねて彼が手に入れたデータは、けっきょくY資料の一部でしかなかった。しかし、アルベドはそれ以上のものに興味はなかった。ウ・ドゥに近づくすべが見つかればそれでよかった。
これさえあれば、二重ブラックホールに囲まれた旧ミルチアへと通じる回廊が開く。この鍵となるデータに、U.R.T.V.としての波動干渉能力を交える。
U.M.N.コラムを修復し、ウ・ドゥのいるオリジナルゾハルのもとへと彼は辿り着くことができるだろう。

アルベドは体の中で泡が弾けるように涼やかな音を立てているのに気づいた。半眼でその音に耳を澄まし、それに合わせてゆっくりと頭をスウィングさせた。
「深淵の鍵、ミルチアを呼び覚ませ」アルベドは歌うようにいった。
上機嫌で片腕を持ちあげると、目の前で光の粒子になって膝の上にこぼれた。いつも器官を失うときのような激痛はどこにもなかった。自分という広大な宇宙が、さらに拡散して広がっていく快感があった。
アルベドの恍惚とした顔も、胴体も、脚も、すべてが光の粒子へと変わって、消滅していく。
彼の搭乗するE.S.シメオンも、宇宙を彷徨うだけの光の粒子と化して、果てしない漆黒の海に流れ出していった。深淵の奥に潜むミルチアの大地をめざして——。
かつてアルベドだった光の粒子の河は、薄く広く拡散し、パルスと化して、空間に染み込むように消えた。
彼は今は名前もない情報の奔流に過ぎなかった。情報体は虚数空間に漂うU.M.N.の微弱な波動を捉えて、旧ミルチアに続くコラムを形成した。
情報体にかすかに残った思念が喜悦に揺らいだ——善悪をへだて永遠に連なるその門は、かくもか細き道だ。
だが、分かち合おう、もうひとつのおれの鼓動、兄弟(ルベド)。

7

旧ミルチアへの回廊が開いた――この驚くべき一報が星団じゅうを騒がせてから、標準暦で一週間ほどが経過した。
騒々しい第二ミルチア宇宙港のロビーを男はひとり歩いている。
――また戦争がはじまるのだ。
きな臭い噂が広まり、宇宙港はめまぐるしい雑踏でごったがえしていた。旧ミルチア宙域で、オリジナルゾハルをめぐり、連邦と移民船団が睨み合っている。この戦争が飛び火するならまず第二ミルチアだという論調がマスメディアを支配し、しばらくこの地から疎開しようという人々も多かった。
男は、雑踏を横目に、受付カウンターに向かい予約番号を告げた。カウンターにいた宇宙港の職員は、宇宙港には不釣り合いの和装を身に纏った男の姿に目を丸くしていた。
「ええ、と。ジン・ウヅキ様。御搭乗の船舶はクーカイ・ファウンデーション所属のローエングリン級高速航宙クルーザー〈エルザ〉。まちがいありませんね」
ジンはにこやかにうなずき返し、磁気カードを受け取ってカウンターを離れた。
宇宙港に行き来する人は多様だが、今、圧倒的に多いのは軍人たちだ。
手続きを終えたばかりのジンの脇を、ちょうど、連邦の制服を着込んだレアリエン兵

士たちの一団が通り過ぎていくところだった。
　兵士たちの背中をジン・ウヅキは少々陰鬱な気持ちで見送った。彼らのうちの何人が生きて再びこの地を踏むことができるのだろうか。
　ジンは海浜の宇宙港にかすかに漂う潮の香を嗅ぎ、心の中で、第二の故郷に別れを告げた。
　ミルチアへ――かつて彼がたったひとりの肉親をのぞいて、人生のすべてを失った場所へ再びおもむく。その使命感がジンの心中に重苦しくのしかかっていた。
　妹とはけっきょく喧嘩別れをしたままだ。シオンからは簡単な伝言だけが残されていた。ヴェクター・インダストリーの本社である機動プラットホーム〈曙光〉への召還命令を受けて、すでに第二ミルチアを離れたという。
　命を失うかもしれないこの旅の前に、ちゃんとした別れを済ませなかったことには、かすかな後悔もあった。しかし、それは考えてもしかたのないことだ。
「ジン・ウヅキか?」
　背後から名前を呼ばれて、振り返った。そこに懐かしい顔があった。かつて、ジンがミルチア紛争のデータを託したレアリエン。ジンは男に会釈をした。
「おひさしぶりです。カナンさん。今まで挨拶もせず、大変なごぶさたをしていました。申し訳ない」
　カナンは軽くうなずき、しばらく無言でロビーの喧噪を眺めた。

「あんたも〈エルザ〉か？」
　ジンはうなずいて、空港内にあふれる軍人たちを見た。
「移民船団の艦隊はこの事象が生じることを予期していたようですね。ミルチア宙域に侵攻し、強引に旧ミルチアへの下降を開始した、と聞きました。連邦の軍備対応は遅れている。彼らはその援軍となる駐留軍の先駆けですか。ヘルマー代表は連邦への協力を決めたんですね」
「ああ。今回の件で自治州政府はむしろ当事者だ。どちらにしろ、中立を保てる立場ではない」
「しかし、連邦への協力の裏側で、わたしたちやファウンデーションへのこの依頼、タイミングを考えれば、ヘルマー代表もこの事象をある程度予期していた節がある」
　カナンは肩をすくめた。
「十年以上も政治屋をやっているんだ。それなりの駆け引きの能力は自然に備わったんだろう。情報に聡いのは、むしろありがたい。小出しにされるのは鬱陶しいがな」
　ジンはぶっきらぼうなしゃべり方に懐かしさを覚えて含み笑った。
「あなたはお変わりないようですね」
「あんたのおかげでこっちはエンセフェロンダイブで百回以上もあの日を追体験している。変われないはずだ——それにしても、あんたが同行するとは思わなかった。軍は退役したと聞いていたが？」

「ヘルマー代表に直接頼まれまして、ね。正直悩みましたが、これは、わたしが果たさねばならぬ骨絡みの責務だ。今回の探査であなたの頭の中のデータについて正体を判明させることができるはずです。あのとき、辿り着くことのできなかったU-TIC機関発祥の地〈ラビュリントス〉の最深部に十四年の月日を挟んでようやく到達できる。そして、そこにはオリジナルゾハルも眠っている――」

カナンとともに出発ゲートにむかいながら、ジンはふとマーグリス大佐のことを思いだした。彼が生きているらしいことは噂で聞き知っていた。U-TIC機関の中枢に君臨しているらしい。これから進む道の先で必ず再び相まみえるだろうことをジンは秘かに予感していた。

「ところで、お聞き及びですか？　そのエルザという宇宙船にともに乗り込むメンバーについて――」

「ああ――正規クルーのほかには、ファウンデーションの代表理事のガイナンJr.、あんたとも顔見知りのケイオス、それに百式プロトタイプ、接触小委員会から派遣される護衛のサイボーグもつくはずだ」

「なるほど。いずれ、因縁の深い方々ばかりですね」

カナンは出発ゲート前で立ち止まり、点灯する緑色のランプを見あげた。

「人類史はゾハルの登場以降、有機的な連鎖から切り離されている。人類は何者かの意志でエネルギー系の永遠の駆動に囚われている。滅びることさえも許されない。おれに

はそう見える。今度の一件で呼び集められた者たちも同じだ」
「因縁などと曖昧なものではなく、わたしたちが集まったのにもその何者かの意志が介在している——そう、おっしゃるのですか？」
「おれは、おそらくその流れの外側にいる存在だ。単なる記憶機能だからな。だからこそ、あんたたちよりもそれを濃厚に感じることが許されているんだろう。しかし、ただの印象だ。それほどまじめに考え込むことはない」
ふたりはそれぞれの思考を抱いて、無言で出発ゲートを潜った。ゲートは、懐に入れた磁気カードに反応して、自動的に管制にむけて彼の身体データと出立記録を信号に変えて、U.M.N.にむかって発信する。ふたりはこの瞬間に記録上は宇宙の住人になる。
そのまま、明るい照明で照らされた廊下を歩いて、エルザの待つ格納庫にむかった。
今、すべての道は旧きミルチアの大地へと続く——。
ジンは重苦しい気分をぬぐえず、かつて滅んでいった故郷の星を思った。その最も深き淵の底で眠る、あらゆる人類に対して影響を及ぼしてきたゾハルの冷たい光輝を頭に思い描いた。
ゾハルは、宇宙の行く末を織り束ね、彼らを手招いていた。

（ゼノサーガ　エピソードII　善悪の彼岸　下巻に続く）

ゼノサーガ用語集

【アーキタイプ】元型。KOS-MOSの模擬体（プロトタイプ）のこと。三年前、自律起動、暴走事件を起こし、当時の開発責任者だったケビン・ウィニコットを殺害した。その後、メインフレーム部分は損失したが、現行のKOS-MOSが再び製造された。

【アニマの器】ゾハルと同時期に発掘された謎の物体。巨大な脊椎状だが、見る者の主観で形態が変わるらしい。機動兵器に組み込むことで常識をはるかに越えた出力を得ることができる。アニマとはラテン語で「魂」を意味する。ユング心理学においては男性の心理に存在する女性的要素のことで、おもに母親をモデルとして構築されると考えられている。ちなみに対概念としてアニムスと呼ばれる女性に宿る男性的要素がある。

【アンプリファイアー】艦船搭載型ヒルベルトエフェクト増幅器。百式レアリエンと連携し、百キロ半径にヒルベルトエフェクトの展開を可能にした。その最大重量は数百トンにも及び、そのため大型艦船か都市にしか配備できない。今後のグノーシス対策の切り札のひとつとされる。

【アンドリュー・チェレンコフ中佐】ヴォークリンデ副長。連邦軍の士官。U-TIC機関の工作員として様々な局面で暗躍していた。エピソードIの事件の渦中で命を落とした。

【移民船団】オルムス。かつて人類が宇宙に進出する以前からゾハルを管理する立場にあったと主張する宗教的組織。これまでのゾハルを巡る対立からか、連邦に対する独立意欲が強く、超法規的な立場を強調する。

【インターリンク】体内デバイスを用いU.M.N.を介した遠距離接続で、二者間の意思疎通をはかったり、神経を共有すること。

【ヴェクター・インダストリー】数千年の歴史を誇る巨大複合企業体。その部門は兵器やレアリエンの開発から交通通信などインフラ事業、食品や薬品に至るまであらゆる分野に及んでいる。ヴィルヘルムは創設者にして現CEO。［――第一開発局］通称「一局」。一局はヴェクターで最も伝統のある部署で、社内外からの評価も高い。前身は官民共同のU.M.N.管理事業部門。現状はAIやチップなど、ソフトウェアの開発が主要業務。KOS-MOSの開発では情報操系ソフトウェアの開発を手がけた。シオン・ウヅキはここに在籍している。［――第二開発

局」通称「二局」。主要業務はハードウェア開発。艦船や機動兵器などの開発製造を手がける。ヴェクター社で最も軍事色の強い部門。［――第三開発局］通称「三局」。レアリエン開発部門。レアリエンの神経系のブラックボックス〈OEM〉の開発を独占することで、レアリエンについては他社の追随を許さない。同部門ではレアリエンの自爆をも管理する制御コードを把握している。

【ヴォークリンデ】ヴェクター社によって開発された最新巡洋艦。初の対グノーシス艦として期待を集めていた。対グノーシス艦船としては未完成ともいえる。［――襲撃事件］ヴォークリンデは公開試験運用中にグノーシスの群に襲撃され、壊滅した。この事件が起きるまで、シオンらヴェクター一局のKOS-MOS開発チームは、同艦にて、起動及び実動テストまでを行うはずだった。

【ウ・ドゥ】正式名称ウーヌス・ムンドゥス・ドライビング・オペレーション・システム。ゾハルを制御することで、U.M.N.を媒介する謎のエネルギー存在。ゲーム中では赤紫色の雲状イメージとして表現される。［――シミュレーター］U.R.T.V.が対ウ・ドゥの精神連結訓練を行うために、U.M.N.上に構築された擬似的ウ・ドゥ波動。

【エーテル】〈Especial Theory of Rudimentary〉特殊根本原理と訳される。本作においてこれは統一された概念ではなく、それぞれの人間が特異に発揮する能力を総称して、こう呼ぶことがある。たとえば、シオンらが戦闘時に使う転送技術系の技もエーテル能力としていちおう解釈される。ケイオスの持っている謎めいた力だけは、正しい意味で「エーテル」といえるかもしれない。

【エルザ】クーカイ・ファウンデーションに所属するローエングリン級高速航宙クルーザー。全長百六十六メートルと貨客船としては小型～中型クラスに入る。主推進機関は最新型のロジカルドライブ。U.M.N.を介した転送では生体を送ることはできないため、人間の移動にはシールドで守られたエルザのような乗り物の存在が不可欠となる。

【エンセフェロン】個人の記憶をU.M.N.に再構築する技術。また、特に被験者が直接経験していなくても、データさえあれば疑似空間を造りあげることができる。［――ダイブ］再生したエンセフェロン空間を被験する行為。精神・神経の病の治療のほか、戦闘訓練、単なる娯楽として行われることもある。

【ガイナン・クーカイ】記録上は第二ミルチアの資産家、ソゼ・クーカイの養子。クーカイ・ファウン

デーションを取りしきる代表理事のひとり。その正体はミルチア紛争時にヘルマーらによって保護されたU.R.T.V.ニグレド。正体を秘匿するわけは、U.R.T.V.の存在が、ミルチア紛争後も依然として最重要機密となっているため。［――Jr.］記録上はガイナン・クーカイの養子。クーカイ・ファウンデーションを取りしきる代表理事のひとり。ガイナンによく似た容貌から隠し子説やクローン説がファウンデーション内外で囁かれている。その正体はU.R.T.V.ルベド。趣味は古式拳銃コレクション。

【カレー】第二ミルチアで青春を謳歌する学生たちの憩場モビィディック・カフェの定番メニューにしてシオン・ウヅキの得意料理。保存性が高く、調理の簡易さからこの時代の船乗りの定番食ともなっているらしい。

【局所事象変移】一般に古典物理学によって説明可能な物理領域を「局所」と呼び、それ以外の領域を「非局所」と呼ぶ。このエピソードでシオンが口にしている場合は、非局所的存在であるウ・ドゥが局所的（物理的）世界に影響を及ぼし、範囲内の物理領域の法則性そのものを変化させてしまうことを指していると想定される。

【クーカイ・ファウンデーション】ミルチア紛争後、ライフリサイクル法の犠牲者自身によるその被害者救済と生活基盤確立と維持を主目的として設立された財団。その創設者である資産家ソゼ・クーカイはミルチア自治州政府が活動資金をプールするために捏造された架空の存在。つまり、ファウンデーションは、事実上ミルチア自治州政府と同体で、政府と同じくミルチア紛争の原因究明及びU-TIC機関追討も活動スローガンとして掲げている。惑星第二ミルチアの軌道上に浮遊する自律起動型宇宙コロニーが本拠地で、クラシカルな街並みや人工ビーチなどで観光スポットとしても人気がある。ミュータントなどとこれまで蔑視される傾向の強かった特殊能力を持つ人材を多数有し、ゾハルエミュレーターの保管、Y資料を秘める百式プロトタイプの保護などで、現在は全星団の注目の的となっている。

【グノーシス】ミルチア紛争後、歴史の表舞台にあらわれた謎の存在。主に群体で出現し、人類に対して敵対行動を取る。知性の有無、繁殖についてなどの詳細は一切不明で人類に対する新たな危機として火急の研究課題となっている。襲われた人間は通常白化と呼ばれる現象が生じ、砕けて死亡するか、肉体がグノーシス化する。存在の位相が虚数空間に位置するために物理接触することは不可能である。攻

撃するには、ヒルベルトエフェクトで物理空間に翻訳してから攻撃するか、あるいはD.S.S.などの専用兵器での攻撃が不可欠となる。果たして生命体と呼びうる存在なのかさえ不明だが、様々な姿をした固体が確認されているため、その分類には、便宜上、幻想上の生物の名前が付けられている。遺骸の標本なども採取されているが、すべてただの塩化ナトリウム状のものに変化していた。

【ケビン・ウィニコット】KOS-MOSの基礎開発を手がけた天才青年。ヴェクター一局所属で、シオン・ウヅキとは先輩・後輩という以上の絆で結ばれていた。ヴェクター入社に至るまでの個人史は不明。KOS-MOSのアーキタイプによって殺害された。

【精神結合】U.R.T.V.が作戦活動時に各々の精神をつなげて構成するテレパス回路。

【星団連邦】約五十万の惑星国家によって構成される緩やかな連邦政府。U.M.N.を利用した投票制度によって決定した各自治州の代表討議員がそのまま惑星の代表として議会に参加することになる。現在の主星はフィフス・エルサレム。

【接触小委員会】グノーシス対策の組織として連邦で設立した委員会。所属人数は二千名を超える。グノーシス駆逐のための一大計画である「プロジェクトゾハル」を推進している。本部はフィフス・エルサレムに存在する。

【思念波】強い思念が外界に対して影響を及ぼしうる形で放出されたもの。

【ゾハル】オリジナルゾハル。ケニア、トゥルカナ湖畔で発掘された物語中、最重要の謎物体。見た目は全高十数メートルの金色に輝く金属板。U.M.N.波動の中心地点になっていると思われるが、その性質の全貌はわかっていない。ミルチア紛争の結果、旧ミルチア宙域に置き去りになった。[――エミュレーター――]ヨアキム・ミズラヒ博士が造りあげた疑似的ゾハル。外観はオリジナルゾハルに酷似し、性能もかなりのレベルで再現されている。現状で全十二基が確認されており、そのすべてがクーカイ・ファウンデーションによって管理されている。

【天の車】別名プロトメルカバー。百式プロトタイプが製作された巨大プラント。ヨアキム・ミズラヒを中心とするかつてのU-TIC機関によって建造された。ネピリムの歌声装置とゾハルと合体することで真の機能を発揮するらしいが、アルベドに第二ミルチア惑星軌道上に召還されたあげく大破した。

【デュランダル】クーカイ・ファウンデーションの旗艦。全長四千メートルを超える重武装艦で、ファ

ウンデーションのコロニーにドッキングして、その主推進機関となる。ゾハルエミュレーターの保管庫もこのデュランダル内に存在する。

【ナノマシン】主に化学合成された極微な分子機構でおもに人体の治療に役立っている。ゼノサーガの世界ではより複雑な医療活動が可能になり、大半の傷病はこのナノマシンと機械医療で治療することができる。結果として、技術者としての医者は精神病をのぞいては不要となった。

【ネピリム】シオンの前にたびたびあらわれては、その行く末を暗示し、謎めいた助言をする意識体的存在。少女の形態をとっている。ちなみに旧約聖書においてネピリムとは人類以前に大地に住んでいた巨人もしくは半神のこと。［――の歌声装置］人やレアリエンの精神活動に影響し、その波長を狂わせる装置。ミルチア紛争時にも重要な役割を果たしたと思われる。発生装置は全長数十メートルの塔の形状をし、紛争当時は重篤者神経病棟の間近に据えられていた。〈天の車〉と合体することでグノーシスの大群を呼び寄せるなど、その実態について興味は尽きないが、残念ながら発生装置そのものは、〈天の車〉とともに第二ミルチアの大気圏でほぼ燃え尽きてしまった。

【念話】U.R.T.V.が、精神連結によって生じる思念の共有を利用して行う肉声を用いない会話。距離に関係なく行うことができる。精神防壁で余計な思考はカットし、要件のみを自在に伝えることができる。

【ハイアムズ重工業】兵器開発などを行っている巨大企業。オルムスと通じているらしい。

【百式汎観測レアリエン】アンプリファイアーと同時に全星団の艦隊に配備が急がれる高性能レアリエン。卓越した観測能力、マシンの操作能力のほか、アンプリファイアーとの連携でヒルベルトエフェクトの発動を可能とするなど、グノーシス対策に高スペックを発揮する。［――プロトタイプ］M.O.M.O.のこと。ヨアキム・ミズラヒによって最後に製作されたレアリエンで後に百式汎観測レアリエンの祖となる。旧ミルチアに存在した巨大エネルギープラント〈天の車〉で製作され、その精神の深層には、ヨアキム・ミズラヒの手でY資料が隠匿された。

【ヒルベルトエフェクト】虚数空間に存在するグノーシスを物理空間に翻訳・固着させ、物理的接触を可能とする特殊波動発生装置。［超広域――］KOS-MOSに搭載された機構はアンプリファイアーとの連携無しに、数天文単位にわたって、ヒルベルベル

トエフェクトを展開可能とする。
【ブラックボックス】KOS-MOSの中枢部分やレアリエンのOEMなど、直接の開発者以外にはその分野の研究者にとってもおよそ理解不能な部分。
【プレロマ】U-TIC機関の本拠地のひとつ。宇宙空間に漂う巨大な十字架の形状をした岩塊。内部は、基地というよりは聖堂。拉致されたM.O.M.O.が一時幽閉されていたが、接触小委員会の命令を受けたサイボーグ、ジグラットエイトが単身潜入し、その身柄の奪取に成功した。その名前は、ロスト・エルサレム脱出船の名に因んで付けられている。
【プロジェクトゾハル】接触小委員会によって進められているグノーシス駆逐計画。
【ミルチア】［旧――］ゼノサーガを通じて謎の中心点のひとつとなる惑星。ある経緯を経て、ここでゾハルの研究がなされていた。ミルチア紛争の結果、その宙域は、二重ブラックホールに閉ざされ、宇宙に孤立した。シオン・ウヅキの故郷。［第二――］ミルチア紛争後、旧ミルチアを脱出した人々が植民した惑星。［――自治州政府］現状第二ミルチアを統治する自治州政府で、代表はヘルマー代表討議員。ヴェクター・インダストリーや内部組織であるファウンデーションとの連携で星団の各勢力の注視を集めている。目下、政府の最大の目標はミルチア紛争の原因究明にある。［――紛争］ツォアル事変をきっかけとして全星団を巻き込んだ戦争の最終局面で生じた紛争。U-TIC機関の武装蜂起、連邦全域で生じたレアリエンの暴走、グノーシスの登場などその後の星団史に深い傷痕を残した。
【ヨアキム・ミズラヒ】脳物理学及びゾハルの研究分野で星団史に類を見ない大天才。ゾハル研究のためのU-TIC機関の創設時の総責任者。そのためにミルチア紛争の首謀者と目されている。紛争時の混乱で命を落とした。
【ライフリサイクル法】ヒトクローニングや遺伝子改変、サイボーグ技術の研究開発を奨励する連邦法。宇宙開発に伴い枯渇した人的資源を補うために、T.C.四五九一年に可決され、以後百六十年間にわたって継続的に施行された。人体実験など、生命倫理のいちじるしい荒廃を招き、現在は廃止されている。
【ラビュリントス】旧ミルチアでU-TIC機関がゾハルの研究を行っていた施設名。ギリシャ神話ではミノタウルスが幽閉されたクレタの迷宮のこと。
【ルイス・バージル中尉】ヴォークリンデに搭乗していた連邦軍人。レアリエンを憎悪する言動を繰り返す。同艦の襲撃事件に際し、自律起動したKOS

-MOSによって殺害された。

【ロスト・エルサレム】人類の失われた故郷、人類発祥の惑星地球のこと。現在ではその位置座標はおろか、現存するのかさえ不明である。

【レアリエン】化学と機械技術を組みあわせて造られた合成人間。ライフリサイクル法の廃止以降、宇宙開発の中心的役割を担っている。主にヴェクター社によって開発管理され、出荷されている。

【A.M.W.S.】エイムス。Assault Maneuver Weapon System（強襲用機動兵器体系）。コストパフォーマンスや汎用性に優れ、星団のあらゆる勢力の主兵力のひとつになっている。しかし、たとえば連邦とU-TIC機関ではゾハル、U.M.N.の運用テクノロジーに大きな違いがあり、同じA.M.W.S.といっても、特にエネルギー制御系においてはまったく別の兵器と考えることもできよう。しかし、便宜上、ほとんどの強襲人型兵器をこの名で総称する。対グノーシス用に小型化したA.G.W.S.（エイグス）という兵器体系も存在するが、本エピソードでは未登場。

【E.S.】イーエス。アニマの器を搭載した機動兵器に付けられる呼称。A.M.W.S.など通常の兵器に比べてけた違いの性能を持ち、一機で一星団の兵力に匹敵する。性質上量産は不可能でその数は非常に少ない。

【KOS-MOS】「秩序に従属する戦略的多目的制御体系」の意。ヴェクター・インダストリーの主導で行われている次世代アンドロイド開発計画。レアリエンなどの化学合成タイプが主流を占める中、あえてすべて機械製で設計されている。その開発背景の全貌はいまだ不明であるが、接触小委員会の推進するプロジェクトゾハルとの関連性を考えるだけでも、ヴェクター社のみならず、星団全域に関わる巨大な計画であることがうかがえる。開発の総指揮を執っていたケビン・ウィニコットの死亡後も開発の中心は一局だったが、エピソードIIでは二局に移管された。シオン・ウヅキはその情操部分ともいえる統合OSの開発に携わる。

【U.M.N.】ユーエムエヌ。ウーヌス・ムンドゥス・ネットワーク。物理空間では実現できないはずの特殊な波動関数を応用した技術で、物質や情報の超光速転送を可能にする。本作で表現される宇宙時代には、交通通信の要として欠くことのできないテクノロジーである。［――管理局］主に「生体は転送できない」という交通サイドの必要上から主要な惑星には管理局と呼ばれる施設がおかれている。現状、U.

M.N.を管理しているのは星団連邦政府だが、その運用には、開発黎明期から、ヴェクター・インダストリーの技術支援・資材供給を受けており、現在でも両者は密接な提携を行っている。[――コラム]U.M.N.転送を行う場合、コラム中継ポイントから発せられるパルスを受信し、それを経由して目的地までむかうことになる。コラムの範囲外からゲートジャンプすることは理論上は不可能とされている。

【U.R.T.V.】ユーアールティヴィあるいはウ・ドゥ・レトロ・ヴァイラス。ウ・ドゥに強い執着心と恐怖を抱くディミトリ・ユーリエフ博士の遺伝子操作によって生まれた子どもたち。U.M.N.に連結し、その波動に干渉する能力を持つ。その遺伝上の父親はディミトリ・ユーリエフ博士。母親は不明。六六九体が造られたが、ミルチア紛争時に部隊としては壊滅し、現存が確認されているのは個体ナンバー666、667、669の変異体三体のみ。[――標準体]個体ナンバー665まで。くすんだ金髪の持ち主で、容姿にも性格にも個体差はまったく存在しない。[――変異体]666以降の個体で、受精卵の時に、それぞれルベド、アルベド、シトリン、ニグレドという固有名称を持つ。標準体に比べて、かなり強力な反波動を持つほか、それぞれが特殊な能力を持っている。その能力については作中を参照のこと。

【U-TIC機関】ユーティック。前身は、ヨアキム・ミズラヒ博士によって設立されたミズラヒ脳物理学研究所。ゾハルの研究のために同研究所を母体として、U-TIC機関が設立された。ミルチア紛争時に武装決起し、紛争の混乱及び拡大化を招いた。現在は地下組織化し、連邦に所属しない武装集団となっている。その総兵力は定かではないが、その高度なテクノロジーなども考え合わせると、連邦艦隊の兵力を凌駕するとされている。

【Y資料】ヨアキム・ミズラヒ博士が百式プロトタイプの深層に隠した謎のデータ集合体。ゾハルに関わるという以外には、その実態や性質についていっさいが不詳とされている。ちなみにYというアルファベットについてだが、これはYHVH（ヤーヴェ）という四文字の神の御名（テトラグラマトン）の頭文字であるために、すべてのアルファベットの起源という説がある。また、三つの直線が交わるその形象から三位一体を暗示しているともいわれる。

巻末エッセー　EPRパラドックスと一つの世界(ウヌス・ムンドゥス)

愛沢　匡

ゼノサーガの膨大な設定集を眺めていると、「U.M.N.（ウーヌス・ムンドゥス・ネットワーク）の技術にはEPRパラドックスが応用されている」とあります。で、そこんとこ、ちょっと附記。

一九二〇年代を通じて、物理学に衝撃を与えてきた量子論は、一九二七年、ハイゼンベルグによる物理学の不確定性原理の発表でついに公式化されることになりました。この原理には、量子（原子や光子）の運動と位置は同時に測定できないこと（不確定なこと）があらわされていました。これはつまり、端的にいえば「観測行為こそが観測結果を作る」ことを証明した数式です。

具体例をあげれば、ハイゼンベルグの同僚のボーアが行った有名な実験があります。十九世紀末まで宇宙には性質が大きく異なるふたつのエネルギー（波動タイプと粒子タイプ）があると考えられていました。光は、このうちの波動エネルギーだと考えられてきたわけですが、じつは観測方法によっては、粒子エネルギーの挙動を示すことがわかった。ところがまた、別の観測方法では、逆に波動エネルギーの性質を示し、粒子の挙動は隠れてしまう。

物理学における不確定性原理を一般に量子論と呼びます。量子論が示したのは、「実験室こそが実験結果を決定すること」でした。物理学的アプローチは、相対的なものとなり、決して真理には辿り着けないことになります。多くの物理学者がこれには反発を覚えました。以前、特殊相対性理論で古典物理学を叩きのめしたアルバート・アインシュタインもそのひとりでした。

「EPRパラドックス」は、こうした流れの中を受けて、アインシュタイン、ポドルスキー、ローゼンら三人の物理学者が、量子論を再検証するアンチ量子論の嚆矢として発表したものです。

彼らＥＰＲグループが量子論を使って作った公式は、たとえば次のようなものでした。

「接触したふたつの光子ＡとＢの運動量(スピン)の総和と運動方向をあらかじめ測定しておけば、その後、正反対の方向に移動したふたつの光子について、光子Ａのみを測定することで光子Ｂの運動量と運動方向を知ることができる」ふたつの光子が何万光年離れていようが、この公式は成り立ちます。

特殊相対性理論で証明された大原則に、1.光より速く動くものは絶対に存在しない、2.距離をおいた物体は互いに影響を及ぼすことができない、というのがあります。

先の公式において表現された状態では、光子Ｂの情報が光速を超えて光子Ａに伝達している〈原則1〉に抵触、また光子Ａが光子Ｂの確率波を崩壊させている〈原則2〉に抵触（確率波というのは量子論で使われる波動関数のことで、観測行為が隠してしまう物体の位相のことです）。

ＥＰＲグループはこの公式によって、量子論が現実にありえないことを記述する机上の学問であることを示そうと企てたのです。原則2については現在ではかなりの新解釈が寄せられていますが、当時、アインシュタインは、この原則上存在し得ない量子論的（つまり情報論的）連関性を「不気味なもの(スプーキー)」と呼んでかなり気味悪がりました。

ところが、このパラドックスは、その記述内容があまりにおもしろすぎたせいか、その後、ＥＰＲグループの発表の思惑を超えて、あちこち引っ張り出されることになりました。心理学の分野でもっともこれに注目したのが、Ｃ・Ｇ・ユングに連なる系譜の心理学者たちです。

ユングは、かねて人間社会や言語そのものにひそむスプーキー風の媒体（複雑に入り組んだシニフィエのネットワーク）を「一なる世界(ウヌス・ムンドゥス)」と名づけていました。この媒体を為すのが、個々人のコンテクストとは無関係の、不可知で絶対的な文化／神話コード——元型(アーキタイプ)です。

論理部分だけ取り出してわかりやすくいえばこんなふうです。ここにある夫妻ＡＢがいると仮定します。現在の日本では同性間の結婚は認められていませんから、Ａが女性だとわかれば、Ｂが男

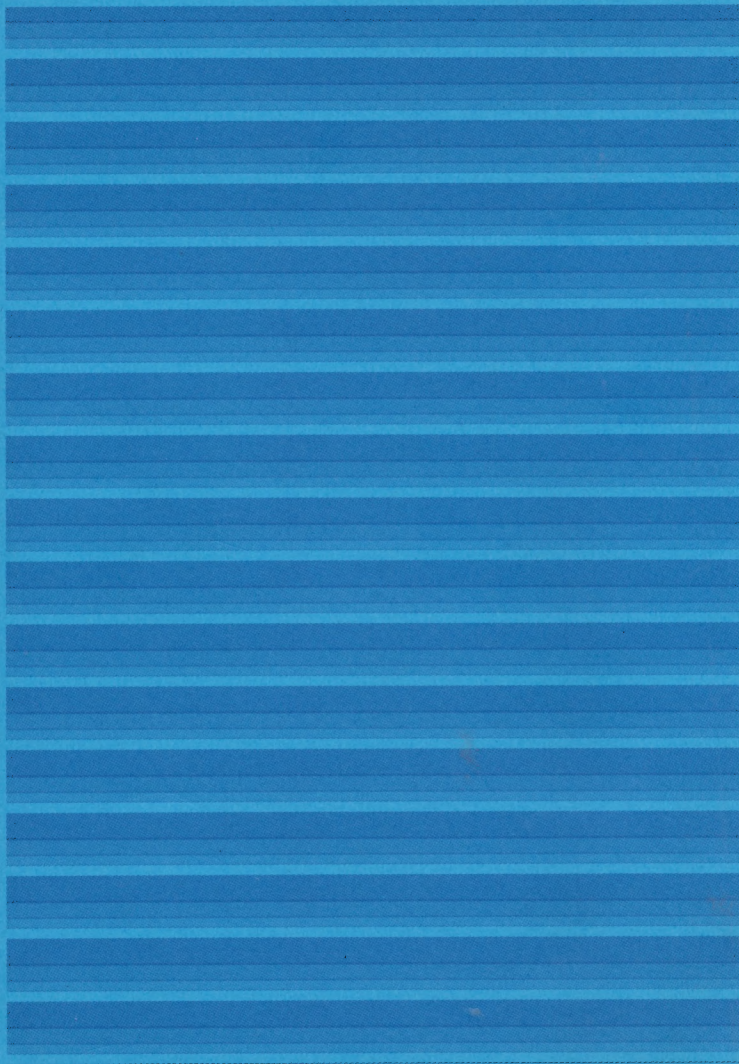
性だということは――近所のパチンコ屋にいても、数万光年の彼方で惑星探査をしていたとしても――瞬時にわかります。光速限界など無視して、ほとんど0時間で情報が移動している。電波も音波も必要ない。実態の存在しない超光速データベース。このように、人間はふつうに生きていれば、「一なる世界(ウヌス・ムンドゥス)」の回路網(U.M.N.!)を日常的に利用してるといえるんです。

先にあげたのは他愛もない例ですが、ユング派が試みたのは、このネットワークと人間との関係性を、文化/神話モデル化することでした。ただし、ユング自身「このようなアーキタイプを直接記述するのは不可能」といっています。EPRグループの成果が(直接記述ではない)パラドックスによる表現だったことも注目すべき点かもしれません。

こんな不思議で身近な現象を「ゾハル」という超物体を配置することで、よりダイナミックなイメージで楽しんでしまおうというのが本書推奨のゼノサーガの世界の読み方なのです。

そうそう。ゾハルといえば、デリダなどの影響下で脱構築やってたイェール学派がカバラ学に走って、旧約聖書とか「光輝の書(ゾハル)」の解読をやってるんだと雑誌で読んだことがあります。ハロルド・ブルームとかが、カバラから「読みの元型」を取り出してワーズワースなどを解読してる。これは文学版ユング的活動か! へたすれば、『フーコーの振り子』を地で行く隠微な神秘主義すれすれですね(ブルームの異名は「大学シャーマン」だそうな)。

だけど、ここでユングや晩年のマクルーハンなどが神秘主義者のレッテル込みで語られることが多いのを思い出します。彼ら生え抜きの綺想家たちの幻想は、息苦しいまでの理屈を連ねて、彼方にして卑近な「一なる世界」への跳躍をじつはわくわく志向している。

本編でトリックスターの役割を務めるアルベド・ピアソラのウ・ドゥへの渇望もこれに少し似ています。ちなみにこのトリックスターというのは、パラドックス機能を有する民話英雄タイプで、ユングのあげた元型から立ち現れる性格(キャラクター)/人格のひとつでもあります。(下巻へ続く)

愛沢 匡の著作リスト

ドラッグ オン ドラグーン
Magnitude “Negative”

バテン・カイトス
嵐の城

ゼノサーガ エピソードⅡ
善悪の彼岸　上

ISBN4-7577-2036-X
C0193 ¥640E

定価 本体640円 +税

発行○エンターブレイン

西暦二〇XX年、謎の物体ゾハルの出現により、地球圏から離れることを余儀なくされた人類。遥か四〇〇〇年後――。約五〇万の惑星からなる星団連邦を形成していた人類は、正体不明の生命体グノーシスに対抗するべく戦闘用アンドロイドKOS-MOSを開発。KOS-MOSとその開発者であるシオンは次第に人類とグノーシスのゾハルをめぐる争いに巻き込まれていくことに。人類創世から終焉までを描く一大叙事詩『ゼノサーガ』のエピソードIIがノベライズに!!